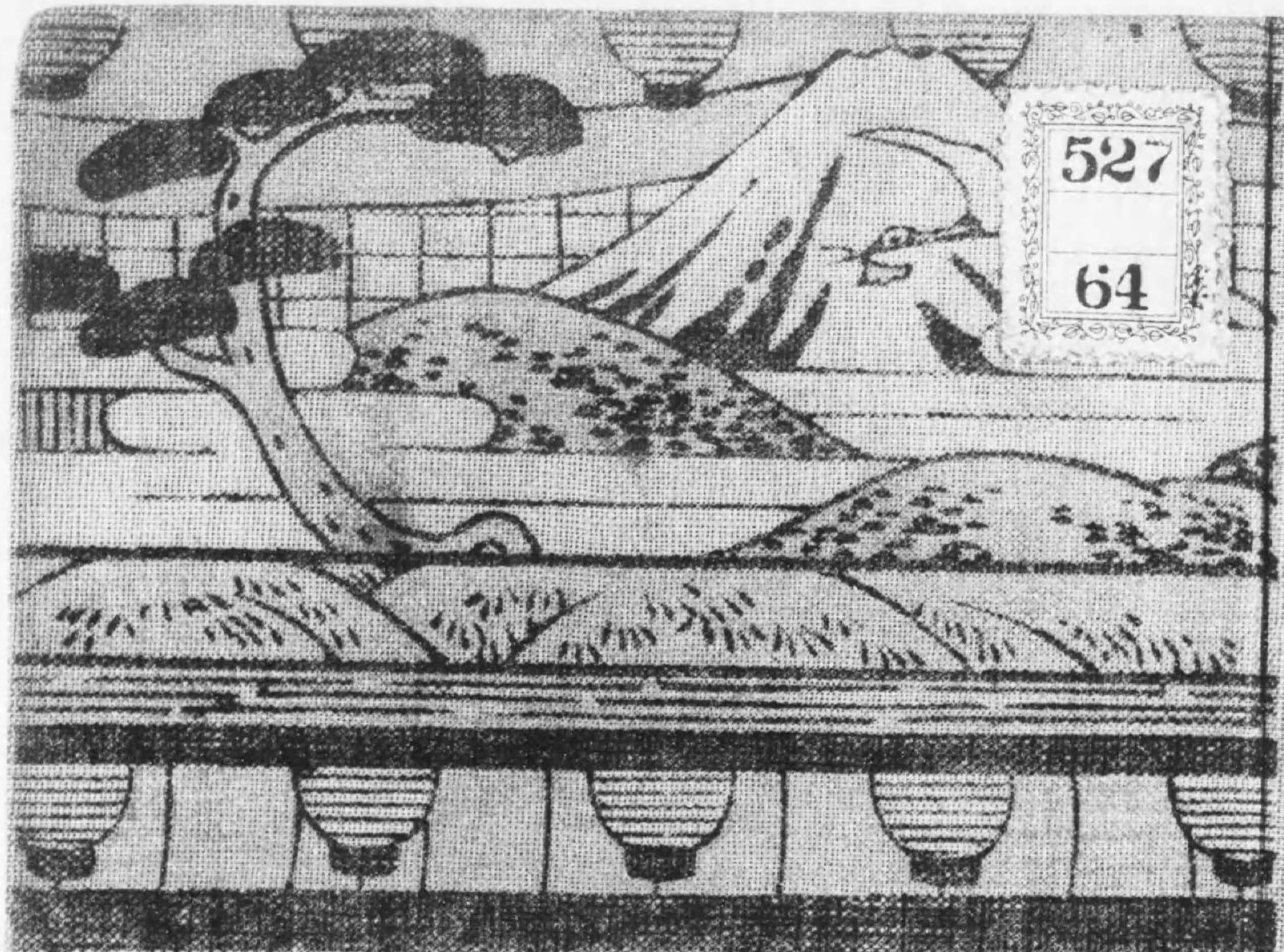
527
64

始



527
64

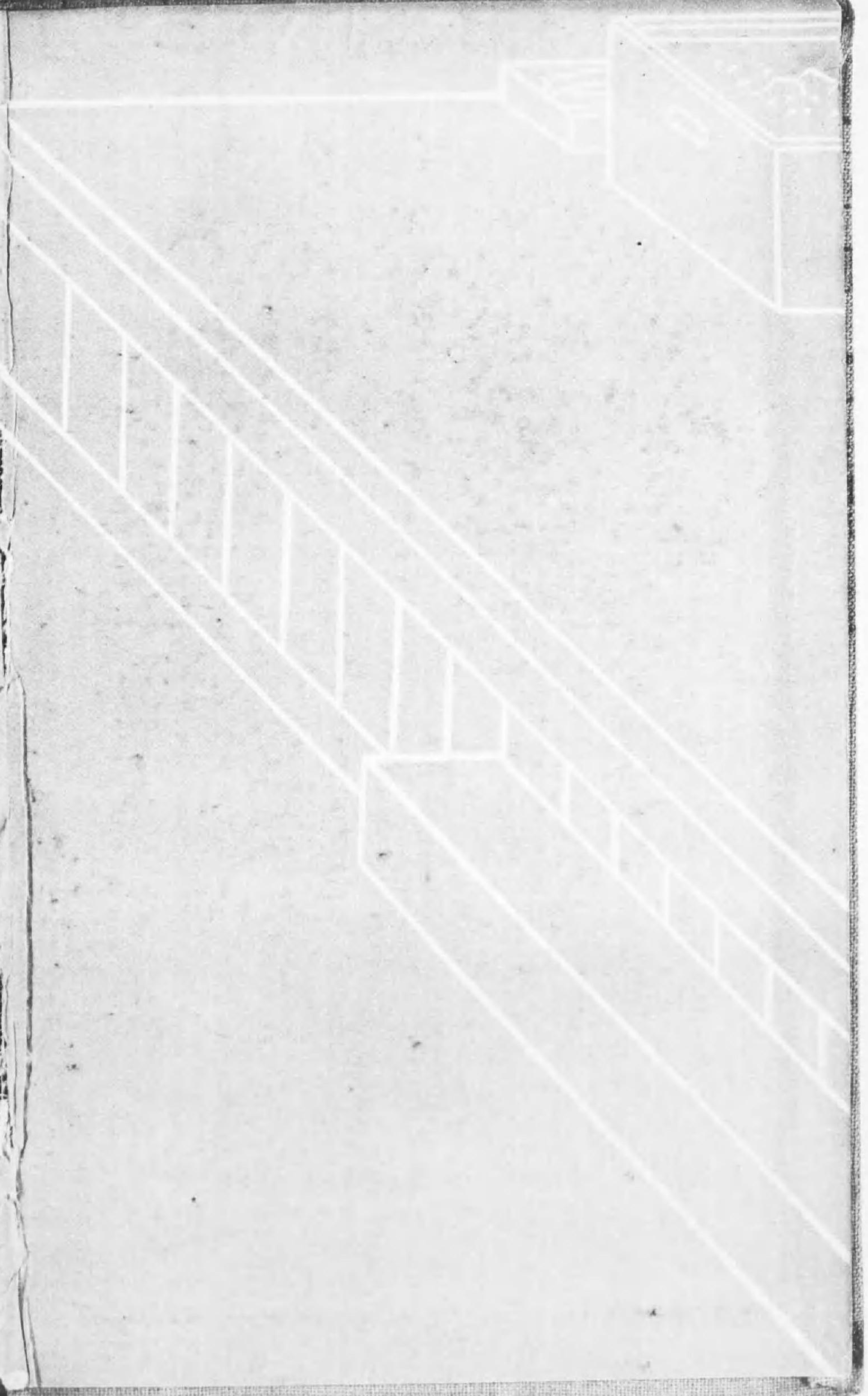
第三巻

てんにんむすめやぐらのにぎはひ
天人娘櫓賑

こひのたよりもんどしらいと
戀音便主水白糸

つもるなさけゆきのちもらひ
積情雪乳貰

やどなしだんしちしぐれのからかさ
宿無團七時雨傘



527-64

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎 共編

第參巻

世話狂言傑作集

大正
14 6. 27
内交

東京
春陽堂發行

目次

天人娘櫓賑（八百屋お七　三幕）……一
戀音便主水白糸（鈴木主水　六幕）……一五一
積情雪乳貰（乳貰ひ　二幕）……三〇七
宿無團七時雨傘（宿無し團七　二幕）……三七五
卷末に……一

挿繪目次

八百屋お七（八百屋の場）……口繪
八百屋お七（六代目半四郎）……八九頁の前
鈴木主水（五代目宗十郎）……一七九頁の前
乳貰ひ（眞葛ヶ原の場）……三二九頁の前
宿無し團七（岩井風呂の場）……四六七頁の前
挿繪に就て……本文の前

挿繪に就て

口繪の「八百屋お七」は、嘉永四年五月市村座の時の錦繪です。お約束の櫓の所ですから、卷頭に出しました。お七がしうか、傳吉が八代目團十郎、お杉が九歳です。本文の中の繪は、文政九年三月中村座の時の物で、卽ちこの卷に納めた正本でやつた折に出來たのです。共に筆者は三代目豐國です。

「鈴木主水」は、この卷に納めた改作の方がないので、嘉永五年三月市村座の「隅田川對高賀紋」の繪を入れました。筆者は三代目豐國。石段の中途に佇んで ゐる のが白糸で、坂本しうか、下に居るのが當時長十郎の五代目宗十郎です。御家人上りの色男といふのがすつかり柄に合つたさうです。

「乳貰ひ」はこれも錦繪がありません。止むを得ず大正二年五月に、新富座で今の延若が延二郎の時分に、これを上演した時の寫眞を用いる事にしました。延若の狩野四郎次郎元信、秀調の許嫁小雪で、上の卷の二場目眞葛ヶ原の場であります。

「宿無し團七」も大阪狂言といふので、錦繪が見當らないのです。それで、これも大正十三年九月、本鄕座で延若がやつた時の寫眞を入れました。かうして見ると、最近では延若が二つの傑れた大阪狂言を、我々の眼の前に見せてくれた譯です。下の卷二度目の岩井風呂の場で、延若の茂兵衞です

天人娘櫓賑

てんにんむすめやぐらのにぎはひ

天人娘櫓賑

序幕　　吉祥寺の場

役名　小姓吉三、曾我團三郎、赤澤十作、大澤團右衛門、侍角平、釜屋武兵衛、紅屋長兵衛、吉祥寺日和上人、八百屋お七、お七の母、下女お杉、お七の友達娘おしげ、同おたつ、同おもん等。

吉祥寺の場　本舞臺眞中に曼陀羅をかけ、須彌壇三つ具足大きく花を立て、欄間九尺宛振り分け天人の彫物あり、東の方は拔差のなるやうに天人好みあり、西の方障子屋體、總て吉祥寺本堂の體。日和上人緋の衣頭巾にて、同宿四人、皆々經を讀んでゐる。題目太鼓拍子木の音にて幕開く。

ト花道より同宿壹人出て來て、

同宿　まうし〳〵、和尚樣、どなたやら、お侍さまが、直々お前に會ふと仰りまする。

住職　ハテそれは心許ない、旦那衆ではないか。

同宿　いゝえ、つひに見馴れぬ侍でござりますが、いつもわせる釜やの武兵衛殿が、附いて參られました。

住職　なんぢや、釜やの武兵衛が附いてわせた。それなれば此の中、庫裡や客殿の屋根が洩つて、氣の毒なと話をしたに依つて、その勸化にでも、ついてやらうといふやうな、人でも來たかな。道理で、昨夕は、燈明に丁字頭が立つたが、大方そんな吉相であらう。マア〳〵こつちへお通りなされませと言へ〳〵。

同宿　畏りました。（トいつさんに花道へ入る）

住職　サア〳〵そこらを掃除せい。もうお經はいらぬ、勸化につく生佛か。有難い〳〵。

ト向う揚幕にて。

武兵　サア〳〵からお出でなされませ。

ト花道より　園右衛門羽織股引旅の形にて、侍を連れ出て來る。後より、武兵衛町人の形にて附いて來り。

住職　いやア、武兵衛殿か。

武兵　和尚樣、この間はお目にかゝりませぬ。

住職　仰る通り會ひませぬ、シテお客が有るなが。

武兵　成程、お客は彼方で御座りまする。ヘイこれが當寺のお上人で御座りまする。

住職　ナニ武兵衛殿、彼方が生佛さまかな。

武兵　これさ、何を仰りまする。

住職　イヤほんにそれよ、ツイからいうては、御合點が參りますまい。まづ〳〵これへ、お通りなされませ。

武兵　まづ〳〵、あれへ、お通りなされませ。

園右　何さま、さやう致さうか。（ト園右衛門上座へ通る。）

住職　やれ〳〵、好うこそお詣りなされました。お茶を上げませい。

園右　イヤ〳〵、あんまりお世話をなさるな。

住職　イエ〳〵、愚僧がこのやうに、世話を燒きまするも、持病で御座る。ナニ武兵衛殿、こなたさまはア、信者で御座るわえ、此の中、一寸お話し申した、お世話の筋でお詣りで御座らうの。

武兵　ハテお世話とは、何の事で御座りまするな。

住職　ハテこの人はとぼけさつしやるな。ほんに氣の毒な。
武兵　イヤマア、あんまり氣の毒がらしやるな。わしは覺えは御座らぬ。
住職　ハテあなたが今日のお出は、あの庫裡客殿の屋根の勸化で。
武兵　誰がいの。
住職　イヤさのみ、大層な費用でも御座りませぬ。尤もどいぶき瓦の下地ぢやによつて、足は長く手もよいぢや、のしもけたもよう御座りまする。
武兵　イヤサこれ、何をいはつしやるぞいの。
住職　去年の雪で、ぐつといたみました。こりや御大儀ながら、なされば後生前生の。
武兵　アヽかしましい。あなたのお出は、ちと詮議者があつて、お出なされた。そんな事ぢや御座らぬわいなう。
住職　なんぢや、詮議者があつて御座つた。
武兵　粗相いふまいぞ。
住職　勸化ぢや御座らぬか。
武兵　ハテ詮議者があるといふに。

住職　それぢやに依つて、今時の丁字頭と後家には油斷がならぬ。
同宿　何を仰ります。
武兵　これさ、疎忽をいふまいぞ、あなたは三河守範頼公の御家來大澤圓右衛門樣といふお方だ。めつたな事をいふまい。
住職　さては範頼樣の御家來にて御座りまするか。ハ、ア、不調法なる御挨拶、眞平御免下さりませい。
圓右　イヤ／＼出家の儀なれば、さして咎めるところもない。住職にちと訊き合はせる事があつて參つた。何事も、包まずおいやれさ。
住職　ハ、アそれは心得まして御座りまする。シテ何で御座りまするな。
圓右　さのみ氣遣はしい事でも御座らぬ。コレこの天人の影物は、曾我の後家滿江の建立召されたと聞いたが、左やうか。
住職　仰せの通り、この影物は、曾我の人々討死召されたる、その追善の爲に、後家御の建立で御座ります。
圓右　成樣、左樣承つた。時に、我が主人範頼公、ちと仔細有つて、此の寺の天女の顏貌に似たる

女があるならば、金子は何程なりとも遣さうと仰せあつて、諸處方々と詮議すれども、さてさて似た女もないものぢや。ところへ、これなる武兵衞、身が屋敷へ出入につき、聞けば貴僧の檀家の内で町人の娘に、よう似た女が有るとの事、いよいよ左やうかな。

住職　これは珍しい儀を承はりました、そのやうな事は一向心附きませぬぞ。

武兵　イヤイヤこれさ、さう云はつしやるな、コリヤこなたがいつち知らねばならぬ事だ。こなたの檀家のうちに御座るわいの。

住職　なんぼ、さう云はつしやれても、こつちに思ひ當る事はござらぬ。

武兵　そんなら、云ひますべい、本郷五丁目の八百屋久兵衞が娘お七、あれは天人の顏に生き寫しで、御座るわいの。

住職　ハテなう、イヤもう似たやら似ぬやら、拙僧檀家で心安う御座れども、お七が顏を、しげしげと見た事がないに依つて、そんな事、ねつから氣が附きませぬわい。

武兵　又そんな事を云はつしやるか。

圓右　イヤイヤ武兵衞、そりやさういふ事が有るまいものでもない。出家の事なれば氣の付かぬ事もあらう。さて住職、そのお七といふ娘、これなる武兵衞が主人に申し上げて、奉公に出す筈。この方より久兵衞が後家の許へ、度々使を遣はしたれども、承引せぬ故、今日拙者が參つたれば、お七は宿にをらず、聞けば、この寺へ來てゐるといふ事、よつて武兵衞が案内で參つた、サアお七が居るならば出し召されい。お七を見ようばつかりに參つた。住職サアサアお七を出さつしやい、出さつしやい。

住職　成程、心得まして御座りまする。寺で女をかくしませうやうが御座りませぬ、をりさへ致しますれば、お前へ出しませう、が、今日は居りませぬ。

武兵　イヤこれ、嘘をいはつしやるな。

住職　ナニシニ出家が僞りを申しませうぞ。お七儀はこの間、ちと氣色が惡うて、この寺へ參つて養生致して居りました。御存じかも知れませぬが、拙僧めは、一家の事なれば心安うして、一兩日、逗留致して居りましたが、昨日連が參りまして、鎌倉へ參りました、ハテ、嘘でない證據は寺中を探してなりと、御覽じませ。先づこゝには、居りませぬ。左やうに、思召して下さりませ。

武兵　そりやアこなさん、爲になるまいぞえ。

圓右　イヤイヤこれ武兵衞、成程和尚の云やる通り、をる事なれば寺を探して見れば知れる事ぢや

が、嘘も有るまい、シテそれは何時歸らう。

住職　されば、その程は知れませぬ。

園右　それも知れぬか、好う御座る。然らば、いつ迄もお七がこの寺へ歸るまで、待ち合はしませう。面倒に有らうが、われ〳〵主從こゝに留めて貰はずばなるまい。左う心得ておくりやれ。

住職　それはハヤ、何とも。

武兵　どうでごんす、厭になりませぬか。

住職　いやと申す事も、御座りませぬが、どうも御不自由で御座れば、御逗留なされても、ナア弟子共。

園右　イヤそりや苦しう御座らぬ、主命なれば大事ない。先づ落着きませう、容し召され。

住職　どうとも、お好きになされませ。

ト住職不承々々にいふ。同宿は住職と目くばせして箒を立てる。

園右　かの曾我の後家の建立めされたは、この天人ぢやな。

住職　左やうさうに、御座りまする。

園右　いかさま、此の天人に似たお七ならば、たいていの娘ぢやあるまい。アヽ見たい〳〵。

住職　不調法な細工人で御座りまする。ツイどうでも遣りつ放しに、彫つて置けばよいに、お七に似たやうに、なぜ又作つたやら。

トこの時、花道より侍一人走り出て來り。

侍　園右衞門さま、これにお出なされまするか〳〵。

園右　コリヤ角平ではないか。

角平　モシ〳〵園右衞門樣、小田原から使者があつて、事の變もありさうなと申して參りました。お前樣にも一先づお歸りなされ。拙者めは方々申し遂しに參れば、早やお暇申し上げまする。

ト云ひ捨てゝ入る。

園右　サア〳〵もう長居はならぬわえ。家來共、供をせい〳〵。

住職　モシ〳〵もうお歸りなされまするか。

園右　その内〳〵。（ト園右衞門は侍を連れて、逸散に花道へ入る。）

武兵　南無三寶、コリヤこゝろもとないわえ。

ト駈け出す、住職止めて。

住職　アヽコレ〳〵、武兵衞殿。

武兵　何んだ〳〵。
住職　ほんの、湯漬でも參らぬか。
武兵　おきやアがれ。（ト駈けて入る。）
住職　ヤレ〳〵なんと弟子共、あいつらが食ひ潰してゐるのかと思つたら、急用が出來て歸つたによつてよい事はよいが、あの急用もいつやらのやうな、えい〳〵わあいやぢあないかな。
同宿　どうやら、それらしいもので御座ります。
住職　どうぞ、お七の家へ、今日の樣子を知らせてやりたいものぢや。
同宿　私が一寸、知らせて參りませう。
住職　そんなら大儀、早う〳〵。
同宿　心得ました。（ト同宿一人花道へ入る。）
住職　何ぢやゝら、心忙しいやうなつたわえ。

ト住職同宿殘らず下手へ入る。唄になり、向うより、お七の朋輩おしげ、おたつ、おもん、娘の形にて出て來て。

しげ　おもんさんとした事が、お前のやうな遲い足が有らうかいなう。

たつ　サアもう、こゝが吉祥寺さんぢやわいなあ。
もん　ほんに、まあこゝが吉祥寺で御座りまするかえ。テモ早う參りましたなあ。
しげ　サイナアお七さんが、この頃氣色が惡いといふて、このお寺へ來て御座んすと聞いたによつて、お前方を誘うて、見舞に來たのぢやわいなあ。
たつ　ほんにマア、あのお七さんの病ひはどうした病ひやら、氣の毒な事で御座んすなあ。
もん　それでお袋さんも、いかう苦勞になされてぢやわいなあ。
しげ　あれ見さんせ、さういふ内に、お七さんのお袋さんが。
三人　見えるわいなあ。

ト唄になり、向うより紅屋長兵衞が紅粉の荷物を背負つて先に立ち、お七の母、好みの拵へにて、供の者大勢附いて出て來る。

長兵　京紅粉や、寒の紅。（ト賣り乍ら、やつて來る。）
しげ　これは、お七さんのお袋さん、お參りなされましたか。
母　これは〳〵、近所の娘樣たち、なんとして、こゝへは御座んしたぞ。
たつ　お七さんのお見舞に、

三人　來やんしたわいなあ。

母　朋輩といふものは有難いもの、聞かしやんせ。こちのお七の見舞に來たといなう。

長兵　それは、ほんに氣の毒な事でごんす。そんなら、お七さんへのみやげに、この紅粉を買はつしやれ。

母　これいなう、長兵衞どの、たしなましやんせ。わしがお七のところへ土産は買ひまする。マアそのやうに云はずと、よう御座つたと挨拶でもさつしやれいの。

長兵　ハテけうな事を、やつかまつしやるわ。お前方が青物を押しつけて、賣りたがらしやるも商賣。わしが摑み附いて賣りたがるも商賣、ハテこの寺で人を殺したがるも商賣で御座るわい。

母　これはしたり、坊さんたちが聞きまするわいの。

長兵　聞いてもようごんす、あつちの損の行かぬ噂だによつて。

母　まだいなう、ほんに商人といふものは、づか〳〵と口をきゝたがる事ぢやぞ。

長兵　これはお袋、人聞きのよい、こなさんは錢儲けする事は、厭でごんすか。

母　イヤそりや世帶持つて、稼ぐ者の儲ける事、いやがるものはなけれども、こなさんのやうに儲けたがるものは、又とあるまいわいの。姐さんたち聞いて下さんせ。こゝへ來る道で、ぬしに逢ひましたによつて、幸ひお七とは仲好し、ちと氣を慰めて貰はうと思うて、道から誘うて來たに、矢張みち〳〵京紅寒紅ぢやわいの。ほんに今日一日商賣せぬとて、乞食にもならつしやるまい。ちつとたしなまつしやれい。

長兵　これさ何を云はつしやる。いつそ乞食になればこの苦しみはごんせぬわいの、人間並に門を列べてゐるに依つて、近所のだしつこ、ばんぜに、節句錢、乞食になれば、この苦しみは御座らぬわいの。

母　ほんにそれなれば、矢張坊さんで御座ればよいに、何故に還俗さつしやれたぞいの。

長兵　わしが坊主を落ちたのも、みんな此の鼻が落しました。

母　何故、鼻が落しました。

長兵　鯲でも鮪でも、兎角煩惱の元はこの鼻にきざし、別して蒲燒のさんしよ醬油めが、こりやまた鼻ばかりぢやない、無性に何やらが嵩ぶつて來て、ツイ門番の娘を孕ましたが因果の塊、鮒がおこし米をせり合ふやうに喰べをる、ところが五人口、これが油斷して、どうして喰はれるのぢやと思し召すぞ。

母　それはホンニ、餘程大儀な事ぢやわいなあ。それについて、いつぞ、こなたに聞かう〳〵と思

うて居たが、こなたの名を人が、べんちやう〳〵と云ふが、ありやこなたの俳名か、味な名で御座るの。

長兵　何をしをらしい、俳諧して居るやうな世界が、どうして有るものぞ。あれは、こなたの娘が附けたのぢや。

母　ナニお七が附けたとは。

長兵　ハテおれが名は、紅粉やの長兵衛は長いから、べにちやう〳〵と呼ばれる。それから、何處ともなう、こゝでもかしこでも、べんちやう〳〵と云ひまする。

母　坊さんのやうな名を附けてゐると思うたが、それで讀めましたわいの。

長兵　イヤ元が坊主落ぢやに依つて、紅長といふも無理ではごんせぬ。時におらが名づけ親は、何してぢや。

母　さればいの、兎角あれが足は遲うて、埒があくものではないわいなう。

しげ　アレ〳〵さう仰るうちに、向うへお七さんが、

皆々　ござんしたぞえ。

ト出の唄になり、花道よりお七振袖衣裳にて出る。後より下女お杉日傘を下げ、店の者附いて出て来る。

たつ　お七さん、御座んしたか、この頃はお目にかゝりませせぬな。

母　オヽお七、おぢやつたかいの、遲い足ではあるぞ。

お七　かゝさん、遲かつたかえ。隨分、お前に追着かうと思うても、早う歩けば、風で着るものが、どうもこのやうに、（ト裾を振り返す思入して。）どうも歩かれぬわいなあ。

長兵　オヽどうもかうも、可愛しうてなりやせぬわいなあ。

お七　なに云はしやんす、べんちやうさんのまた掛けさんす程に。

母　ありや何んの事ぢや、べんちやうさんの掛けさんすとは、マアこなさん何をかけさつしやるぞ。

長兵　これはならぬ、この野暮めには困つたものだ。

母　でもかけるとは合點が行かぬわいの。

長兵　イヤサそれは何で御座る。わしが鷹揚に掛け商ひするによつて、掛け倒れにならうと、おらが親方がお叱り、コレ親方必らず掛けるのぢやごんせぬ、現金にいとしいのでごんす。

母　ハテそなた衆は、をかしい事をいやるの、現金の、掛けのぢやのと、いとしがるも賣り買ひのあるものかいなあ。

お杉　これはならぬぞ、まうしお前様も、おたしなみなされませ。ホンにもう可笑しうて、どうもならぬぞ。

お七　アレ見さんせ、杉がお前を笑ふぞえ。

母　さればいの、憎い奴ぢや、何故そのやうに笑ふぞ。

お杉　イヤモウ、お前さまが、あんまり野暮ぢやによつて、それがお笑止で、をかしう御座んすわいな。

母　その野暮とは、歌留多のなゝぼう、やぼうの事かや。

お杉　あんな事ぢやわいの、お七さん、お聞きなさんしたか、いやもうコリヤをかしいぞ〳〵。

長兵　ア、コレ〳〵あんまり笑ふな。お袋を野暮だと思うて笑つたら、結局お杉手前が野暮であらうぞよ。

お杉　そんなら、あなたは野暮ぢやないかえ、粋さんでござんすかえ。

長兵　オ、粋とも〳〵、品川から板橋まで、通りぬけた通りものだぞ。

お杉　ハテなう。

母　これ〳〵、そなた衆は通り町ぢや、横町ぢやのと、そりやまあ、何の事ぢやぞ。

長兵　コレお袋、そのやうにとぼけさつしやるな、雀は百になつても踊は忘れぬとやら、あんな娘を持つてかうとうな顔をして御座るが、その昔はお前もきつい色師であつた、といふ噂でごんすぞえ。

母　何を、途方もない事を、云ふ人であるぞ。

お七　そんなら、かゝさん、お前も若い時は色をさんしたかえ。

お杉　コレまうし。(ト紅長と顔を見合はす。)

母　ホンニ此の子とした事が、幾つになつても、つがもない。イヤモウ物が云はれぬわいなう、そんな事人中で云やんな。ほんに惘れる、そこな紅長がわつけもない事云ひ出すから、起つた事ぢやわいの。

長兵　ハテそのやうに、腹を立てぬものでごんすわい。

お杉　シテお袋さまも、丁度そのお七さんのやうに、振袖を召された事も御座んせうな。

お七　ほんに、かゝさんの振袖の時も有つたであらうナ、ナウ杉。

母　ハテわしぢやとて、振袖の時もなうて、何うするものぢやぞいの。

お七　まうし、かゝさん、アノわたしやお前に云ひたい事が御座んすが、いつそ云うてのけう。

母　何ぢやぞいなう。

お七　あのな。

母　何ぢやぞいなう。

お七　アノナ、アノ此の吉祥寺の吉三さんは可愛らしいお若衆さんぢやによつて、どうぞわたしと女夫にして下さんせいなあ。

長兵　ヤア／＼、大きな事を放り出したな。

母　イヤこれ紅長どの、つがもない。（ト四邊を見廻し。）畢竟誰も外に聞かねばこそよけれ、いかに頑是がないとて、そんな事云ふといふ事が有るものかい。杉も杉ぢやわいの、嗜まうぞ、傍に附いてゐて、あんな事云はすといふ事が有るものか。ほんにやれ／＼、われはマア、悧れるぞ、しやうじんの娘の子と、小袋には油斷がならぬと、いつの間に、そのやうな事覺えたやら、こりやあの吉三樣はナ、わしが姉樣、そなたの爲には叔母樣のお主、十郎祐成樣のわすれがたみのお子で、そちやわしが爲にはお主樣ぢやわいの、殊におつゝけお出家遊ばすものを、どうして添はるゝものぞ、つがもない、重ねてそんな小癪な事いふまいぞ。

ト　お七淚ぐむ。

お杉　これはしたり、又おむづがるか、それでは又氣合が惡うなりますぞえ。

母　何ぢや、今ので泣くか。

長兵　イヤこれさ／＼、ハテお前の今仰つた事は、あれは嘘で／＼、ござんせうがな／＼。

母　イヤわしや何も嘘は吐きませぬぞや。

長兵　ハテこれさナ、あれ。（ト母へ目交ぜして思入。）ナ嘘で／＼御座りませうがな。ほんぢやといふと、いつでもナ、氣やいが惡うなつて、どうもかうもならぬよつてナ、合點か、嘘で御座りませう。

母　オ成程々々、コリヤ嘘ぢやわいの。

長兵　そんなら嘘で御座りまするか。

母　今のは嘘ぢやによつて、どうぞ、望みの殿御を持ちたくば、早う達者になつたがよい。なう、紅長殿。

長兵　さうとも／＼、達者でなければ、先づ子が造られませぬぞ。

母　それ／＼、望みの殿御を取つて、わしも孫を抱きたう御座りますわいの。

ト　お七、機嫌を直して。

お七　かゝさん、そりや、ほんまかえ。

母　なんの、嘘を吐かうぞいの、いとしそなたの云やる事ぢやもの。
お七　そんなら、わたしや、嬉しうて〳〵ならぬわいなあ。
母　サア嬉しくば、早う達者になりや。
お七　イエモウそれさへ叶へば、わたしや、直に達者になりやんすわいな。
母　それ〳〵何ぢやゝら、目に一杯涙をもつて、どれ〳〵。（トお七が目を拭いてやる。）
長兵　エ、かゝさんに可愛がられて、うれしいな、チト笑ひ給へ。
お七　なんで御座んす、をかしうもない事が笑はるゝものかいなあ。
長兵　デモちと笑ひなさい。
お七　厭ぢやわいの。
長兵　イヤでも、ヤツくつ〳〵。（トこそぐる。）
お七　アレ悪い事さんすな。
長兵　ちつとは笑はせねば、男が立たぬ。
　　トあちこち擽ぐる。お七笑ひ出す。
お杉　そりやこそ、お七さんの笑ひが出たぞえ〳〵。

　　ト皆々笑うて居る。題目太鼓になり、花道より曾我の團三郎出て來て。
團三　これは〳〵、よい所へ來たさうな。いづれもいかう御機嫌がよいわえ。
お杉　イヤ團三郎さん、お出なされましたか。
團三　これはお杉か。伯母御モシ何がをかしう御座りまする。
母　オ、團三郎殿、御座りましたか、何がをかしいやら、取り止めた事は御座らぬわいの、娘のお伽で笑ひますわいなう。
お七　團三郎さん、お出なさんしたかえ。
團三　お七さんかどうぢや、この間はどうで御座るの、まだ色合が優れぬやうなぞや。（ト紅長を見て。）イヤ紅長殿、これに御座るの。
長兵　左様で御座りまする。お七殿もずんと好う御座りまする。此の間はモウそろ〳〵拵へる段になりまして御座る。
團三　何を拵へまする、小刀細工でも拵へまするか。
長兵　アイヤ摺粉木が拵へたいというて。
團三　それは似合はぬ事で御座るが。

長兵　成程、途方もないものが好きで御座りまする。

母　何を、つがもない事。

園三　イヤ〳〵さうでない、あの人のやうな氣の輕い人の有るが仕合せ、養生で御座る。コレ病ふ主いぞ、そなたにやらうと思うて、よい繪を買うて來ました。（ト懷から錦繪を出してやる）それに、ちと氣晴しに芝居でも見たがよい、おれが見物に連れて行かう。

お七　いゝえ、わたしや、芝居より望みが御座んす、お前聞いて下さんすとよいけれど。

園三　それは安い事ぢや、何なりとも望みをいうて見や。

母　コレお七、めつたな事をいふまいぞよ。

園三　イヤ不愍さうに、何でも云はつしやれ、叶へてやらう〳〵。

母　いやさうぢやない、まだ子供ぢやによつて、あとさきの考へがない。殊にそなたは可愛がつて、甘やかすによつて、善い事ぢやと思うて、どんな事云はうも知れぬ程に、あんまり問うてやらんすな。イヤそれはさうと、今日は十郎樣の立日ぢやの。

園三　成程左やうで御座りまする。それゆゑ今日もこゝへ參りました。さるものは日々に疎しと、申せども、どうした事やら、御兄弟の御事は、なか〳〵に忘られず、明けても暮れても。

ト云ひさして泣く。後家ほろりとして。

母　ナンノ忘られうぞ、わしらが姉御に逢ひに曾我へ行けば、別して祐成樣のいたいけなおもざしを思ひ出して、目に付くやうで御座るわいの。一とせに二三度ならで、お目にかゝらぬ、わしでさへ、そのやうにお慕ひ申す御兄弟樣方、まして、こなた衆は片時も離れず、御奉公申し上げたお主樣ぢや、忘らるゝものぞいなう。さうして、今日はお墓詣りかえ。

園三　成程、御廟參は、毎日のやうに參りまするが、今日は別して用事があつて參りました。

母　そりや、どんな用で御座る。

園三　ハツ今日は御剃髮させ申す爲に。

七杉　エ、

ト母、お七、お杉の三人驚く。園三郎個れて。

園三　ハテぎやうさんな膽のつぶしやうかな。吉三樣に御出家させませう爲に、當寺へお願ひ申して置きましたが、今日御剃髮召さるゝ筈。それがどうぞしましたかな。

トこの臺詞をいふうち、お七紅長を突き出す。園三郎尻目にかけて見てゐる。

母　成程、それはハヤ豫ての事とは云ひ乍ら、ほんにまあ結構な事のやうな、惜しいやうな事でも

あり、シタガそのやうに急でなくとも、大事有りさうもないものぢやなう。

園三　イエ〳〵左やうで御座らぬ。どうも急に出家させ申さねば悪い事が御座る。殊に日頃吉三様には兎角御出家を厭がつて居さつしやるによつて。

お七　アレ吉三さんは厭ぢやと、云はしやんすもの、無理な事ばつかり。

ト お七泣き出す。お杉止めて出て。

お杉　コレこゝなお子は、まだ氣やいが悪うなりまするぞ。

お七　イヤわしや、それでもこんな事は厭ぢや〳〵。

長兵　サアなんでもおれが呑み込んでゐるから、よいてさ〳〵。マア〳〵こつちへ御座れ〳〵。

ト 合方になり、おしげ、お七の手を引き、お杉附いて、その外女形みな〳〵奥へ入る。お七の母、氣の毒な思入。園三郎あきれてゐる。

園三　まうし〳〵、叔母御、お七は何をあのやうに腹立てますぞ。

母　コレ園三郎殿、親の口から、近頃云ひ悪い事ぢやが、お七めは、若旦那に、どうもならぬわいなう。

園三　吉三様に、どうしましたぞ。

母　エ、あの、何ぢやわいの、吉三様と女夫にならねば、ならぬと云うてゐるわいなう。

園三　あのお七が。

母　サアこの間の病ひが、みんなそれで御座るわいなう。これは近頃叔母が未練な事いふと、思はしやらうが、知らるゝ通り、女の子といつては、あれたつた一人、月とも花とも詠めて、あの子ばかりを力に、永らへて居ります。その大事のお七が、それを病にして死んだら、わしは、もう生きても死んでも、未來まで取り損ひまする。こゝが慈悲、情、なんとあなたが御出家なさらぬというて、さして障る事も有りさうもないものぢやによつて、何卒還俗させまして、お七めと女夫にする事はなるまいかいの。情といふはこゝの事ぢや。なんと此の願ひは叶ふまいかなう。

園三　コレ伯母御、お前は町人八百屋久兵衛の女房になつた故、性根までさうした未練なこゝろにならしやつたな。あなたは何誰ぢやと思はるゝぞ、河津様の御孫、十郎祐成の御嫡男、八百屋の婿にして、草葉の蔭に御座る御兄弟が喜ばつしやらうか、憎まつしやらうか。いかに曽我の人々の衰へたればとて、十郎の息子の態を見よと、後指をさゝれても、お七が不便には代へられぬかいなう。伯母者人。

母　イヤモウ云うて下するな、謝まりました。

團三　殊にあなたは。

母　イヤサ尤ぢや、拜みまする。血の道が起る、モウ云うて下さんすな。

團三　かういうても、心強い氣でいうでは御座らぬぞや。

母　サア聞き分けてゐまする、今のは、云ひ損ひぢやに。手を合せまする。容して下され。たゞ何事も子故の闇、面目ないわいなう。

ト思入、唄になり、後家は奥へ入る。團三郎殘り。

團三　人界の哀愁戀慕といふものは、是非もないものぢやなあ。分けて親子の愛戀は聖人も賢人も、或は胸を焦し、我を恨み、悲嘆の泪に人目を忘るゝ、まして況んや、久兵衛が後家の一人娘が病ふ程の思ひぢやもの、道理々々、とは云ふものゝ、若旦那様には心強くも御剃髪をおすゝめ申さねばならぬわい。

ト地を走る獸空かける鳥、と天鼓の謠になり、花道より、小性吉三羽織袴にて、花を持ち、後より十作袴股立にて、附き添ひ出て來る。

十作　若旦那樣、もはや御寺に御座りますれば、お靜にお歩きなさりませ。

吉三　梅ケ香に來啼く、梢の鶯も經讀み鳥と敎へしは、阿伽の手向の法の門出。

十作　花もの言はねど、香に匂ふ、蕾の花も法の庭、若旦那樣。

吉三　十作、おぢや。

ト兩人本舞臺へ來る。團三郎入れ替り、下手に控へ、

團三　これは〳〵若旦那樣、この間は御機嫌を伺ひませぬが、先はお變りもなき、御尊顔を拜し、恐悅に存じ奉る。

十作　これは兄者人、今日は吉三郎樣には、師の坊の御用で、染井へお出なされましたゆゑ、お供致して參りました。

吉三　コリヤそちが今日の形といひ、つひに變りしその禮儀は。

團三　そりや申す迄も御座りませぬ、お主樣なりや、敬ひませいで、何と致しませう。

吉三　大俗の境界にこそ、君臣父子の尊敬も有らう。今日よりは剃髮染衣の身となれば、氏も位もなき身の上、主從の尊敬は受くるに及ばぬ。

十作　スリヤあなたには、今日愈々御剃髪　それでは嘸かし　お七殿。

團三　ヤ。

十作　イヤ惜しい處で御座りまする。

團三　そりや何を申す。シテ御持參遊されました　その花は。

吉三　サア此の花は、父君のお前へ手向け、回向を申さんその爲に。

團三　それは一しほ、御供養になりませう。どれ拙者が活けて差し上げませう。

ト合方になり、花を活ける。

十作　兄者人、なんと見事な花では御座りませぬか。

團三　まことに、咲きも殘らず散りもせで、成程今は滿開ぢやなあ。

十作　サア吉三郎樣のお身の上は、丁度この花の通り、今日御剃髮なさるれば、又來る春もなき世捨人、子孫あらせじとこゝを斷ち、かしこを切るとの太子の御遺言も、こりやこれ取るに足らぬ佛者の言葉。吉三郎樣は誰あらう、河津樣の御孫君、出家をとゞまり、御還俗を願うたらば、兄者人。

團三　ヤ。

十作　その花を木咲のまゝ、又來る春も眺めることは御座りませぬか。

吉三　今日只今出家となれば、最早俗身の顏の見納め　十作、その鏡臺をこれへ。

十作　畏りました。（トやはり合方にて、十作傍より鏡臺を持ち來り、吉三の前へ直す。）若旦那吉三郎樣それなる鏡、御覽あれば、則ち父君祐成樣に生寫し。

吉三　スリヤ我が顏が、父上に。

ト思入有つて、鏡にて面差を見る。誂へ、笙の入つた合方に成り。

子は親に似るなるものを、松山の、戀しき時は鏡こそ知れ。父上樣、お懷しう存じまする。

トほろりと思入。

十作　その御落涙は御尤、現在あなたのお顏にさへ、けふを別れと思し召すものを、われ〳〵二人が富士の裾野で、御兄弟にお別れ申せし心のうち、御推量なされて下さりませ。

團三　達つてお供を願ひますれば御勘當、歸れとあるお詞に從ひますれば、眼の前に討死遊ばす御主人樣を、見捨てゝ歸る途すがら、四つ連なる雁金の、二つは獵師に打ちとられ、二つは越路へ落つるごと、心細くも踏む足の、曾我へ〳〵と向へども、

十作　心は後に狩屋拍子木、はや三更の時を經れば、今こそお忍びなさるゝ時節到來、五月雨の涙の雨に裾も裳裾もぬれて、干す間も暫らく〳〵と立ち憩へば、十內がヤレ十作か急いて歩め、互に詞は早れども、早らぬ足も未の上刻、裾野の方に篝のひかり、天地を動かす鯨波の聲、われ

團三　われは顏見合せ、只今こそ十八年の思ひの胸の火、ひらけて輝らす狩屋の篝火、次第々々に消えゆく篝。見るに心も消え〴〵と、間遠くなるは事果てしかと、かしこに呼はる聲聞けば、曾我の五郎時致を、御所の五郎丸組留めたり、

十作　これを見捨てゝ、おめ〳〵と何とて曾我へ歸られん、弟來れと走せ行くうち、

團三　兄の十郎祐成は、仁田の四郎が討取つたりと、呼はる聲々、

兩人　遙かに聞いて、兄弟がすご〳〵歸る心のうち、御推量なされて下さりませ。

ト此時吉三向うを見渡し、すつと立つて花手桶を拔討に見事に切る。

兩人　これは。

吉三　出家せぬぞ、剃髮せぬぞ。

團三　そやり何を仰りまする。

吉三　此の吉三郎は武士の倅ぢやによつて、武士の道を立てねばならぬ。

ト團三郎悧れたるこなしにて、ちつと擦り寄り。

團三　コレ若旦那、氣がちがひましたか、但しは座興で御座りまするか。ハヽア聞えた、扨は只今御兄弟の御最期を歎きましての物語、それ故にお心が變りまして御座りまするか。

吉三　くどい〳〵、父上や時致樣の仇討、倶に天を戴かぬ武士の敵、狩屋にての働きはあつぱれ面目、仁義と云ひ勇と云ひ、類稀なる父上叔父君、やみ〳〵と人手にかけ、剩へ叔父君の御首打つたは何事ぞ。さすれば武將頼朝、まこと賞罰知らぬ盲目大將、左やうな武士に何をか恐れ、世にも稀なる人々の跡を空しく朽果させん、われ今日より武門に歸り、十郎祐成が子孫にかゝる英雄ありけると、後の世までも譽を殘し、討死ありし人々の修羅の忘執晴さにやならぬ。その方も今日より魂磨き忠義を勵め。出家は厭ぢや、還俗するのぢや。

團三　エヽ、お情ない、若旦那。それ程の事辨へぬ十内でも御座りませぬが、寸善尺魔とはあなたさまのお身の上、奸曲非道のやから有つて、曾我殿儕の根を斷ち、葉を枯らし、枕を高くなさんと計る、それを知りつゝ御還俗の思召は、ム、聞えた。

ト思入にて、十作をぐつと引附ける。

十作　こりや兄者人、何をなされまする。

團三　何をするとは知れた事、狩場に於て曾我殿儕の討死ありし御物語、それのみならず、若旦那の出家を厭ひ還俗なさらうとの思召は、ム、分つた。そちや、あのお七を、若旦那に仲介いたし

たな、あなたさまの還俗なさるゝは、女房が持ちたい故で御座りませう。こればかりは十内が何處までもお止め申さねばならぬ。御還俗とは思ひもよらぬ、なりませぬぞ。

吉三　エヽ口惜しい、男には生れたれども、女子にも劣つた惰弱なと、家來にまで恥辱をうけるか、殘念な。

ト腹を切らうとするを、十作止めて。

十作　モシ若旦那、何のあなたが切腹には及びませう。コレ兄者人、アノ吉三郎樣がお七に心があらうと、こなたに疑ひ起させたも、この十作。それも、あのお七めが、娘ごころの一筋に若旦那を思ひつめてゐる、心根が不便さに、還俗させまして、夫婦にしたらと、花によそへての訴訟が、ツイ吉三郎樣への疑ひ、コレ兄者人、ちつともあなたに色がましい義はない程に、疑ひ晴して下さりませ。

團三　是非とも、御出家おすゝめ申す。

十作　それも後迄、十作がきつと返事を致しませう。

吉三　それぢやというて。

十作　ハテマア奥へ、若旦那。

團三　御還俗はなりませぬぞ。

吉三　聞く耳、持たぬ。

トきつとなり、刀を持ち立ち上るを、團三郎袖をとめる。それを振り切り、眞になつて、吉三、十作奥へ入る。

團三　エヽ是非に及ばぬ。若旦那の御行跡。アノ氣色では出家得脱思ひもよらぬ。とあつて、親御の御遺言、重い仰せをうけ乍ら、わたくしに還俗さつしやれといはれぬ義理。お七が色に引れての還俗か、又一途に武士道を立たいといふ御所存か、何とも以て合點行かぬ。

ト思入。向うにて遠寄せを打つ。團三郎驚く。

ヤアあの太皷は、まことに遠寄せ、諸處にてあの狼煙、油斷のならぬ世の有樣。何にもせよ、この場の樣子を滿江樣へ、それ。

ト題目太皷になり、團三郎向うへ入る。奥より紅長うろ〳〵出て。

長兵　アレ〳〵とんだ忙しくなつて來た。おれはこゝにかうしてはゐられぬ。とんだ時に行事に當つた、まことに困る。（ト捨臺詞云ひ乍ら、花道へ行つて、）イヤ〳〵おれが歸ると、又あのお七坊が。といつて行事なりや行かずばなるまい。行つてはアノお七坊が、（トいろ〳〵思入して。）さ

うだ。

ト思入有つて、向うへ入る。やはり、どん〳〵にて、奥より住職先に同宿出て。

同宿　そりや、一揆が起つたぞ〳〵。

住職　どうした〳〵、アノ太皷の音か〳〵。

同宿　また先々月のやうに、軍が起つた。

住職　南無三寳、それは困つたものぢやわ。おほかた最前注進のあつた、あれであらう。それなれば十里ばかり先の事であらうが、そのうち近いてくる事であらうぞ。用意をして置けよ。

ト此のうち、始終どん〳〵にて、是より早めに打ち、花道より大勢いろ〳〵仕出の形にて出て來り、舞臺で行き違ふ事ある。花道より、團右衛門以前の形にて、侍大勢附いて出て。

團右　この寺に、人はをらぬか〳〵。

同宿　アイ〳〵、人はをりまする〳〵。

團右　こりや〳〵、隨分盜人の用心せい。酒でも水でも一杯くれい〳〵。

ト同宿茶を汲んで出す、

團右　こりや〳〵、この寺に、八百屋久兵衛の娘のお七がをらう、どうだ〳〵。

同宿　成程、それは。

住職　イエ〳〵、この寺にそんな者は居りませぬ〳〵。

團右　居ぬが定か、隱すなよ。

住職　何しに、隱しませうぞ。

團右　この詮議は、構まぬ事だ。家來ども、から參れ。

侍　へ、ア。（ト皆々入る。）

住職　コリヤ窘め、お七親子の居る事を、めつたに云ふな〳〵。

トやはり、どん〳〵にて、花道より、紅長大肌ぬぎ、鉢卷にて、棒を持ち、駈けて出て來る。

皆々　こりや、紅屋の長兵衛どのか。

長兵　和尚樣か、ア、咽喉が乾いて云はれぬ、水をくだされ〳〵。

皆々　サア〳〵、水々。

ト出す。取つて、忙しく飲み。

長兵　存じも寄らぬ戰は、大磯小田原あたりでの事ぢやが、あのやうに、狼煙を上げて、やかましくつてならぬ。惡い時にわたしやあ、月行事に當つて急しくつてならぬ、ところを駈けつけて來

たは、ひよんな事が御座る。

住職　なんだ／＼。

長兵　この騒ぎを幸に、あの範頼殿が、八百屋のお七を出せ／＼というて、本郷五丁目へ幾人侍が來るやら知れない。そこで後家滿江、イヤお七が、ひよつと家へ戻れば悪いから、それが氣遣ひさに、先づ何もかも打捨つて、駈着けて來ましたわいの。

ト奥より、後家出て。

母　聞きました／＼。それは難儀な事ぢやわいの、こりや又あんまり無理な事ぢやわいの。

長兵　ハテこんな騒動な中で、理も非も御座らぬわいの。

母　それぢやというて、人の娘を無體に、取り上げようとは、あんまりな事ぢやぞや。

長兵　そりやア氣遣ひさつしやるな。秩父樣や本田樣が度々手柄をさつしやる、殊に仁田の四郎樣がいつでも軍に勝たるゝによつて、終には範頼樣も滅びて了ひまする。マアそれまではお七をあつちへ取られぬやうにさへすればよい。先づ二三日はやはりこの寺に居さつしやれ。

母　イヤモウそれはさうして貰はねばなりませぬ。本郷へ歸らねば外へどこへも、行く處は御座らぬわいの。

住職　さればそこに悪い事が御座る。先刻の侍が來て、こゝにお七親子は居らぬか隱すなといつて行きましたによつて、また詮議に來るで御座らう。ア、困つたものだ。

母　ほんに、それは困つたものと、云うて、外へ行かれず、こりやマア何としたものであらうぞいなう。

長兵　ア、有るぞ／＼、氣遣ひさつしやるな。先づお七はよい隱しどころがござるわ。

母　そりや、何處にあるぞ。

長兵　コレこの欄間のうちへ隱すのでごんす。

二人　この欄間に。

長兵　ハテ江戸中に隱れもない、お七によう似たといふ彫物天女。範頼公も、この彫物から思ひ付いて、お七を欲しがるのぢや御座らないか。そこで、この彫物を外して、あそこへ隱し、天女にして置きますれば、豫て似たといふ通りのものぢやによつて、誰もこれには、氣が附かぬでごんす。なんと智慧か／＼。

母　ほんにそれはよい思案ぢやが、アノ彫物は、つい離れますかえ。

住職　離れる段ぢやない、それ離せ／＼。

同宿　心得ました。（ト同宿共、欄間の天女を離す。）

母　これは自由な事ぢやぞ、さうして、わしは、どうして隱れませう。

長兵　こなたを隱すところは、わしも困りました。

住職　おつと氣遣ひせまいぞ、その思案は愚僧が有るぞ〳〵。

長兵　どうして隱さつしやる。

住職　コレ紅長、その思案はこれ、コウ〳〵。（ト囁く）

長兵　呑み込みました。モシ〳〵お袋さまの隱す所も、思案が出來たから、お前は早く奧へ行つて、お七殿を呼つしやりませい〳〵。

母　心得ました。そんなら、よいやうに賴みますぞや。

ト後家奧へ入る。どん〳〵を打ち。

長兵　お七さん、早く來なさい〳〵。

トお七出て來り。

お七　紅長さん、わたしを呼ばんすは、吉三さんに逢して下さんすかえ。

長兵　これはしたり、まだ逢はずか。

お七　あなたに逢ひたいばかりで、このお寺へ來てゐるものを、聞けば、さつきに團三郎さんが、喧嘩さんしたげな。わたしや、それが氣遣ひな。どうぞ、吉三さんに逢して下さんせいなあ。

長兵　氣遣ひせまい、今夜中に吉三樣に逢してやらうが、マアちつと、急な事が有る程に、こゝへ上つてゐると、吉三樣に逢はれるよ。

お七　アノあそこに上つてゐると、吉三さんに逢はれるのかい。

長兵　オヽよ、吉三樣に逢はれる〳〵。サア先づこゝへ上つて居さつしやい。

お七　アノ高いところへ、どうして、わたしが。

住職　それ〳〵、どうして、たゞ此の子が上れよう、マアこなた上つて見さつしやい。

長兵　合點だ〳〵。（ト紅長、梯子の上へ上り、天女の可笑しみあつて。）から足を揚げて。（ト蓮の花を取つて見せる。）

住職　これ〳〵蓮華の持ちやうが違つた。こちらの手で持つて、左の足を揚げたり〳〵。

長兵　サア〳〵、お七さん、此の通り、默つて上つたり〳〵。

ト紅長降りて、お七を上げる。

お七　どうして居るのぢや。

長兵　エヽ、わるい呑み込みだ。(ト梯子の中段へ上り)それ〳〵、そちらの足をあげて、蓮華をから持つて、ぐつと足をから揚げて。(ト思はず足を揚げる。紅長梯子の中段より落ちる。)

お七　そんなら、かうかえ。

長兵　さう〳〵、なんと和尚樣、御覽じましたか。

住職　これは、ほんに、天女と微塵も違はぬ。

長兵　コレお七さん、誰が來ようとも、物を云ふまいぞ。

お七　そんなら、人形のやうに、動かずにゐるのかえ。

長兵　さうぢや〳〵、サア和尚樣、これから今の支度にかゝりませう。

住職　それ〳〵、サア紅長殿、御座れ。

　トどんになり、紅長、住職、同宿、殘らず奥へ入る。吉三出て來て。

吉三　團三郎や〳〵、モウ曾我へ歸つたか、まことに忠義な者どもかな。それを知らいで、心にもない事いうて、苦勞させた、堪へてたもや。

　トそのうち、お七は吉三を見て、降りさうにして降りられず、蓮の花の元を持つて、いろ〳〵思入。吉三は之を知らず。

それ〳〵、佛前へ參つて、父君へお詫びいたさう。

　ト佛前へ向ひ、拜む。お七上にていろ〳〵思入。トヾ蓮の花を投げる。これにて吉三は肝をつぶし、欄間のお七を見て合點の行かぬ思入。

彫物の動き、はたらく、不思議といひ。よく〳〵見れば、こなたはお七殿ではないか。

　トお七恥しき思入。

イヤ、これ、お七殿ではないか。

お七　アイ。(トやう〳〵云ふ。)

吉三　そこへは、何故上つて居さつしやるぞ。

お七　こゝに居れば、逢れると云うて。

吉三　何としたと、云はつしやる。

お七　あのな、こゝに居れば、逢はれると云うたゆゑ。

吉三　ハテなう、恐いところに上つて、居さつしやるぞ。そりや誰に逢ふのぢや。

お七　エヽ。

吉三　サア誰に逢はうと思うて、そこに御座るぞいの。

お七　あのな、お前に。（ト顏を隱す。）
吉三　皆まで云はつしやれぬによつて、聞えぬわいの。
お七　お前に。
吉三　わしに逢はうと思うて、それで、そんなところに、ハテ合點の行かぬ。

ト奥にて、葬式のねうはちを打つ。これにて、お七驚き、欄間から、はやふさにて落ちる。

これは、危ない、お七殿。

ト吉三駈け寄つて、お七を介抱する。その手を取つて、顏を見合ふ。奥にて念佛を唱ふ。

これ、容さつしやれ、人が見ると惡いわいなう。
お七　何を云はんすやら、誰も來もせぬものを。
吉三　サア人が來れば、惡いによつて來ぬうちに。
お七　人の來ぬうちに、云ひたい事が、エヽモウ辛氣な事ではあるぞ。
吉三　さう云はつしやるは、なんぞわしに、云はつしやる事があるさうな。早う云うて了はつしやれいなう。
お七　お前は、アノ去年こちのわたしが雛祭の折、御座んしたな。
吉三　アイ參りました。ほんに見事な雛祭で有つたわいなう。今年もやがて飾らつしやるであらう。又呼んで見せさつしやれや。
お七　雛樣は、何んぢやえ。
吉三　あの雛樣は、何んぢやとは。
お七　サアあれは、なんの眞似ぢやえ。
吉三　あれは、住吉淡島の夫婦妹脊の睦じき語ひを、銘した女中の祭事さ。
お七　夫婦とは、女夫の事で御座んすな。
吉三　知れた事ばつかり、云はしやる。
お七　あのな、お前と、わたしと。
吉三　どうしましたえ。
お七　雛樣になりたいけれど。

ト云ひさして俯向く。奥にて、又鐃鉢を打つ。お七驚き、吉三に寄添ふ。

吉三　コレ放さつしやれ。アリヤ葬ぢやわいの。恐い事はない、放さつしやれ。

トお七、放さず、思入。奥にて、紅長。

長兵　やれ〳〵、いとしい事をしました。何故死なれました。ア、いとしや〳〵。

お七　いつそ、あのやうに死ねればよいのに。吉三さん、コレ雛祭の時、下さんした鴛鴦の絵を、今に肌身離さず。(ト出して。)この鴛鴦の妹脊にあやかり、この鳥のやうに常住、お傍に居たいと、氏神さんも佛さんも拜んだ事は御座んせぬ、この鴛鴦ばつかり、拜んでゐやんすわいなあ。わしやモウお前の事、どうも〳〵思ひ切れぬ。吉三さん、これ程思ひ込んだもの、わたしが心、何故に、お前は、思ひ遣つて下さんせぬぞいなあ。

ト泣き落す。奥にて、題目聞ゆる。紅長泣き乍ら出て、この體に見惚れる。

吉三　成程、こなたの心ざしは、度々の文玉章にて、思ひやつて忝なう御座れども、わしは親の遺言默し難く、是非々々出家せねばなりませぬ身の上。兎角叶はぬ戀路なれば、これぱつかりは思ひ切つて下され。お七どの、必ず思ひ切つて下されや。

お七　そんなら、どうあつても、お前は、出家なさんすかえ。

吉三　この事ばかりは、叶はぬ事ぢや、思ひ切らつしやれや。

お七　ハア。

トお七とりつく、ふり放す、立廻り。お七、目をまはす。紅長出て、兩人で介抱する。

吉三　コリヤどうせうぞいなう〳〵。

長吉　どうせうどころか、早く呼ばつしやれ、お七さん〳〵。

兩人　お七殿〳〵。(トいろ〳〵あり。)

長吉　エ、不氣轉な、そこらに水はないか。

吉三　こなた、水を持つて來て下されい。

長兵　おれが水はあるけれど、寢耳に水で、役に立たぬ。

吉三　サア〳〵飮まつしやれ〳〵。(ト手水鉢の水を柄杓に汲んで來る。)

長兵　飮ませると云うて、さうして、どうなるものか、口から〳〵。

吉三　こなたの口から、飮まして下されいなう。

長兵　おれが口は臭い。サア〳〵お前が口うつしに〳〵。

ト無理に、吉三に口うつしに飮まさせる。お七、こゝろ附く。

どうだ、氣が付いたか〳〵。

吉三　お七殿、心が付いたかいなう。

お七　どうでも、お前は坊さんに、ならんすかえ。

吉三　サアそれは。

長兵　それ〱、今のやうぢやぞ。

吉三　サアそれなれば。

お七　どうぢやえ。

吉三　どうなりとも。

お七　オヽうれしい。

ト吉三に抱きつく。向うより。

武兵　サアみんな御座りませう〱。

長兵　南無三寶、武兵衛がうせる。見つけられては溜らぬ。サア〱二人ながら、奥へ御座れ〱。

お七　吉三さんも、一緒に。

長兵　ヤレ御座れ、早く御座れ。

ト紅長兩人の手を取り、奥へ入る。花道より、武兵衛先に團右衛門侍大勢附いて出る。

武兵　なんでも、この寺にお七も母も居るに違ひはない。油斷さつしやるな、合點か。

大勢　合點だ〱。

ト奥より、同宿一人出て。

同宿　ヤレ〱どん〱が、胸に問へて、ものも喰はれるものぢやない。

ト武兵衛、引捕へて。

武兵　コリヤ〱づくにふめ、待ちあがれ。うぬは、お七の居るところを、知つてゐべい。それを、ぬかせ。

同宿　ア、痛い〱。お七殿は何處にゐるか、わしは存じませぬ、赦して下さい〱。

團右　おきやあがれ、知らぬといふことがあるものか、それ引喰はせ。

侍　動くな。

ト同宿を取捲く。

武兵　サアぬかしやあがらぬと、酷い目に合はせるぞ。

同宿　どうあつても、お七殿は存じませぬ。いとしやお袋は、亡者になつて桶の中へ入れられる。

武兵　そりや、合點が行かぬわえ。

ト此の時、同宿早桶を擔ぎ出る。

ソリヤ此の内が怪しい、早桶を叩き壞せ。

皆々　合點だ。

ト かゝる。同宿奥へ逃げる。皆々寄つて早桶を打ち壞す。中より、紅長、經帷子、額に紙をあて、脚絆をして、亡者の形にて、ころげ出る。しやき張つてゐる。武兵衞、紅長いろ〳〵をかしみあつて、トゞ武兵衞、紅長に、どしや降りかける。紅長段々ぐにや〳〵になる。武兵衞、侍に向ひ味噌をあげる、無性に力む。紅長、落ちてあるどしやの袋を取り、後より、そつと武兵衞へ降りかける。武兵衞、ぐにや〳〵となる。皆々驚き、武兵衞を介抱して、花道へ入る。

長兵　サア〳〵、お袋〳〵、お七さん〳〵。

ト 奥より、後家、お七駈けて出て、紅長が形を見て、びつくりする。

お七　エヽ。（ト お七恐がる。）

長兵　おれだよ〳〵、紅長だよ〳〵、モウ〳〵こゝには居られぬ。おれと一緒に御座りませ。（ト 葬式の提灯を持ち。）早う、御座れ。

お七　吉三さんに、今一度。

母　これ。

長兵　もの數云はず御座りませ。

ト 三重にて、皆々向うへ入る。チョン〳〵にて。

幕

二幕目

八百屋の場

役名　小姓吉三、お七の兄染五郎、丁稚彌作、土左衞門傳吉、家主杢右衞門、釜屋武兵衞、仁田四郎、海老名軍藏、長沼六郎、八百屋お七、お七の母、下女お杉　お七の友達娘お鹿等。

本郷八百屋店の場　本舞臺三間の間八百屋店の掛り、上の方三尺の鼠壁これに帳面を掛け、眞中に暖簾口、下の方に押入、乾物を並べ、店先に山形に久の字の暖簾をかけ、こゝに誂への流し、背物をいろ〳〵と並べ、いつもの所に門口、上の方に木戸を取付け、下の方棧敷際に、誂への火の見櫓を取り付け、これに太鼓を吊し、竹の梯子を掛け有り、すべて本郷八百屋店の道具。てんつゝ、角兵衞にて幕開く。

ト 花道より、長沼六郎、ぶつさき羽織。股引、侍の形にて出て來る。後より黒の四天の侍二人、杢

右衞門、家主の形、町人五人組の拵へ、六人程出て來て、直ぐ本舞臺へ來る。

六郎　ヤイ〳〵、家主はをらぬか〳〵。

家主　ハイ〳〵これに居ります。

六郎　豫て申し附けたる、此の町内の木戸は出來致したか。

家主　御覽の通り、出來仕りまして御座りまする。

六郎　出かした〳〵。此の町内は、その方共の丹精で、早く出來たが、下町邊はいまだ出來致さぬ所も有る故、今日某、その檢分の爲、諸所を巡見致せとある御申渡し、おろそかならぬ天下の大事。この上共に粗忽なきやう、かならず油斷仕るな。

家主　ハイ少しも油斷は仕りませぬ。晝夜共に人をつけ、大切に木戸を守りまして、若しも狼煙が上りますれば、合圖の太鼓を打ちますやう、心附けて居りますれど、先づ何事も御座りませぬ故、天下泰平と、憚り乍ら悦しう存じ奉ります。

六郎　いかにも〳〵當時世上も穩かにて、その方達も安堵であらう。これと云ふも、仁田の四郎忠常殿の働きにて、當時の武將賴家公、範賴公と御和睦あつて、それゆゑ、御代も靜謐に調つたといふもの。

家主　それはお目出度い儀で御座りまする。さりながら、かく泰平の御代に、狼煙やあの木戸を、御用心に及びますまい。但し何處ぞに、軍でも始まりましたか。

六郎　アイヤそれはさうではない。勝つて兜の緒を締める、今靜謐に調へど、この程、木曾平家の殘黨、こゝかしこに徘徊なし、寄々謀反の企あるよし、さるによつて町中へのお觸出。身共持參致した。ソレ承はれ、（ト懷中より觸書を用し、）一、此程、木曾平家の殘黨、謀反の聞え、これ有るに付き、此度町中へ櫓をしつらへ暮六つを限り、木戸々々を締り切り、役人共皆相守り申す可く候、萬一狼煙相見え候はゞ、櫓の太鼓を合圖に致し、早速木戸を相開き申す可く候。猥りに太鼓打ち候者、有之に於ては、曲事申付もの也。即ち此の觸書、番所へ張り置き、大切に相守つてよからう。きつと申し渡したぞ。（ト觸書を杢右衞門に渡す。）

家來　ハツ畏りまして御座りまする。

六郎　隣町へ案内致せ。

皆々　ハツ。

ト角兵衞になり、六郎先に、杢右衞門、捕手の侍、四五人組町役人も上手の木戸へ入る。てんつゝにやはり角兵衞の太鼓になり、揚幕より、お杉、前垂襷にて、盥を抱え、お鹿、娘の形にて、この後

よリ、丁稚彌作、やつし形にて、兩人と話し乍ら出て來り。

お杉　ほんにお鹿さん、いつもながら、よう手傳うて下さんす。お蔭で、わたしも助かるわいなあ。

お鹿　何のイなあ、いつでもよいから、遠慮なしに云うて下さんせ。どうで、わたしも用のない身、ひとりで、張つたり掛けたりすりや、勵みが出るわいなあ。

丁稚　ソレ〳〵その張物よりは、お鹿さんは、この彌作を張りもの、附けつ廻しつ、色男と云ふものはよい月日の下で、生れたのだ。（ト抱き付く。）

お鹿　アレ知らぬわいなあ。

ト振り放し、何か云うて、三人舞臺へ來る。

丁稚　コレお鹿さん、そんなに、びんしやんしねえものだ。（ト又お鹿の傍へ寄る。）

お杉　コレ彌作どん、惡い常談せぬものぢや、お袋さまに告げるぞえ。

丁稚　ヤアうまくやつたな。コレお杉どん、お前は、平生から、おれを馬鹿だといふが、何でもよく知つてゐるぜ。あのお七さんと吉三さん。（ト云ひかける。）

お杉　コレハしたり、めつたな事は云はぬものぢや。

お鹿　モシお杉どん、わたしにばかりは。

お杉　サアお前はよいけれど、彌作どんが口をきくわいなあ。

丁稚　コレお杉どん、お前でもねえ、おいらは通りものだぜ。

お杉　それ〳〵ほんに、お前は通り者ぢや、通り者といふ者は、隱す話を聞かぬが、一番の粹ぢやわいなあ。

丁稚　逢ひねえ。そこで、おれは、何事も聞かぬ振で、ドレ奥へ行かうか。

ト通り者の心にて、奥へ入る。

お杉　コレお鹿さん、アレでも、彌作どんには、氣は許されぬわいなあ。

お鹿　さうで御座んせう。氣は許さぬがよう御座んす。

ト此内、丁稚そつと窺ひ居て。

丁稚　オツト氣をゆるさずとも、肌をゆるして。（トお鹿に抱きつく。）

お鹿　アレ吃驚すりわいなあ。

丁稚　女房共、後に逢はう。（ト唄になり、奥へ入る。）

お鹿　お鹿さん、氣紛れ者には困るわいなあ。

ト兩人布をひろげてゐる。てんつゝになり、花道より、土左衞門傳吉、袢纏股引、鳶の者の形に

て、手桶に紋づくしの型を入れ、これを下げ、下駄がけにて出て來り、直ぐ本舞臺へ來る。

傳吉　ヨウ髱達が、張るわ張るわ、さういつても美しいものだわえ。おれも、ちつと手傳つてやらうか。

お鹿　オヽ傳吉さん、御座んしたか。

お杉　傳吉さん、また邪魔しに御座んしたか、雇はれて水汲なら、早う汲んだがよいわいなあ。

傳吉　コリヤ妹、ソウけん〳〵と云はねえものだ。

お杉　エヽ措て下さんせ、妹ぢやの女房ぢやのと、お前のやうな人を、兄さんに持つたなら、一生氣が溜らぬわいなあ。

傳吉　妹が嫌なら、こゝな命取りめ。（ト背中を叩く。）

お杉　アレ何をしなさんす、着るものが溜らぬわいなあ。

傳吉　おきやあがれ、げび藏め、こんな布子が何の役に立つものだ。待つてゐろ、おれが、富澤町の朝市で一枚買つてやるわ。

お杉　何ぢや、わたしに、着るものを買つてやらうとえ、お鹿さん、聞かしやんせ、コリヤ可笑しいわえ。

お鹿　イエ〳〵さうも云はれぬぞえ、傳吉さんも男ぢや程に、嘘も云はしやんすまい、早う買つて貰ふがよいわいなあ。

お杉　傳吉さん、冗談にも、そんな人聞のよい事を、云つて下さんすな、それより京橋の仙女香を買うて來て下さんせと、この中から頼んで置いたぢや御座んせぬか。それさへ、埒が明かぬもの、着るもの買うてやらうも、氣が強い。ほんに、お前の約束を待つてゐると、風藥から買うて置かねばなるまいわいなあ。

トこれにて、傳吉、懷より、仙女香の包みを出して。

傳吉　此の事か。（トお杉へ差しつける。）

お杉　コリヤ何ぢやえ。

傳吉　約束の仙女香、しかも、これはおれが錢を拂つて來たが、こりやあ土產にやらう。（トお杉の前へ置く。）

お鹿　ソレ見やしやんせ、あんまり惡うも云はれぬぞえ。

お杉　傳吉さん、今云ふたのは、アリヤ嘘ぢやぞえ、腹を立つて下さんすな。

傳吉　ハテサ人は氣受が第一だ。お杉が男と見かけて頼んだを、引かぬ所が男の生粋、土左衞門は男

だよ。それぱかりぢやねえ、まだきつとした土産が有る。（ト又せんべいの袋を出してやる。）

お杉　コリヤ何で御座んすえ。

傳吉　知れた事、煎餅さ、ナントきつからうが。

お杉　ほんにお前は、マアやさしい氣立にならしやんしたなあ。それでこそ男ぢや〳〵。傳吉さんは當時の切れ人で御座んすわいなあ。

傳吉　いま〳〵しい女だ、それで男か。

お杉　こゝな、大盡さまめ。

傳吉　おきやあがれ。

お杉　イヤ何とでも云はしやんせ、損の行かぬ事ぢやわいなあ。

傳吉　惘れるわ、コレ貰つてゐるばかりが能ぢやアない、おれが頼んだ事云つてくれたか。

お杉　頼んだ事とは、ソリヤ何を。

傳吉　コレそんなに恍けるな。

お杉　デモ何ぢやか、覺えぬわいなあ。（ト思入。）

傳吉　仙女香の事は、能く忘れねえな。

お杉　そりや、私が頼んだ事、覺えて居いでわいなあ。

傳吉　得手勝手なやつぢやあねえか。コレ貰ふものは貰つて置いて、頼んだ事を云つて貰はにや、男が立たねえ。

お杉　待たしやんせ、ソリヤお七樣の事かえ。

傳吉　知れた事よ。

お杉　イエそりや叶はぬ事、ならぬ事ぢやわいなあ。

傳吉　默れ、女。思ふさま人を釣つけ、貰ふものは貰つて置いて、ならねえと云つて濟むものか。

お杉　モシ傳吉さん、ならぬものを、どうなるものぢやぞいなあ。能う思うて見なさんせ。あのきやしやな可愛らしいお七さんの、御亭主に、お前のやうな人が、マア名さへ氣味の惡い土左衞門殿、どうマアならるゝものかいな。そんなら仙女香や、煎餅は、わたしに取持させう爲、下さんしたのかえ。

傳吉　知れた事だ、さうでなくつて、何しに、われにやるのだ。

お杉　そんなら、仙女香も煎餅もいらぬによつて、サア〳〵持つて行かしやんせ。返したぞ〳〵。

（ト件の包みと袋を投げ出す。）

傳吉　女だと思つて、云はせて置きやあ、よく譫事吐かすな。

お鹿　コレ傳吉さん、聲が高い、靜にしなさんせ。

傳吉　高くても大事ない。コレエヽ目附切つて、橋場まで、土左衞門傳吉といつちやあ、知らねえものは壹疋もない。その傳吉さんの、おやりなされたものを、うぬア、能く放り出したな。

お杉　アイ投げたが惡けりや、どうなとしなさんせ。

傳吉　云はせて置きやア、ほうづがねえ。

ト帶を振上げる。お鹿止る。このうち、てんつゝになり、揚幕より、染五郎、やつし形、手拭を持ち出て來り、是を見て中へ入る。

染五　まて〳〵傳吉、おとなげねえ、何の眞似だ。

傳吉　イヤサ女だと思つて、料簡すりやア、好く御託を吐かしやあがる。それで存分のめすのだ。

お杉　イヽエイナアあんまり無理な事ばつかり、云はしやんすによつて。

ト立ちかゝる傳吉に、背中を突付け、勝手にしろとする故、お鹿これを止めて。

お鹿　コレお杉どん、勘忍さんせ〳〵。

お杉　コレぶたるゝものなら、ぶつて見や。叩かぬか。

傳吉　モウ料簡がならねえわえ。

ト又振り上げる。これを染五郎止めて。

染五　コレサよいわえ。おぬしも男を立てる物ぢやあねえか。お杉も大概云つたがよい。畢竟心安いによつて、常談紛れに云つたのであらう程に、料簡しやれ〳〵。ソシテ傳吉、おれが賴んで置いた紋盡しは、洗つてくれたか。

傳吉　洗つたか、洗わねえか、目をあいて見ろ。

トこれにて、手桶を染五郎の前に出す。染五郎見て。

染五　洗つてくれたさうだ。何だか、おかしなものゝ云ひやう。洗つて置いたら、洗つたと、靜にものを云ふがよい。目をあいて見ろ、目を明かねえで何が見える。鼻をあけてものが見えるか。とサアから云へば云ひがゝり。コレ傳吉、機嫌直しに、酒でも振舞ふ。おれと一緒に、サア來やれ。

傳吉　イヽヤ行くまい。われに酒を振舞はれやうと、この紋盡しを洗ひはしねえ。先刻おぬしが名主殿へ呼ばれたゆゑ、そのうち暇がかけるによつて、洗つてくれろと賴まれたが、男の意地、退きはしない。洗つてやつたが、酒を振舞はれうといつて、洗やあしねえ、馬鹿な面な。

染五　テモ剌々しいものゝ云ひやう、そんなら酒を振舞ふまい。兎てもの事に、家まで擔いで貰ひたい。

傳吉　男と見かけて賴むのか。

染五　見かけた〳〵、男と見かけて、駈け込んだ。ハヽヽヽ、仇討ぢやあ有るまいし。

傳吉　イヤ仇討といへば、曾我の十郎祐成のわすれがたみ、吉三郎が仁田殿や荒井の藤太を、親の仇と覘ふによつて、仁田殿は構はつしやらぬが、藤太めが吉三郎を見つけ次第、切り捨てにせうと尋ねるといふ事だ。コレも馬鹿げた事ぢやあねえか、さう又仇を討たないでもよさゝうなもの、吉三といふやつも、いかい痴けた若衆ぢやあねえか。

お杉　コレ傳吉さん、めつたな事を云はしやんすな。何しに、吉三さんが仇を討たうと、云はしやんすものかいなあ。

染五　イヤさうも云はれぬ、成程、吉三殿を藤太が覘ふといふ事、聞いたて。

お杉　さればいなう、その覘ふのは、仇討の詮議ぢや御座んせぬ。お七さんを手に入れうと思つて吉三さんを覘ふのぢやわいなあ。

染五　サアそれと云ふも、うぬが臆病から、吉三殿を氣味惡く思ふのだ。それから起つた事よ。

お杉　何をおつしやるやら、藤太がお七さんを手に入れようと思ひ付いたは、お前が、あの釜屋武兵衞にお七さんを書き入れて、金借りさんしたから、起つた事ぢやわいなあ。

染五　いゝや、おれはそんな事は知らねえ〳〵。

お杉　イエ〳〵知らぬとは云はれない。ソレその紋盡しの型を、質に入れさんした、それからの事ぢやないかえ。

染五　オヽサ此の紋盡しの染型は、先年富士の御狩の時、大小名の幕の紋。時に今度の騒動故、以前の如く、紋盡しを染よと仰せ付られ、ところが、おれが道樂故、その染型を質に入れ、金を借りたは釜屋の武兵衞、その染型を取り戻さうには金は無し、先からは急がれる。切迫詰つて、武兵衞めに、その譯を云つて賴んだりや、隨分借してやる程に、預り證文をせいと云ふ。心得たと證文にして、取り戻したはこの染型。ところが、惡者の武兵衞めが、贋判を拵へて金の代りに、あのお七を女房にやらうといふ證文にして、お袋へ見せたゆゑ、おれは勘當受ける。不運とは云ふものゝ、全くおれが書き入れたでなけれど、謀判したれば、せう事がない。

お杉　そんなら、何故に、その詮議をなされませぬ。

傳吉　ハテこんな事は、女の知つた事でない。その謀判の詮議を賴む、再擧人が海老名の軍藏だによ

つて、出ると負けるは知れてあるわ。所詮、武兵衞でも、藤太でも、對手にして染五郎が死なにや濟まぬ。コレわれも若いものだ、死ね、死ね、死んでなりと、かぶり附いてなりと、お七を武兵衞にやるな。若しやるやうな事があれば、他人は格別傳吉が、男が立たねえ。いやでもおうでもお七は、おれが女房にする。染五郎、おぬしも男だ。どせうね据ゑて、お七をやるな。死んで了へ、死ぬ〳〵死んで了ひな。

染五　ソリヤおれも覺悟の前、コレお杉、こゝを聞いてくれ、畢竟、おれが謀判を糺した上、言譯が立たぬ段になれば、トヾのつまりは死なにやあならぬ。ソリヤア元より合點だが、何を云うにもお袋に、勘當受けてゐる身の上、今死ぬ時は、生々世々勘當を赦されやうがない。日頃われを頼むはこゝだ。勘當さへ赦されりやあ、その場から駈け込んで、贋證文を反古にするか、對手になつて刺し違へるか、二つ一つにさつぱりと、埒明けて了ふ程に、どうぞ勘當のゆりるやう、詫事しちやあくれまいか。

傳吉　いかさま、芝居でもこんな狂言にやあ、えて勘當が有りたがるものだ。吉三殿の叔父御五郎時致殿は、お袋の滿江に、恰度おぬしのやうに、勘當受けて、兄貴の十郎殿がちんぷんかんと、云ひ散して、勘當の訴訟をしたと云ふ事、どうぞぬしにも、そのやうに世話をして、勘當をゆるされる、辯口の玄人が有りさうなものだ。

ト考へゐる。お杉思入あつて。

お杉　成程なあ、云はしやんす通り、曾我物語の滿江樣は河津樣の後家御、こちのお袋樣も久兵衞樣の後家御。

染五　まつた五郎時致樣は、富士の御狩の假屋にて、敵を討たん爲、死出の門出に勘當の詫び、おれが名も似よりの染五郎、謀判の詮議を仕損ずれば、討果さんと死出の門出、その筋道は變れども、道理は同じ勘當ゆるし、時致樣にあやかつて、詫びの叶ふまいものでも有るまいわさ。

お杉　サアお笑止な事ながら、その時訴訟をなされたやうな、祐成さまがないによつて。

ト これにて、染五郎當惑の思入あつて。

染五　コレ傳吉、なんとおぬしが十郎になつて、詫言してはくれまいか。

傳吉　馬鹿を云へ、おれがやうな鼻の高い十郎が、三千世界に有るものか。さうして、おらア、生れ付いて、人にあやまつた事はない。

染五　サアそこが男だ、何もおぬしが謝つて詫びをするでもねえ。喧嘩の扱ひを表面で小さな聲でいふやうなものだ。おぬしでも詫言してくれにやあ、誰も頼む者がない。拜むわ。

傳吉　いかさま、そこも有るわえ。そんなら、われが馬鹿をつくしたを、詫言する分の事、埒が明かにやあ、アノお七を手に入れる事もならない。いゝわ、おれが詫言してやるべい。

染五　ナニ訴訟してくれるとか。

傳吉　オ、ヨ待つてゐろ、詫言してやるわ。

ト染五郎、傳吉を拜んで。

染五　エ、忝はい〳〵。

お杉　コレイナア傳吉さん、お前、マア何と詫言せうと思はしやんすえ。

傳吉　ナニサこんな事に、口を叩くにやあ及ばねえ。コレお袋ツ、サ染五郎が勘當ゆるしてやらつしやい、おれが詫言だ。どんな達引があらうとも、こゝは一番おれが貰つた。土左衛門の傳吉が詫言を聞いて貰はにやあ　男が立たねえ。厭だといやあ、おれが對手だと、お袋の横ツ面を。

ト傳吉、無性に力むゆゑ、兩人あきれて。

染五　これさ傳吉、めつさうな、それぢやあいかねえ　何でもおぬしが十郎になつて。

傳吉　又云ふよ、祐成殿が云つた事を、ナニおれが知るものか。

お杉　またしやんせ、傳吉さん、それにはよいものがあるぞえ。

ト曾我物語の本を持つて來り、眞中へ入つて。

コレ見さんせ、この本は、その十郎樣や時致樣の御一生の事を、草双紙に作つた曾我物語。明けても暮れても、お七さんがこればかり讀んで御座んす、これに勘當の詫びのところも有る程に、傳吉さん、コレ讀んで見なさんせ。

染五　成程、こりやあ好い思ひつきだ。コレ傳吉、こればつかりは一生恩に着る。染五郎が手を合す、訴訟してくれろ、拜むわ〳〵。（ト思入。）

傳吉　エ、野郎め、吠えやあがる。

お鹿　コレそのやうに、云はしやんすな。よく〳〵の事ぢやによつて　殿御が涙を流してのお頼み、わたしらも、とも〳〵云うて上げよう程に、詫言して上げて下さんせいなあ。

傳吉　何しろ、シチ面倒な詮議だが、かう云へば、チットのろいやうだが、惚れてゐるお七へすると思やあよい。氣遣ひするな、曾我物語でやつて見ようわ。

染五　エ、有難いわ。

ト喜ぶうち、お杉揚幕を見て。

お杉　アレ〳〵さういふうち、お袋樣のお歸りぢやわいなあ。

傳吉　南無三、曾我の滿江のお歸りだ。五郎かくれろ〳〵。

染五　合點だ。そんなら傳吉。

お杉　ハテそのうちに、お袋樣に見られたら惡い。

お鹿　ドレわたしも、お七さんに知らさうわいなあ。

傳吉　早く隱れろ〳〵。

ト染五郎先にこなし有つて、お鹿附いて、暖簾の口へ入る。唄になり、揚幕より、お七の母、前幕の形にて、店の者一人連れ出て來り、直に本舞臺へ來て、門口を入り乍ら。

母　ヤレ〳〵くたびれた〳〵。

お杉　お袋樣、只今お返りで御座りまするか。

母　オヽ杉か、留守へは、誰も見えなんだかや。

お杉　イエ〳〵、何誰もお見えになりませぬ。

母　ハテナウ、お七は機嫌はよいかや。

お杉　ハイ奧に、お鹿さんと遊んで御座ります。

母　ヤレ〳〵しんどや〳〵。

ト腰帶を解き、お杉に渡して下に坐る。傳吉茶を汲んで持つて來り。

傳吉　ハイお茶を上りませ。

母　これは〳〵土左衛門殿、はゞかりで御座りますな。

ト　お杉煙草盆を持ち來り、傳吉に渡す事。

傳吉　ハイお煙草盆。（ト後家が前へ直す。）

母　これはかさね〳〵御慮外で御座りまする。あんまり給仕人が大層で茶が咽喉へつまります、ハアハア、ヽヽ。

お杉　お袋樣、今日はお寺詣で御座りまするか。

母　さればいなう、先度の騷動の時分から、禮もせず、人も遣らずに置いたに依つて、今日はその禮參りに行きましたが、イヤモウ年は寄るまいもの、モウ歩けませぬわいなあ。

傳吉　イエ〳〵ナニさうぢや御座りませぬ。お寺詣にお出なされまする後姿を、若い奴等が見まして、申すにやあ、あれ見ろ、八百屋のお袋は若いなあ、さすが本鄉の名代もの、惜しいものを後家にして置くと申しました。

母　ホヽヽ、傳吉殿とした事が、年寄を捉へて、嬲らつしやるか、ほんに久しいものぢや。シタが

今日はいつもと違うて、言葉附も慇懃に、畏つて、さう實體にして居さつしやれば、男ぶりまでがよう見える、ナウ杉。

傳吉　へエそんなら、色男と見えまするか。

お杉　成程、色男ぢやわいなう。

傳吉　その筈で御座りまする。今日一日は十郎祐成樣の仕打で、やらにやあなりませぬ。

母　ホ、、、コリヤ好からうわいなう。祐成樣は男振の好いばかりか、慈悲も深く禮儀もそなはり、その上勇氣もあつたゆゑ、何一つ不足ない男、それぢやによつて女中も惚れて、色も取れる。こなさんも色が取りたくば、今迄のわやくをやめ、隨分おとなしうしたがよい。ナウ杉、さうぢやないかいなう。

お杉　左やうで御座りまする。イエモウずんとおとなしう成つてゞ御座りまする。

傳吉　アイヤおとなしい段ぢや御座りませぬ。常は知らず今日ばつかりは、十郎殿にならなにやあならぬ。しかし、こゝに一つ氣の毒な事が御座ります。

母　ハテナウ祐成樣になるに、氣の毒な事は有りさうもないものぢや。

傳吉　有る段ぢや御座りませぬ、肝腎の五郎殿が居られませぬ。

母　何といはつしやる。（ト後家凝と思入。）

傳吉　サアわしが十郎になつたところが、弟の五郎が御座りませぬ。

母　こゝな人は、何をいはつしやる。今日は十郎殿になりませうと、いふてぢやによつて、いかにも祐成樣のやうになつたがよいと云うたに、その身そのまゝ傳吉殿が、どうして十郎樣にならるゝものかいなう。

傳吉　ところをなつてお目にかけませう。先づわしを十郎にして御覽じませ。お前が曾我の滿江樣、箱根の別當には吉祥寺樣、鬼王、月小夜には引括めてお杉。これで大方曾我の役割は揃つたが、その曾我の狂言に、五郎殿がなくつちやあ、惠比壽講に招ばれて、酒の出ねえやうで間の抜けた話ぢや御座りませぬか。

（ト傳吉、思はず荒く云ひ、お杉、チョト氣をつける。）

母　有爲轉變は世の習ひとは云ひ乍ら、憂しと見し世ぞ今は戀しきと、過ぎ行く昔は、何事もいと懐しう語り慰むる事もあるもの、しかし、御兄弟樣のお果なされし、その後は面白い事はなうて、悲しい事ばかりぢやわいの。

お杉　左やうで御座りまする。あなた方のやうな、お身の上程、あはれな事は御座りませぬ。（ト曾我

物語の本を取り出し前へ出して。）コレ此の本は曾我物語、讀む者毎に嘆かぬ人は御座りませぬ。

ト目くばせして、傳吉が前へ直す。

母　サアそなたしゆが草双紙を讀んでさへ、あなた方のお身の上をあはれと思うて、泣かぬものはないと云やる。ましてわしは御兄弟樣に、直々お目にもかゝり、お仲の好いのを見るにつけ、お二人の成行を泣かぬ日とてはなかつたわいなう。さうじて、浮世の有樣は、迷へば是非は是非ともに非なり、夢のうちは、有無は有無ともに無なり、御兄弟の身の上は、明けても暮れても、敵を討んと命を惜します、心に千種の花を見ては歎き、空飛ぶ雁にも涙を落す。わけていたわしいは、小袖乞ひの折から、御勘當の御訴訟なされし、兄御樣のあはれさ、いとしさ。モウ〳〵あのやうな御兄弟思ひは、亦とあるまい。十郎樣のやうにお情深い人といふはマアこの世には。

傳吉　御座りますね。ソリヤ女を欺したり、色をする事は、十郎樣に及びますまいが、たのもしい所は負ける事ぢやあ御座りませぬ。祐成樣の詫言は現在弟の五郎が訴訟、又傳吉は從弟でもはとこでもない、あかの他人の五郎が詫言、お袋、どうぞ、料簡してやつて下さんせ。（ト件の曾我物語の本を取り上げ。）人の親の習ひにて候ぞや、母聞いてキ、、。

ト お杉、傳吉が袖を引いて。

お杉　コレ〳〵そりやお袋樣のいふところぢやわいなあ。

傳吉　人の〳〵〳〵。（ト分らぬ故、本を捨てゝ。）さつぱり讀めねえ。

母　コレ杉、傳吉殿の云はつしやる事は、何ぢややら、わからぬわいなう。

お杉　サアそれは、あの傳吉さんは、さりとは柔しい頼もしい人で御座りまするわいなあ。

母　ソリヤ何かいなう。

お杉　サアあなたに、訴訟なされまする。

母　ソリヤまあ何の。

お杉　五郎樣の御勘當のお詫びを。

母　ソリヤ曾我物語の話ぢやないか。

傳吉　イエ話ぢやあ御座りませぬ。此の傳吉が十郎氣取になつて、五尺染五郎が勘當の訴訟するのだ。許してやつて下さいまし、頼れたせうがにやあ、わしも男、何處までもゆるして貰はにやあなりませぬ。

母　イエ〳〵成りませぬ〳〵、そのやうな事聞きたうない。滿江御前の五郎樣を御勘當なされた

は、親御の仁愛大慈大悲の心から、出家して兄をも立て弟も立てよと御勘當。時致樣の還俗は、御父河津樣への御孝心故、母御の言葉もおそむきなされた。スリヤ曾我殿儕の勘當は却て孝悌。その物語を不孝者の染五郎に引き比べ、勘當の訴證などとは汚はしい。二度といふまい、聞く耳は持ちませぬ。

ト立腹の思入にて立ちよるを、暖簾の口より、染五郎つか〳〵と出て來り、後家が裙をひかえて。

染五　モシ〳〵かゝさん、お待ちなされて下さりませ。お心に違ひましたる染五郎め、只今これへ參りまして、一通り申譯致さうと存じまして、あれに控へて居りましたが、兩人の者が嘆きましてのお詫をも、お聞き入れなく、あまりと云へばお情ない。わたくしめが仕業でない事、一言申し上げませうと存じまして、おゆるしなきに、これへ出まして御座ります。お聞き屆け下さりませうならば、有難う御座ります。

ト思入にていふ。此のうち後家、これはの思入。染五郎身をすり付ける。

母　サア此の母を殺しや〳〵。あの双紙にある婆羅門がやうに、母を手にかけて殺せ〳〵。

傳吉　コウお袋、ソリヤ無理だ〳〵。

母　何が無理ぢやぞいの。親の言葉に反いたれば勘當した。それを他人の知つた事かいの。昔が今に至るまで、勘當うけた子が親にものを云ふさへあるに、穢れたその手で、わしを引留めるやうな事があるものか。勘當ゆるさぬが、腹立なら、サヽ、殺しや〳〵。

ト詰め寄る。染五郎あやまり入つてゐる。後家涙を拭いて。

エヽ、口惜しい。今こそ町人の久兵衛が後家、もとは河津樣の御家人、わしや侍の娘ぢやが、今町人になりさがり、殊に女の親ぢやと思うて、侮るか。コレよう聞きをれ、あのお七は夫、久兵衛殿が、家にも身にも引換へて、不便がられた、あの娘を、何故賣りをつた。妾奉公に出しませうと、よう證文書いてやりをつたな。コレ時致樣はな、御父河津樣へ孝行の爲に還俗なされた。それさへ滿江樣の御勘當。まして不孝な染五郎、勘當せいで何とせう。ほんに、もうお七と云ふ子さへなくば、おのれのやうな悪い奴、何と見てゐよう。おりや自害して死にたい死にたい。

ト泣き落す。染五郎思入あつて。

染五　コレお杉、おりやマアどうした因果であらう。氏神樣の御罪を受くる法もあれ。かゝさんの事仇おろそかに思はねど、直々に云はうとすれば御機嫌に背く。そなた取次いで聞いてくりやれ。凡夫さかんに神祟なし、とやら、非道なものは益々榮え、正道なものは押込められて、頭

が上らぬ、今の浮世、範頼公の御謀反を、誰壹人押へる者もなく、權威を振ふやうなもので、此の染五郎がいかに馬鹿者なればとて、現在妹を書き入れて、金を借ようか、惡人めらが計ひで、證文を拵へ、謀判までした故、理非を糺して、おれが惡名すゝがんと思へども、その役人も同類なれば仕方がない。この上は、死ぬより外の思案は御座りませぬ。（ト後家が方へ向いて、居直り。）理非を糺し、叶はぬ時には、町人でこそあれ、サ荒井の藤太と武兵衞めを討つて捨て、潔く腹切つて冥途の父親へ言譯する。サアこゝの道理をお聞き屆けなされて、何卒御慈悲に御勘當おゆるしなされて下さりませ。曾我の御兄弟も富士の御狩に敵を討ち、共に死するの首途に、御勘當を赦されました、例もあれば、私めも御勘當お赦しなされて下されば、親々への孝心も立ちまする。まつたお赦しなき時は、時致樣と同じ事、父への孝は立つても、母者人へは不孝の上塗り、未來永々盡くる事は御座りませぬ。かういふ事をお願ひ申す前表にや、曾我物語に習ひまして、現世未來の祈禱の爲、法華經一部讀み習ひ、毎日晝夜六萬遍のお題目は、父への菩提、今日までつひに怠つたことは御座りませぬ。何卒お慈悲にお怒りをなだめられ、御勘當お赦しなされて下さりませうなら、有難う御座りまする。

ト思入。後家ヌットと立つて行かうとする。

染五　コレ申し。（ト染五郎止るを振切る。）

母　コリヤ引止めて何とするのぢや。ア、不孝者にかゝつて、お勤が遲うなつた。ドリヤ奥へ行つてお題目でも唱へませうか。

ト唄になり、後家思入あつて、暖簾の口へ入る。染五郎あと見送つて、當惑のこなし。お杉思入あつて。

お杉　申し、五郎さん、モウ今日はどう云つても叶はぬ程に、何にも云はずにお出なされませ。

染五　ソリヤ又なぜ。

お杉　お前、曾我物語を讀んだと仰つたが、コレ忘れてか、叶はぬ時は、お勘當さへゆりたなら、直に藤太を殺しての、武兵衞を切つての と云つて、訴訟さしやんたとて、オヽ出かした、勘當ゆるす、行つて死ねと、お袋樣が仰りさうなものぢやと思うてか。そのやうな云ひがある故に、今日の訴訟は叶はぬと云ふ事で御座んす。

染　ム、成程、コリヤア惡かつた。證文を書かぬ言譯せうばかりで、そこの所へ氣が付かぬ、おれが無念。いかさま、かうなる程の運だによつて、する程の事が行き違ふ。コレ傳吉、何ぞ好い思案はあるまいか。

ト傳吉ツイと立つて行く故、染五郎これを止めて。

コレ傳吉、人が物を云ひかけるに、何故、わりや返事をせぬのだ。

傳吉　やかましいわえ、どうぞ、お七を手に入れようと思つてシチ面倒な荒事をやつたり、輕薄を云つて諂つたが、役にも立たぬ曾我物語、われにかゝつて錢儲まで、忘れちやならねえ。コレから二三杯引かけて、お七を泣かす夢でも見ようか。

ト行かうとする。染五郎これと、袂を控へる。傳吉振り切つて。

エヽやかましい、ひつこいやらうだなあ。

ト唄になり、傳吉向うへ入る。お杉氣の毒なる思入。

お杉　ア、何ぢやゝら、譯もない事云つて。モシ五郎さん、頼みに思ふた傳吉さんは、あの通り、お前マアどうしなさんす心ぢやえ。

染五　サアどうと云つて、今更仕やうも急にはない。ハテ又好い思案も有るであらう。

お杉　わたしも考へて見ようわいなあ。

染五　そんなら、お杉。

お杉　五郎さん。

染五　後に逢ふ。

ト唄になり、お杉、暖簾口へ、染五郎は下手へ入る。直に奥より、お七、後よりお鹿、御高祖頭巾を持ち出て來り。

お七　お鹿さん、奥の首尾はどうで御座んした。かゝさんは見はしやせぬかいなあ。

お鹿　イエ〳〵おばさんは、看經にかゝつてぢやによつて、何にも知らしやんすことぢや御座んせぬ、頭巾は持つて來たれど、あの吉祥寺まで行かしやんすに、わたし一人では心細い。ナントお杉殿に一寸知らせてはどうで御座んす。

お七　エヽめつさうな、杉に云うたら、直にならぬと云ふわいなあ。いつかも吉三さんに逢ひたうてならぬ故、杉に、どうぞかゝさんに知れぬやうに、連れて行つてたもと、頼んだりや。めつさうな事仰る。お前故に今度の揉のある中に、どうして駒込くんだりへ連れて行かれるものぢやと、けんもほろゝに云ひ放したと思はんせ。どうも、かゝさんにも云ひさうにあつた故、そんなら止めにせう程に、必ずこのやうな事云つてたもんなと、止めて置いたけれど、わたしや吉三さんに逢ひたうて〳〵、寢ても醒めても忘られぬと思はんせ。ソレに今度の揉合も、あの武兵衛めが恐ろしい企み事。兄さんにまで苦勞をかけ、ひよつとあつちへ行くやうにでもたつ

たら、わたしや生きてはゐぬ心。どのやうな憂目に逢ふと、吉三さんより外に、殿御は持たぬ私が心、それ知つてゐさんすお鹿さん、どうぞ誰にも知らせずに、吉祥寺へ連れて行つて下さんせ。わたしや一人でも行く氣ぢやけれども、道が知れぬゆゑ、お前を力に行く程に、どうぞ連れて行つて下さんせいなあ。

お鹿　ソリヤモウ氣遣ひなさんすな、ほんにお前の身になつても、大抵の心遣ぢやあるまい。よう御座んす。わたしが連れて行つて、上げう程に、サア〳〵支度さしやんせいなあ。

お七　そんなら、誰にも知らせずに、連れて行つて下さんすか、ソリヤ嬉しいわいなあ。

トいそ〳〵して喜ぶ。お鹿、頭巾を着せ、腰帯を締めてやる。お七いろ〳〵こなしあつて、門口まで行く。

お鹿　サア御座んせ。

ト角兵衛獅子になり、兩人花道へ行きかゝる。向うより、六郎先に、後より武兵衛前幕の形、侍大勢附いて出て來り、兩人を見る故、顔を背ける。行かうとするを六郎見咎めて。

六郎　コリヤその女止めろ。

侍　ハツ。

六郎　めつた無性に、人目を忍ぶ體、何にもせよ、怪しい奴だて。

ト引止る。兩人ハツトこなし。

お鹿　イエ〳〵わたしは怪しい者ぢや御座りませぬ。急に用事が御座りまして。

ト振切り、行かうとするを止めて。

武兵　オツト待つたり、合點の行かねえ頭巾、ドレマア引剝いで（ト頭巾を取つて見て。）ヤアわりやあお七、ハテいゝ所で逢つたなあ。

六郎　何だ、お七ぢや、取逃すな〳〵。

トお七、お鹿逃げようとするを押へて。

武兵　一寸もやる事ぢや御座りませぬ。（ト引据える。）

六郎　ドリヤ（トお七が顔をよく〳〵見て。）テモ見事な、ハテ美しいものだわえ。範頼公の望まれたも尤だ。いかさま天女も跣足、誂へてもかうは出來ない。コリヤ〳〵武兵衛、コリヤ御奉公になる事だ、悦べ〳〵。

武兵　イヤモウふとした事申し上げて、今日迄かれめが得心致さいで、難儀致しましたが、今日は是非連れて參らうと、只今お供致す所。扨てよい所で見つけまして御座ります。片時も早くお連

れなされまするがよう御座りまする。

六郎　イヤさうでない〳〵。かうお七めが手に入るからは、縦へ親が遣るまいと申しても、此の六郎が連れて行かねばならぬ、氣遣ひするな。母親に逢つて、とも〳〵御前へお出入致すやう申してくれん。武兵衛、八百屋へ案内致せ。

武兵　それは有難い思召で御座りまする、が、ひよつと邪魔が入つた時には、モシ拾つた金をうつちやるやうなもの、取逃さぬうちに、お屋敷へお連れなされませ。

六郎　イヤそれは氣遣ひ致すな。長沼六郎が手に入るからは、金輪際放す事ではない。サア案内致せ、案内致せ。

武兵　左様なら、かうお出なされませ。

トやはり角兵衛にて、本舞臺へ兩人を引返し、直に門口へ入り、捕手四人は下手に控ふ。

お袋はうちか、お袋〳〵。

母　ハイ誰ぢや〳〵。

お杉　何誰ぢやえ。

ト奥より、後家、お杉出て來り、此の様子を見てハッとこなし。

六郎　武兵衛、八百屋の後家は、彼か。

武兵　左やうで御座りまする。コレお袋、あなたが長沼六郎様だ。お目見得さつしやい〳〵。

母　ヘエあなたが承はり及びました、六郎様で御座りまするか。

六郎　いかにも。

母　イヤ申し、恐れ乍ら、六郎様、私風情の町家へ、お出なされましたさへ、憚り多う御座りまするに、娘お七を捉へなされて、ナントなされまするな。

六郎　イヤ何とも致さん、此の六郎は娘お七が迎ひに參つた。

母杉　エヽ。（トびつくり。）

六郎　サア先達より、此の武兵衛を幾度か迎ひに遣しても、酢のこんにやくのと延引する故、今日は身共が乗り出した。町人風情のこの娘、範頼公の御寢所へ上げると云へば、めうがもない、有難い事ではないか。

母　これは〳〵、何事かと存じましたら、合點の行かぬその仰せ、範頼公のお傍仕に、娘お七を上げませうとは、それは何者に御對談なされまして、誰が上げませうと申したやら、左やうな事は一向、私は存じませぬ。

武兵　イヤお袋、さうは云はれまい。先達こなたの息子、お七が兄の染五郎が、この武兵衛に金を借りて、その質物に妹のお七を奉公に出さうといふ、證文を書いて、牡丹餅程の印形が、しつかり押してあるぞや。それに今更知らぬとは云はれまい、隱し立して、大事の娘捲き上られる、のみならず今迄こなたも住み慣れた、この家體をぼいまくられまいものでもない。それぢやあ、貴樣の爲になるまい。

母　イヤ〳〵そのお爲ごかし置いて下され。こちの爲より、こなたの爲になるまいなう。

武兵　ナニおれが爲にならぬとは。

母　サア女の子は母に從ふ、世上の習ひ、ましてお七は父親なし、後家のわしが育つた娘、それにわしにも沙汰もせず、兄が合點でやらうと云つたとて、あれが自由にならうかいなう。殊に染五郎の無頼漢は、惡い事する奴ぢやによつて、とうに勘當して了ふた。それぢやによつて、あれがこなたと相談で、法に背いた事仕て置いたを根に持つて、云はつしやれても誰も合點するものか。縱へ天子樣でも將軍樣の仰せでも、邪な事で下々を押へようとなされても、ソリヤなるまい。お七はやられぬわいなう。サ、娘構はずとこゝへおぢや〳〵。

お杉　サアお七さん、こゝへ來なさんせ。

お七　サア行きたいけれど、武兵衛さんが捕へて。こゝ放して下さんせ。

トいろ〳〵身を揉む故、武兵衛振袖を押へて。

武兵　イヤ放さねえ、身悶えすると、着物が破れる、凝としてゐろ〳〵。コレお袋、こなたの理屈も聞えたが、マア能く考へて見さつしやい。誰有らう、範頼樣のお望みなら、證文がなくても、たつて娘を上げろとありやあ、直に出さにやあなるまい。さすれば、どうで差し上げにやあならねえものなら、こなたも得心させて、機嫌よく〳〵連れて行かうと思ふからよ。

母　イヤ機嫌よくやりますまい。成程、虫けら同然のわしらが娘、高位のお方のお望みなりや、どうでも好きになる事ぢやと、思うであらうが、こればかりはなりませぬ。ハテ高位の仰せであらうと、本人にも母親にも合點させず、人の娘を無理無體に連れて行かうとは、そんな非道な掟なら、わしや怖うも何ともない。ならば娘を連れて行きや、わしが呼吸の通ふうちはやらぬ〳〵、ハイやる事はなりませぬ。

武兵　コレお袋、惡い合點だ、天下の掟の奉公手形、證文が有るからは。

お杉　イエその證文は贋物で御座りまする。

武兵　默りやあがれ。贋物とは何の事だ。染五郎が謀判したのか、云はせて置けば太い奴等だ。わい

らが知つた事ではない、すつ込んで居やがれ。サア六郎様、四の五の云ふにやあ及びませぬ。早くお七をお連れなされませ。

六郎　いかさま、どう云つても得心しさうもない様子、歸宅いたさん。ソレお七を引立てい。

侍　ハツ。

ト お七を引立てる。後家取りつく。

母　イヤ遣る事はならぬ〳〵。

武兵　退かつしやいな。（ト突退けるを、又取り付く故隔てゝ。）構はずと御座りませ。

ト此の時、揚幕より、ばた〳〵で、傳吉出刃庖丁を手拭にて巻き、これを腰に挾み驅け來り、此の中へ入り、皆々を押し退け、お七を圍つて、しやんと見得。

六郎　ヤイ狼藉者、搦めとれ。

侍　動くな。（ト侍、みな〳〵十手を振り上げる。）

傳吉　何誰でも、指でもさすと、張り殺すぞ。

杉母　オヽ傳吉殿か、よいところへ來て下された。マア〳〵娘、こゝへおぢや。

ト寄らうとするを突き退けて。

傳吉　さうはならねえ。おれがこゝへ來たは、貴様達の肩を持ちに出やあしねえ。コレお袋、このお七は、おれが貰つたぞ、こなたへも返しはしねえ。又範頼殿でも糊賣でも將軍様でも乞食でも遣りやあしねえ。憚り乍ら、このお七は傳吉さんのおかみさんだわ。

六郎　イヤこいつ慮外千萬、ソレふんぢばれ。

侍　うごくな。

武兵　アイヤ、マア〳〵お待ちなされませ、私が申し撫めませう。コレ傳吉、ナニ傳公、傳先生、どうしたものだ。氣が違つたか、明神祭の手古舞で勢ふとは違ふぞ。對手が悪い、お役人様だ、若い者仲間の達引とは違ふぜ。出直せ〳〵。

傳吉　默りがやあがれ、ナニ對手が違ふと、コレ誰だと思ふ、土左衛門傳吉様だぞ。おれが此のお七に惚れてゐる事は、本郷切つて下谷でも淺草でも、知らねえものはない。此のお七を外に遣つちやあ、土左衛門が男が立たねえ。それともおれの首が欲しくば勝手にしろ。お七はおれが女房だ。無駄を云はずと、早く内へ歸れ。

侍　もう赦さぬぞ。

ト掛らうとするゆゑ、これを止めて。

六郎　コリヤ待て〳〵ハテ扨こいつ小氣味のよい奴ぢやわえ。シタが傳吉、われは何にも知らねえな。範頼公を何ぢやと思ふ。忝なくも當將軍實朝公の叔父君、そのお方のお目に留つたその娘、召寄せらるゝに、障げするとは身の程知らぬ慮外者、かく申す某こそ、鎌倉の役人長沼六郎と申す者、早くお七を身共に渡せ。

傳吉　おきやあがれ、ナニ長沼だ。だうりで鼻の下の長い奴だと思つた。長沼でも長芋でもやられねえわ、二本棒め。

六郎　うぬ、憎いやつ、モウ赦されぬ、繩を掛けろ。

侍　ハツ。

ト立掛る。傳吉、お七を取つて抑へ、件の出刄をお七が咽喉へ差しつける。皆々喫驚する。後家、お杉は思入。侍四人はきつと見得。

傳吉　そつちは大勢、おれは壹人、敵はねえわ。この上はお七をさし殺して、おれもこゝで腹切つて心中だ。

ト出刄庖丁を突き付ける。武兵衞これを止めて。

武兵　待て〳〵、さりとは氣の短かい事をする。お七に疵を付けられては、あなたに對して、おれが濟まぬ。これさ傳吉、おれは構はぬ、粗忽をするな。ア、困つた男だわえ。

傳吉　そつちさへ構はねえなら、おれが大事の女房だ、何の殺して溜るものか。それとも構やあ。

ト又突かうとする。

六郎　ア、これさ〳〵、危ない〳〵。手は出さぬぞ、慮外いたすな。こいつ。小氣味のよいやつだわえ。肝腎の玉を捲き上げて、好きな我儘を吐かし居るからは、どうも指をさゝれない。コリヤコリヤ、武兵衞、今日は此の儘歸らうわ。

武兵　イヤ〳〵只今お歸りなされば、お七はお手に入りませぬ。

六郎　デモそやつめがお七を手籠に致してゐる故、渡せと申せば殺すといふ。搦め取るは何の造作もない事ぢやが、人質を取られし故、先づ今日は歸つてくれる。必ずともに早まるな。こいつ小氣味のよい奴ぢや。

傳吉　おれが女房のお七、殺さうと生かさうと、うぬらが世話になるものか。

武兵　うぬ、その頰桁を。

傳吉　どうしたと。

武兵　イヤ憎くも何ともないやつだ。

六郎　ハテ扨、小氣味のよい奴ぢや。

ト角兵衛になり、六郎先に侍四人、武兵衛附いて入る。後に、傳吉、お七を押へてゐる。お七いろ〱こなし。

母　コレ〱、お七手を出しやんな、危ないわいなう〱。

お杉　コレ傳吉さん、手籠にして、どうするのぢや。

傳吉　イヤ何ともしない。コウお七さん、おれが女房になりさへすれば、今日のやうな難儀はしない。コレおれが云ふ事は聞くものだよ。（ト刄物を置いて抱きつく。）

お七　厭ぢや〱〱。

ト振袖にて叩き泣く。このうち、お杉刄物を門口の上へ隠す事。

傳吉　ナニ厭だと、厭だと云やあ、おれが又、（ト刄物を取らうとして、無い故、四邊を見廻して尋ね、お杉を見て。）ヤイあまめ、うぬ、隠したな。

お杉　オヽ隠した。刄物さへ取つたりや、千人力ぢや、恐い事はないぞ。（ト鉢卷をして思入。）

傳吉　そんならいゝわ。おれが又。

ト お七が手を取り行かうとする。後家止める故、傳吉後家の胸倉を取る。

お杉　コレお袋様を放さぬか。

ト棕梠箒にて打つてかゝるゆゑ、これを捥ぎ取り、後家を打ちにかゝる。此の前より、染五郎出かかつてゐて、この時、飛んで出て箒を捥ぎ取り、傳吉を見事に投げてきつと見得。

染五　コリヤ妹、氣遣ひするな。染五郎が來たからは、恐い事はない、いつでもおれが對手だ。

ト肌を拔いて勇みながら、後家を見て肌を入れ、思入。お杉、これを止めて。

お杉　コレ〳〵遠慮も時による、大事ない〳〵、ヅヽと言つたり〳〵。

と箒を持つて、立ち騷ぎ思入。

傳吉　コレエ、うぬは、マア青二才の分際で、傳吉を投げやがつたな。

染五　オヽ投げた、投げたがどうした。

お杉　さうぢや〳〵、投げたがどうした。（ト悦ぶ。）

傳吉　オヽ老ぼれや、女めばかりだと思つて、油斷をしてゐる所をば、出しぬけによく投げたな。

染五　オヽ年寄や女を對手に騷ぐから、投げたのだわえ。

傳吉　さう云やあ、うぬ。

ト打つてかゝる、仕組のたて。トヾ傳吉をさん〳〵に打ち据ゑ。

染五　いつその事に。

　ト手を振り上る。これを止めて。

母　コレ染五郎、モウよいわいなう、出かしやつた〳〵。それでこそ私が子ぢや。

染五　エヽ左やうならば御勘當。

母　オヽ赦さいでかいなう。

染五　そりや眞實に。

母　死なしやれた佛樣かけて。

染五　お赦し下さりますか。

母　拗いわいなう。

傳吉　染五郎。

染五　これ傳吉。

染五　まんまと首尾能く。

　ト起き上り、兩人躍り上る。三人は喫驚。傳吉、染五郎手を突いて。

傳染　エヽ有難う御座りまする。

母　コリヤマア何の事ぢや、今迄も染五郎に打擲された傳吉殿、わしが息子の勘當赦すと云やあ、互に仲好う嬉しがらしやる、マアどうした譯ぢやわいなう。

傳吉　サア合點の行かぬは尤だ。コリヤマアみんな、わしと染五郎が云ひ合せで、最前お七さんを口說いたも、あいつらを、ぼい歸す、仕組の狂言さ。

染五　その狂言の序開は、勘當御免あるやうに、お願ひ申すわしが荒事。

傳吉　この傳吉が敵役も、

染五　妹を口說いて、手籠にしたも、

傳吉　今の侍にやらぬ仕組のわしが幕切。

染五　落るところは、母者人の、少しは心休めんと、

傳吉　孝と眞實の賴もしづく、此の傳吉に免じられ、染五郎の勘當を、

染五　おゆるしなされて下さらば、

病人　ハイ〳〵有難う存じまする。

　ト手を突く。後家よろこぶ思入。

母　エヽ左やうかいなう。さうとは知らず、傳吉殿、マア〳〵こつちへ〳〵。

傳吉　イエこれが勝手で御座りまする。

お杉　サア〳〵傳吉さん、マア〳〵あれへ〳〵。

ト お杉、傳吉が手を取り上へ直して、茶烟草盆など前へ並べ、思入にて。

傳吉さんようお出なされました。（トよろこぶ。）

母　コレ傳吉殿、こなさんは、マア日頃から喧嘩好きの我儘者、それに染五郎が仲の好いのも氣にかけてゐましたが、さりとは頼もしい武士も及ばぬ志。さうとは知らず、これ迄は疎にして面目ない。曾我の五郎樣には朝日奈殿といふ後立があつて、度々の難儀を免がれなされたが、その朝日奈殿にも劣らぬ、こなさんの志。お七の難義を救ふさへあるに、染五郎が詫言まで、ほんに禮の云ひやうも御座らぬ。コレ〳〵お七、何をうつかりしてゐやる。傳吉殿によう禮を云やらぬかいなう。

お七　これがマア禮どころかいなあ、私が難儀を救うて下さんすといひ、兄さんの御勘當の宥るといふは、こんな嬉しい事は御座んせぬ。シタガ杉や、今のわしを上から、かう押へて御座んした時は、傳吉さんが惡かつたわいなあ。

お杉　それ〳〵わたしも傍で、はら〳〵思うて居ましたが、思ひも寄らぬ傳吉さんの頼もしさ。五郎樣の詫言も叶ふし、ほんに此のやうなお目出度、うれしい事は御座りませぬ。

母　そなた衆の嬉しいは理。わしもこれで落着きました。シタガ傳吉殿や、この上共に、染五郎が事、頼みまするぞや。

傳吉　ナニサおめえ、ソリヤアお互の事さ、しかし、又今の侍が來るであらう。

染五　それは氣遣ひねえ。仁田樣へお願ひ申し上げて置いたから、來る事ぢやあないが、何なら、今一度申し上げて置かうか。

傳吉　それぢやア、仁田樣が控へて御座りやあ、あいつらが力んでも、所詮及びはしねえ。

染五　そんなら兄貴。

傳吉　染五郎。

染五　どれ行つて來ようか。

ト合方になり、染五郎悦んで、向うへ入る。後見送り。

傳吉　ヤアイ嬉しがつて行きやあがる。コウお七さん、お前に惚れた何のと云つたは、みんな嘘だぜ。必ずほんとだと思つてくんなさんなよ。まうしお袋さん、お前、何處ぞ痛みはしませなんだか。

母　有難う御座る、何とも御座らぬわいなう。

傳吉　時に、お杉、どうだ、何處ぞ怪我はなかつたか。

お杉　有難う御座んす、なんとも御座りませぬ。時に傳吉さん、今日は、大きに御苦勞で御座りました。

傳吉　ヤこれは〳〵。

ト兩人慇懃に挨拶して、顏を見合せ。

病人　はあゝゝゝゝ。

傳吉　お袋、わしやあ大層汗になつた。ひと風呂入つて來ませう。（ト出口へ出かゝる。）

母　さうさつしやりませ。

トそのうち、お杉、件の出刃庖丁を取り出し。

お杉　傳吉さん、お大事のお道具を。（ト差し出す。）

傳吉　（受取って。）ハア、ヽ、おきやあがれ。

母　流して御座れ、傳吉殿。

傳吉　ドリヤ一杯入浴つて來ようか。

ト合方になり、向うへ入る。お七、後家、お杉殘る。

お杉　モシお袋樣、アノ傳吉さんは頼もしい人で御座りまするな。それはさうと何處ぞ、痛みは致しませぬか。

母　イヽヤ痛むやうには叩かれぬが、大分氣を遣ふた故、血の道が起つて、肩が張つて來た。チトやわらげてたも。

お杉　ハイ畏まりました。

ト此のうち、お七門口へ行き、揚幕を見詰めてゐる。

母　コレお七々々、マア〳〵こゝへ來や。そなたにとうから言うて聞かさうと思ふたが、今迄は控へてゐました。此の母が云ふ事をよう聞きや。世に貴きも賤しきも窘まにやあならぬのは迷ひの一つ、男女の道ぢやあわいなあ。今日のやうな難儀の起るのもみんな此方から。あの吉三樣に迷ふた故このやうな間狹い町家の事　モシこれがお上へ知れて見や、あなたの大事。さすれば、そなたばかりか此の母まで、不忠者よ不義者よと、後の世までもうしろ指をさゝれるが、わしやロ惜しい。こゝの道理を辨へて、何卒吉三樣の事は思ひきりや。コレお七思ひ切つてたもいなう。

唄へ諸行無常の鐘の聲、寂滅爲樂と響くなり。

ト これを借りて、吉三、編笠を被り、胡弓をすり乍ら出て來り、門口に窺ふ。

アレお七、あれを聞いたか、今唄ふ相の山の四句の文、もろ〳〵の境涯は、みな常ならぬ仇事なるに、心を留むる人を誓む。吉三樣やそなたの身の上、いつ迄も若うてはゐぬものを、變るまいぞと迷ふが煩惱。その煩惱のつまりには、死なねばならぬ義理になり、サア死んで花實はさかぬ程に、どうぞ、吉三樣の事は思ひ切つてたもいなう。

お杉　モシ〳〵お袋樣、ハテモウよう御座りまする。あんまりそんな事仰つて、また氣やいでも惡うなりましたら、惡う御座りまする。氣やいが惡いと云へば、折も折とて、ほんに憐れな相の山、モシわたくしは、あのやうな滅入つたものは、きつい嫌ひで御座りまする。アタ好かん、手の暇がない〳〵。

ト 云へど、表にゐるゆゑ、扨は聽えぬと思ふ心にて、門口へ立つて行き。

エヽモ憐れな相の山、手の暇がない、行つて下さんせ。

ト 云ひつゝ、うつかり顏見合す事。吉三は顏をかたむける。

お前は吉三さん。ようお出なされました。

ト 表へ心とられ、お七と思ひ、後家の手を引張つて。

お杉　サア〳〵お出なされました。

ト これにて、お杉喫驚、手を放して。

母　來たとは何が來たのぢや。

お杉　イエナニあの相の山が、手の暇がない、今は惡い程に、少しのうちそこらの軒の下へ、通りや通りや。

へたそがれに、顏は見えねど、目せき笠、三筋四筋の相の山。

ト 此のうち、お杉肩を揉み乍ら、お七に見ろと數ゆる事。お七は拗ねて見ぬ故、いろいろ氣を揉み、わが顏へ眼をつけさせ、表へ數える。これにてお七、吉三を見て立ちかゝる。お杉とめ乍ら、後家の耳へ指を入れて、聞かせぬこゝろ。

母　今は惡い〳〵。それ見やしやんせ、それぢやによつて、わたしが先刻から云ふに、今は惡いぜ。わたしが後に首尾して會はせる程に、それ迄は知られぬやうにな、この手を脫ると、何も云はれぬぞえ。（ト耳へ入れし指を取りて、氣を替へ。）通りや〳〵。これはしたり、杉、折角面白いのに、何故通れと云やるぞいなう。

お七　アレかゝさんさへ、面白がつて聞いて御座んすに、わが身はマア知らぬ者か、何ぞのやうに。

母　ム、知らぬものか、何ぞのやうにとは、杉、わが身は知合かや。

お杉　エどうしてマア何のわたしらぢやとて、物貰ひに知合があつて、よいもので御座りまするか。そのやうに云つたは、オ、それ〳〵あなたが平常から、唄や胡弓を知らぬものか、何ぞのやうにと、私をお叱りなされたので御座りまする。

母　イヤさうぢやないわいなう。

お杉　イ、エさうで御座りませう。さうで御座りまする。

母　イヤ〳〵大事ない、まそつと唄はしや。

お杉　エ左やうなら、唄はせてもよう御座りまするか。私は何をお隱し申しませう、あの相の山が大好きで御座りまする。（ト云ひ乍ら、門口へ來り、思入して。）サそこな胡弓やさん、今お袋さんのおゆるしが出たによつてな、その後を、今にあとで、サアおもしろおかしう、所望ぢや所望ぢや。

〽後夜の鐘をつく時は、是生滅法と響くなり。

ト此のうち、兩人表へ思入。訝つてお杉、後家の頭を强く打ち、これにて後家喫驚する。お杉、氣を換へ强く揉む。

母　アイタヽヽ、あんまり强い、どうするのぢや、肩も着るものも、ほんに溜るものかいなう。娘、代つて、チト揉んでたも。

お七　そんなら私が。

ト母の背後へ廻り、肩を揉む。このうち、お七、うちへ入れろと思入。お杉は今は惡いとこなし。トヾお七、門口を見い〳〵、段々に下手へ行き、後家は揉まぬ故、捨臺詞にて下手を見ると、お七は下にゐて、宙を揉んでゐる。これにて、びつくりして。

母　コレお七、コレ〳〵、コレお七。

お七　ハイ。（トこれもびつくりして、肩を揉む。）

〽これも他生の緣ぞかや。

トお七、お杉兩方より揉みにかゝる。これを突き拂ふ。吉三は小隱れする。これにて、後家さてはと思入。

母　イヤ〳〵モウよいハテよいと云ふに。それはさうと大分氣がうつ〳〵として來た。氣晴しに酒一つ飮みませう。杉、一寸銚子を持つておぢや。

お杉　ハイ。（トうち〳〵してゐる。）

母　早う、持つておぢやと云ふに。

お杉　そんなら、わたしや奥へ行く程に、内も外も用心したがよささうなものぢや。ハイ取つて參りませう。（ト門口へ思入。氣を替へて暖簾口に入る。）

母　ア、何事もみな迷ひぢやなあ。コレお七、そなたはマアさつきにから、いかうそわ〳〵して居やるが、ア、聞えた、又吉三樣の事ぢやの。必ずきな〳〵思はぬがよいぞや。何事も執心深いは、いかい罪ぢや程に、ハテ命さへあれば、どうなりと成らうと思ふたが好い。今、私が取りにやつた酒も一つ飲めば樂しみ、二つは過ぎる。三つは足らぬと、それから段々重なれば、ついにその身を失ふ種ぢやによつて。

ト此のうち、お杉銚子を持つて來て。

お杉　ハイお銚子を持つて參りました。

母　オ、よう持つておぢやつた。わしは此の酒を飲んで、一ト寢入、休むによつて、そなた、奥へ行つて常香を持つて來てたも。

お杉　エお常香を。ハイ畏りました。（トうち〳〵して表へ思入して、奥へ行かうとする。）

母　アコレ〳〵杉や、常香は私が盛る。そなたは鳥渡床をとつてたも。

お杉　アノこゝへとりまするか。

母　知れた事わいなう。

お杉　それではちつと惡い事が。

母　早うせぬか。

トきつと云ふ故、びんしやんして。

お杉　ハイ〳〵。（ト不承々々に暖簾口に入る。）

母　コレお七や、今私がいふた事、必ず忘れまいぞや、サア一つ飲んで見や。

お七　マアお前上りませ。

母　サア私も飲まうと思うて取り寄せたれど、まだお看經前ぢやによつて、お看經前には葷酒戒と云うて、佛樣の警め、酒は飲まれぬ程に、マアわが身。

トこのうち、お杉、夜着、布團を持つて來て、兩人の眞中へ投げ出す。

お杉　ハイ持つて參りました。

母　オ、よう仕やつた。直にとつてたも。

お杉　ハイこゝでは風を召しますぞえ。

母　早う、とりやといふに。

お杉　ほんに意地悪うおしなさるなあ。

　ト二重舞臺の上手へ寄せ、床を取り、屏風を持つて來て立てる。

母　コレお七、今云ふた事忘れて、マ一度逢ひたい、イヤサ飲みたいと思やらうが、それも澤山は惡い。一つ、サア二つ程は飲みやつても好からうが、三つは過る。ノウ杉、たんと飲まぬやう、氣を附けて、あの表の戸を締めて、しつぽりと此の床で。

　トこれにて、お杉、扨はと思入。

サアわしも今寢るのぢやが、お看經前ぢやによつて、これから奥へ行て、三寶樣へ、方便品自我偈一卷、その外佛樣達へ、お題目を百遍宛申し上げにやあならぬ。（ト一つ〱に指を折つて、）その間が餘程暇がいる故、そのうち來うないやうに、この床の上で酒を飲んで寢たがよい。聽て看經を了うて來る程に、永うは寢やらぬがよいぞや。（トあちこちと思入。）ア、何ぢやゝら、打つたり舞うたり、これも子ゆゑの闇ぢやわいなう。（ト唄になり、後家奥へ入る。）

お杉　お七さん、お袋樣は知つてぢやぜ、必ず惡う思ひなさんすな。

　ト云ひ乍ら門口へ行き、吉三の手を取り内へ入る。

お七　吉三樣、よう來て下さんしたなあ。

お杉　コレ靜に〱。

　トこれより、砧の入りし合方。

ほんに、しよんな、マア來なさんせ。

　ト心遣ひの思入。門口へ、行かうとする吉三を、無理に止める事有り。吉三は奥へ知れては、惡いと思入。お杉はこれをやう〱に上手の屏風のうちへ押込む。

コレへようお出なされました。（ト煙草盆、盃など持つて行き、また下手へ來て、門へ心遣ひ。）サアお七樣、早いがよい、來なさんせ。

　ト手を取る。お七羞しい思入、俯向いてゐる故。

そんなら、お前いやかえ。（ト云へど、默つてゐる故。）厭なら、せう事がない。お歸し申しませうか。

　トこれにて、さうでないと袖を控える。

そんなら、行かしやんせ。行かねば私が。（ト腕の下をこそぐり乍ら、屏風の内へ連れて行く。）へ

イ、もうお出なされまし。(トおかしみあり、枕を取つて、紙をし代へ、捨臺詞有つて。)なんにも遠慮は入らぬ程に、お二人乍ら久しぶりの事、今宵はマアゆつくりなされませ。お話を私もこれから致しませう。明日の仕度を。(トこんな事を云ひ乍ら。)お七さん、〇〇有るかえ。

トこれにてないと思入。

不用心な。ソレ。

ト投げてやる。取つて心得ぬ思入。兩人顔を見合せ、屏風を締る。此の途端、唄になり、お杉心殘して奥へ入る。と、揚幕より、寺侍、はんてん、股引、大小、所化坊主、頭へ鉢卷をして、捕手二人引連れ出て來り、門口に窺ふ。と、屏風の内より、吉三走り出るを、お七は後よりとめ乍ら出て來り。

お七　コレ吉三さん、何處へ行かしやんす。

吉三　コレ〳〵人が見ると悪い、靜に〳〵。

お七　誰が見ようが構やあせぬ、今かゝさんのおゆるしで、お前とこゝで盃事をせい、仰つたを聞かしやんせぬか。

吉三　成程、最前より母御の志を聞くと共に、涙が溢れるやら面目ないやら、あのお心を聞くにつけても、お七殿、親御の御恩思ひ知らつしやれ。このやうな叶はぬ事で、心を苦しめ、親に憂目を見するは恐しい。今日、わしがこゝへ來ましたは、剃髪して出家せう爲の、別れにぢやわいの。

お七　エ、そんなら、あの御出家なさんすかいなあ、坊さんに成るのかいなあ。

吉三　コレ奥へ聞えるわいなう、人が見る、泣いて下さんな。こなたの母御に見られては、わしは生きても死んでもゐられぬわいなう。

お七　何の、お前が氣の毒な事が有るものぞ。わしが事はどうならうと何とも思はず、坊さんにならしやんすなら、ならしやんせ。しやり〳〵佛にならしやんせ。わたしや死にます。生きては居ぬ生きては居ぬ。

トしやくり上げて思入。吉三、氣の毒なるこなし、いろ〳〵だまして。

吉三　コレハまた何をそのやうに、嘘ぢや〳〵、嘘ぢやわいなう。

お七　ソリヤまあ、ほんの事かへ。

吉三　成程、出家になるといふたは嘘、またマアお師匠樣のお心が、どのやうに變つて、出家せぬやうに成るまいものでもない程に、そのやうに涙を溢して下さんなや。

お七　どうぞ、そんなら坊さんに成らぬやうにして下さんせ。お前が出家にならしやんすと、わたしや生きては居りませぬ。

吉三　サア拜みます／＼、泣かしやんな。出家にならぬからは、もう歸つてお師匠様にお叱り受けぬやうにしませう。又明日來て逢ひませう。

　ト行かうとするを、引止めて。

お七　アレまたしやんせ。お前、あれ程、かゝさんが心遣ひして下さんしたものを、盃も何にもなしにもう行かしやんすか。坊さんになるのが嘘ならば、マア盃も爲て、エ、しんき。

吉三　成程、さうぢやけれども、マア／＼今日は歸して下されい。

　ト行かうとする故、持つた編笠を屏風の内へ投込む。これを取りに行くを、しやんと止めて。

そんなら、どうでも。

お七　アレまあ好いわいなあ。

　ト屏風を引廻す。最前より、門口に窺ふ四人出て。

寺侍　ソレ。

　トこれにて、所化、先に門を明け内へ入り、屏風を引退け吉三を引出す。お七、うろ／＼する。

此のでつちめ、こゝにうしやあがつたな。

お七　コレ吉三様を、どうするのぢや。

坊主　ヤア明日は出家になる身を持つて、女犯を働く墮落の惡業。師の坊へ斷つて、一山の法に行ふのだ。

お七　エヽ。

寺侍　まだそればかりぢやねえ。只さへ不審の掛つたおのれ、範頼公の上聞に達せば、生かさうと殺さうと風の前の灯同然、危ない命。

お七　そんなら、どうでも吉三さんは。

坊主　今宵のうちに、くり／＼坊主。

吉三　それは、逸くより覺悟の前、理不盡な、こゝ放せ。

捕手　きり／＼、うせう。

　ト引立て行かうとする。立廻り。お七はやるまいとする。此のうち、吉三は上手の屏風の内へ駈込み、一ト腰を取りにゆくところ。所化これを追駈ける。トゞ吉三を引付ける。お七これへ縋る。幕

　六つ鳴る。

寺侍　アリヤモウ暮六つ。番人共木戸を打て〳〵。

ト所化と寺侍先に、捕手二人吉三を引立て花道へ入る。これにて、所々拍子木を打ち、木戸々々を締切る。お七うろ〳〵こなし。

お七　コレ杉や、杉やいなう。

ト呼立てる。これにて、奥より、お杉出て來る、これを見て。

コレ杉大事ぢや〳〵。ひよんな事が出來たわいなう。

お杉　これはしたり、何をマア、そのやうに呼吸を切つて、さうして吉三樣はえ。

お七　サイなう、折角今かゝさんのおゆるしで、こゝで盃せいと云はしやんすになつて、何やかや、話したり爲たりせうと思うて居たに、まだ盃も何もない中に、大勢して吉三さんを坊主にするというて、どつちへやら連れまして行つたわいなう。

お杉　エヽ。

お七　それぢやによつて、こちや追うて行てお留め申さにやならぬ。

お杉　ぢやと云うて、滅相な、夜よなか、お前一人、明日の事にしなさんせ。

お七　イヽヤイナウそなたは譯を知らぬによつて、吉三さんは今宵のうちに御出家なさんすといなう。その上お命にも及ぶ事が有ると云ひくさつたわい。それぢやによつて常とは違ふ。放しやいなう。放しやいなう。

お杉　サア尤ぢや〳〵、が、よう思うても見なさんせ。その大勢の中へお前一人やられるものかいなあ。

お七　わし一人やられぬなら、わが身連れて行つてたも。

お杉　どうして、私が連れて行かれるものかいなあ。

お七　そんなら、ひとりやつてたも。

お杉　イヽエこゝは放されぬ、遣る事はならぬわいなあ。

お七　そんなら連れて行てたもるか。

お杉　ぢやと云うて、無理な事。

お七　連れて行きや。

お杉　サア。

お七　連れて行きや〳〵、連れて行きやいなう。（ト泣落し思入。）

お杉　ア、好う御座ります。どうなとして連れて行きませう。

お七　連れて行てたもるか。杉、大明神様々々々々、サア連れて行てたも。

お杉　ほんにどう云へば、かう云ふと、しかしお袋様へ鳥渡断つて來ませう。

お七　ア、コレかゝさんへ、それを云ふたりや、直に止めさんすは知れた事、云はずと連れて行きやいなう。

お杉　それでも後で、私が叱られるわいなあ。

お七　叱られても大事ない。サア行かう。

お杉　連れ行くによつて、仕度しなさんせ。

トこれより、誂への合方、お七急ぐゆゑ。

お七　ハテ忙しない。穿物を見てゐるわいなあ。跣足でも大事ないわいなあ。

お杉　これはまた行かうと云うて居るものを、躓いて怪我でもしては悪い。わし次第になつて居やしやんせ。

トお七は聞き入れず、履物を片違ひに穿き、お杉を引張る故、履物を手に持つたまゝ、花道へ行き、揚幕に木戸締め有る故。

お七　これはしたり、木戸が締つてあるわいなう。それ見やいなう。それぢやによつて、わしを遣つてたもれば。このやうに木戸が締つた、早う開けて貰やいなう。

お杉　サア〱今わしが開けて貰う程に、泣きなさんすな。(ト揚幕へ行き叩く。)モシ〱こゝちよつと開けて下さんせ。

□　誰だ〱。暮六つを打つたから木戸を締めた。開ける事は成らぬ〱。

お杉　サアさうでもあらうが、開けて下さんせ。わしぢや〱わしぢやわいなあ。

□　ナニ鷲だ、わしでも鷹でも、あけられねえ。

お杉　八百屋の者で御座んすが、今急に病人が有つて、艾を買ひに行くのぢや、ちよつと開けて下さんせ。

□　縱へ、病人でも何でも、お上から厳しい吩咐、開ける事はならないよ。

お杉　エ、意地のわるい。(トツンとした思入。)

お七　杉、どうせう〱。

お杉　マア〱待ちなさんせ、あちらの木戸を頼みませう。

お七　あそこからも行かれるかや。

お杉　アイ何所からでも行かれまする。モウ頼みません、意地悪め。

　トきつとなつて手を引き、大歩みを通り、東の方へ來て。

ホイこゝも締めてあるさうな。

お七　エヽ辛氣な、おさう成る、開けて貰やいなう。

お杉　ハテよいわいなあ、今頼みます。もし〳〵ちよつと開けて下さんせ。

△　誰だ〳〵。

お杉　私でござんす、杉ぢやいなあ。

△　ナニ杉だ、杉でも松でも、お觸が嚴しいから、開ける事はならねえ。

お杉　サアさうではあらうがな。今内のお袋さんが、オヽソレ虫氣付かしやんしたによつて、取揚げばゞさんを呼びに行かにやならぬ、ちよつと開けて下さんせ。

△　ひつこい人だ、開けることはならないよ。

お杉　どうでもならぬかえ。

△　モウ寢た。

お杉　エヽおぼえてゐい。

お七　杉、わが身が遲いによつて、かういふ内も、吉三さん。どうせう〳〵。

お杉　ハテ好う御座んす、内の隣の番太は、心安いによつて頼んで、開けて貰ひませう。

　ト捨臺詞を云ひ乍ら、東の花道へかゝり、舞臺へ來て、上手の木戸を叩く。

お七　こゝ開けて〳〵。

お杉　これはしたり、大きな聲で、靜に仰しやれ。アノお袋樣に聽えまする。私が頼んで開けて貰ふ程に、お前はお袋樣がお出なさるか、氣を附けてゐなさんせ。

お七　そんなら、早う開けて貰や。（ト暖簾口へ行き、内を窺ふ。）

お杉　八助さん、六つを打つと締切は合點ぢやが、急に用があつて、行かねばならぬことがある。どうぞ内證でそつと開けて下さんせ。

○　さう云うは、お杉どんかえ。

お杉　サアお袋樣が俄に病氣が起つてぢやによつて、お醫者樣を呼びに行かにやあならぬ。どうぞ開けて下さんせ。

○　なんぼ心安くても、お上からの吩咐で、六つから先は、誰が頼んでもあける事はならないよ。

お杉　そこを、どうぞ内證で。

○　内證でも大小でもならない〳〵。

お杉　そんなら、どのやうに頼んでも。

○　エ、拗い人だ。

お七　杉、どうぢや〳〵。

お杉　どうも開けてくれませぬわいなあ。

お七　開けてくれぬでは、濟まぬわいなう〳〵。

お杉　それぢやと云うて、開けてくれねば仕方がないわいなあ。

お七　そなたの頼みやうが悪いからぢや、これからわしが頼んで見よう。

お杉　縱へお前が頼んでも、お上からの吩咐ぢやもの、どう成るものかいなあ。

お七　お上にも意地の悪い、そんならわが身がお上に頼んで、開けて貰や。

お杉　無理な事ばかり。

お七　ぢやと云つて、わしや吉三さんに逢れぬなら、どうせう。今わが身連れて行くと云つたぢやないか。御出家なさんしたら、わしや生きてはゐぬ、わしが死んでも構やらぬ。かう云ふ中も、吉三樣のお身に、若しもの事があつたら、どうせう〳〵、何とせうぞいなう。

ト じつと泣落す。お杉思入あつて。

お杉　それ程までに思ひなさんする。ほんに折も折迚意地のわるい、どうぞして連れて行て上げる仕やうはない事かいなあ。

ト思はず上手の木戸を見る、幕開の書付張りある故、これへきつと目を附け。

お杉　お七さん、行かれる〳〵、よい事がある。

お七　行かれるかや。さア行かう〳〵。

お杉　今連れて行く。アレ見なさんせ、アノ書付に書いてある、櫓の太鼓を打つと、木戸々々を開けると書いてござんす。（ト櫓の太鼓を見て。）アノ太鼓で御座んす。（ト書付を見て。）猥に打つ者、これあり候へば、ほうろく死刑に行ふべき者なり。（ト讀み終り、ちやつと氣を變へて。）イヤイヤこりやならぬ〳〵、これでは行かれぬ。

お七　ヤ。デモ今連れて行くといやつたぢやないか。

お杉　サア太鼓を打つと、木戸が開くけれど、科人になるといなあ、オ、怖しい恐い事、お七さんコリヤ成らぬぞえ、オ、恐い事〳〵。

お七　何を云やるぞいなう。

　ト此の時奥にて、後家手を打つて。

母　杉や〳〵。（ト呼ぶ故。）

お杉　ハイ〳〵只今参りまする。モシお七さん。お袋様がお呼びなされまする。

お七　行かいでも大事ない。サア連れて行きや。

お杉　ハイ只今参りまする。

お七　そんなら、かゝさんの云ふ事ばかり聞いて、わしが云ふ事聞きやらぬか。

お杉　さうではないけれど。

お七　かういふ中も、吉三さんが坊さんにならしやんしたら、どうせう。

母　杉や〳〵。

お杉　ハイ只今参りまする〳〵。

　ト行かうとする。お七やらぬ〳〵と止る拍子に、前垂へ手をかける故、お杉前垂を解き、奥へ逃込む。後にお七前垂を持ちしまゝ殘つて。

お七　コレ杉、待つてたも。コレ杉々、杉の意地わる、わしが一人エ、行くまいと思うて、こちや一人行くぞや、何の一人行かれぬ事があつて。（ト花道の附際まで行きかけ思入。）一人行かうと思うても、木戸は締る、道は知れず、かういふ内も吉三さんのお身の上に、若しもの事があつたなら、こちやどうせう。生きては居ぬ。何としたらよからう。

　トいろ〳〵思入。下手の櫓の大鼓へ目を着けて、ム、と思はず下に居る。此の時、本釣の頭、すごき合方。

今杉が云やるには、あの櫓の太鼓を打てば、方々の木戸が開いて、吉祥寺へもどこへも行かれると云やつたが、たとへ、杉に見られて叱られやうとまゝ、吉三さんの御出家をお止め申さう、わしが一念、打てば打たるゝ櫓の太鼓。

　トつか〳〵と行き、梯子に取り付き、上をきつと見る。これより、早めになり、片肌脱いで、上りかける。中程にて梯子ぐらりと動く仕掛、氣味惡く手を摑み、きつと見得。これより顫へ〳〵、やう〳〵と上へ登る。ほつと思入。撥を取つて、太鼓をどんと打ち、方々を見て、又どんと打つ。これにて、向う、上手、諸所にて太鼓を合はす。どん〳〵になり、早拍子木を打つ故、三方の木戸を開き、染屋、表口の仕出打ち交り、大勢わや〳〵と出て來り、行き違ふ事。向うより、傳吉、粋纏股引にて鐵棒を持ち出て來り、舞臺へ來る。後より、染五郎大肌ぬぎに出て來て。

染五　お袋や〳〵。

トこれにて、役家、お杉出て。

母　オ、染五郎か。

染五　さうして、お七は何處へ行きました。

お杉　ほんに、お杉さんが見えぬ。

染五　ナニお七が居ねえ、とんだ事だ。

母染　コレお七やあい／＼。

お杉　お七さんイなう。

ト尋ねる。時の太鼓になり、花道より、仁田四郎羽織袴大小にて出る。後より、役人軍藏、羽織野袴大小にて、捕手四人を連れ、後より武兵衞脊流し、杢右衞門、幕開の家主にて、その外五人組町役人大勢、皆々提灯を持ち出て來る。家主花道より先へ駈抜け。

杢右　お役人樣のお出だ。靜まらつしやい／＼。

傳吉　こなた衆も、そこに控へてゐさつしやい。

母染　ヘイ／＼。（ト染五郎、母、お杉下手へ控える。）

軍藏　コリヤ侍共、他町は騷ぎは靜まつたか。

捕手　さやうで御座りまする。他町は大半靜まりて御座りまする。

軍藏　それは一段の事ぢや。シタがかほどの騷動、怪我人もあるであらう。何にもせよ希代の珍事、これと云ふも、此所の櫓で太鼓を打ち始めしより起つた事、不敵の曲者。名主、月行事これへ參れ。

捕手　これへ出ませい／＼。

皆々　ハツ／＼。

ト前へ出る。武兵衞思入あつて。

武兵　コレ五人組の手合、今お役人樣の仰せには、此の町内で太鼓を打つたから、外町内でも騷ぎとなつた。その打つた奴は何所にゐる。きり／＼そこへ引出さつしやい。

ト仁田四郎、この臺詞に被せ。

仁田　コリヤ／＼町人、控へてをろう。

武兵　ヘイヽ。

仁田　コリヤ名主月行事の者、豫て申付け置いた通り、暮六つ限りに、木戸を締切り、往來を止め、用心致せば他所他町より入込んで、かゝる騷動には及ばぬ。察する所、曲者は此の町内の者と

見ゆる。左やうな人體の者、心あたりはないか、どうぢや。

杢右　イエ何も町内にうろんがましい者は、一人も御座りませぬ。

皆々　ヘイ／＼決して心あたりは御座りませぬ。

ト此のうち、軍藏櫓の上へ目を付け。

軍藏　イヤ騷がつしやるな。仁田殿、アレ御覽なされい。あの櫓の上に何か怪しい奴が見えまする。

皆々　イヤア。（ト皆々櫓の上を見て。）何か居ります／＼。

ト口々に云ふ。傳吉、半分程梯子を上り見て。

傳吉　ヤアそこに居るは、お七さんぢやあねえか。

母　ナニお七ぢやえ。

染五　（延び上って。）ほんにお七だ。

お杉　お七さん／＼。

ト呼び立てる。傳吉上へ登り、やう／＼下へ抱き降す。此のうち、皆々捨臺詞。

武兵　ヤア／＼太鼓を打つたは、お七だな／＼。

傳吉　ヤイ／＼やかましい、默つて居やあがれ。

母　ヤレ此の子とした事が、あんな所へ上るといふ事があるものか。杉、早う連れて行きや。

お杉　ハイ／＼サアお出なさんせ。

軍藏　コリヤ／＼待て／＼。

武兵　ちつとも動かすな。

傳吉　又差し出やあがる。踏み踏すぞ。

捕手　コリヤ／＼靜まらぬか／＼。

仁田　（後家を見て。）そちは、この娘が母親か。

母　ハイ左やうで御座ります。生れついて正直者で御座りまする。

仁田　その方へ問ふ事はない。その娘に詮議が有る程に、ずつとこれへ出せ／＼。

捕手　出しませい／＼。

傳吉　これ今あなたがお問なさるゝ事、何も嘘を云はずと、正直に／＼。

母　さうぢや、恐い事はない。わしもこゝにゐる。

軍藏　早く出さぬか／＼。

皆々　畏りました。

トお七の肌を入れさせ、家主附いて前へ出す。

仁田　そちが名は何といふ。

お七　ハイ七と申しまする。

軍藏　ハテよい態、心柄とは云ふのゝ、やい、大きな事を仕出かしたなあ。

トこれにて、お七悄然するゆゑ。

仁田　イヤ〳〵軍藏殿、先づそのやうに云はつしやりまするな。女で御座れば狼狽へて、どんな事を申すも知れませぬ。さしてお叱りには及びますまい。ナニ七とやら、そちがあれへ登つてゐたは、定めて大分の人が騷ぐが恐さに、あの所に隱れてゐたので有らう。さうか〳〵、さうで有らうな。

お七　イヽエさうぢや御座りませぬ。

軍藏　そして何しに登つたのだ。

お七　アイ木戸を開けようと思うて、それであの太皷を。

トこれに被せて、仁田は笑ひ出す。

軍藏　コレサ〳〵仁田殿、何をそのやうに笑ひ召さるゝ。

仁田　イヤサそれがおかしう御座る。御覽なされい、脊こそ高けれ、何ぢややら他愛もない。女の詮議に、そこもとが目を大きうして、眞顏になつて御座るがおかしさに、ハア、ヽヽ、イヤかやうに又おかしき詮議は御座るまい。コリヤ七、われは鈍な奴ぢやなあ。狼狽へる事でも何でもない。有りやうに申せ。コリヤあの高い所で、かけかまいない所ぢやと思うて、それで上つて居たであらうな。

お七　イヽエ左やうでは御座りませぬ、太皷を打つと、木戸〳〵が開くと聞いたによつて。

トこれにかぶせて、仁田咳をせく事。

軍藏　コレサ〳〵仁田殿、ソリヤどうした咳のせきやうで御座る。

仁田　さればさ、此の間は風邪に御座つて、まことに、(ト又咳き入つて。)アレ〳〵どうも咳いてなりませぬ。

軍藏　イヤ〳〵そんなら、身共が詮議致す。咳の中に聞きかためた事も御座れば、先づ拙者めが詮議致さう。(トお七が傍へ行く。)コリヤ七、われはほんに正直な者ぢやなあ。あの櫓へ登り太皷を打てば、四方の木戸が開く故に、木戸を開けやうばつかりに、それで太皷を打つたのか。

お七　あのお前さんは、よう御存じで御座りますなあ。

軍藏　木戸を開けようばつかりに。
お七　アの吉三さんに逢ひたさに。
軍藏　それで太鼓を打つたのか。
お七　どうぞ吉三さんに、逢はせておくれなされませ。
武兵　ハイ〳〵お七が太鼓を打つたと申しました。
軍藏　七に繩うて。
武兵　ハツ動くな。
　ト掛るを、仁田は投退け。
仁田　うぬ素町人の分として差し出た奴、科人に繩打つに頼まうか。ソレそのものを引据ゑい。
傳吉　畏りました。（ト武兵衞を引据える。）
武兵　太鼓を打つたはお七、謀判は武兵衞。（ト恟驚、口をふさいで。）何も私には科は御座りませぬ、科人はお七で御座りまする。
仁田　不屆奴、町役人、此の者が町所、家主の名前、當人は何と申す。（矢立を出し書留める。）
杢右　此の者は、本郷五丁目家主加右衞門店。

皆々　ヘイ〳〵釜屋武兵衞と申す者で御座ります。
仁田　追つて詮議致す、奴、町役人共、確に預け置くぞ。
皆々　畏りました。
　ト皆々武兵衞を下の方へ連れて來る。
軍藏　ソレ七に繩うて。
捕手　ハツ。
仁田　イヤ軍藏殿、かやうな正直な娘に、ナニ繩が入りませう。コリヤ拙者が預りませう。
軍藏　スリヤお手前が。
仁田　左やうで御座る。御覽なされい、形は此のやうに大きう御座るが、まだ齡がいかぬさうで御座る、コリヤ七、その方は十五で有らうな。
お七　イヽエわたしは十六になりまする。
仁田　エヘン〳〵。（ト又咳に紛らす。）
軍藏　仁田殿、ソリヤどうした咳のせきやうで御座る。
仁田　さればさ、御覽の通り、咳き入つて難儀致すエヘン〳〵。コリヤ七が母親、それへ出い。コリ

ヤ七は十五で有らうな。十五とあれば子供同然、又お上にも格別の思召もある程に、何事も隠さずにな、正直に申し上げい。七は十五であらうな。

母　ハイ〳〵。ソレお七、何も狼狽える事はない。有りやうに十五ぢやと申上げや。

傳吉　それ〳〵正直にの、ソレ十五〳〵。

染杉　十五ぢやと〳〵。

お七　そんならマア十五で御座りまする。

仁田　アレお聞きなされい、軍藏殿、十五ぢやと申しまする。

軍藏　十五なら十五にも致して逢はさうが、此の軍藏は飲み込まぬ。コレ七、幾つになるか、正直に云はぬと為にならぬぞ。

皆々　ハイ十五で御座ります〳〵。

軍藏　ヤイ〳〵わいらには聞かぬ、すつ込んでらせう。

武兵　憚乍ら申し上ます。お七が齢は、現在湯島の額が確かな證據で御座りまする。

仁田　コリヤ詮議の妨げ、控へておらう。

ト此の時軍藏、お七の傍へずつと寄つて。

軍藏　コリヤ七、そちは正直な者ぢやなあ、正直にさへ云へば、そちが逢ひたがる吉三とやらに、逢はせてやる程に、正直に申せ、コリヤ幾つになるぞ。

お七　そんなら、正直にさへ云へば、吉三さんに逢はせておくれなさんすかえ。

軍藏　餘人は知らず、軍藏が逢はせてやるわさ。

お七　吉三さんに逢ひます事なら、アノほんまは。

軍藏　いくつに成る。

お七　十六になりまする。

軍藏　いよ〳〵左やうか。

お七　十六になりまするによつて、どうぞ吉三さんに逢はせて、おくれなさんせいなあ。

ト皆々心遣ひのこなし。

軍藏　仁田殿、聞かれたか。アノ七めは、十六だといひましたぞ。

仁田　ハテ是非に及ばぬ、コリヤ七、そちが逢ひたがる、その吉三とやらに、逢はせてやる程に、身と一緒に參れ。

お七　エ、そんなら、吉三さんに逢はせて下さんすか。これ杉、わしや吉三さんに、逢はれるわい

なう。

仁田　軍藏殿。

軍藏　イザ御一緒に。

ト仁田はお七が手を取り花道へ行く。お七いそ〳〵思入。傳吉、お杉、後家、染五郎みなみな思入。軍藏先に捕人四人、この人數花道へ止る。

母杉　コリヤマアどうなる事で御座りませう。

軍藏　町役人共、此上ともに用心致せ、きつと申し渡したぞ。八百屋の奴等、どいつもこいつも此の上は、七が傍へ立ち寄る事は叶はぬぞ。

ト仁田四郎思入あつて。

仁田　させる科なき此の娘、自然と受けし今日の災難、逢ひたいといふ吉三とやらに、逢はせてやるがうれしいか。

お七　アイ。

仁田　いかなる過去の因縁にて、罪科遁れぬ身の上か、思へば不便な事ぢやなあ。

トほろりと思入。

母杉染　どうぞお慈悲を。

軍藏　七めは十六で御座る。

傳染　エヽ。

ト武兵衛をはりつける。見事に返る。これを木の頭。

いま〳〵しい。

トきざみよろしく拍子幕。引付けると、時の太鼓、三重にて、仁田四郎先にお七の手を引き、軍藏残りの捕手附いて揚幕へ入る。知らせにつき、あと。

しやぎり

三幕目　鈴ヶ森の場

桃の媚あるむすめ盛
櫻恥らうわかしゆ姿　雛對夢白酒　常磐津連中

浄瑠璃道行　手向の花曇　竹本連中

役名

小姓吉三、白酒賣、土左衛門傳吉、赤澤十作、釜屋武兵衛、仁田四郎、海老名軍藏、八百屋お七、お七の母、下女お杉等。

雛祭飯事の場　本舞臺三間の間竹のふし欄間、めつきの金物、御簾御殿、高欄、左右に網代塀、この前に山吹咲き亂れ、日覆より枝垂櫻の釣枝、正面五色の段幕、これを總角にて結び上げ、下の方に常磐津連中居並び、天王立にて幕開く。

ト頭取出て、上るり名題役人觸あつて入る、直に前彈になり。

〽雛祭、人形天皇の御宇かとよ。巴の字にめぐる曲水の、縁はいなもの葦田鶴も、今日は晴れたる女夫事。

ト誂の鳴物になり、正面の御簾捲き上げる。このうしろ唐紙、雛の金屏風を見せたる心、上の方三段へまうせんをかけ、これに雛の道具いろ〳〵飾り、竹の花瓶に造り花、朝顔付の燭臺を灯し、こゝにお七、天冠をかぶり、封じ文紋付の世話形の上へ、十二單衣の上ばかり引つかけ、雛の釜道具にて焚きつけ居る。吉三、冠を着て、吉の家紋付世話形の上へ、錦の裝束の上ばかり着て、俎板にて大根胡蘿蔔を切つてゐる。その外、雛の小道具いろ〳〵取り散しある。

〽うつゝなや、雛の日なみにあらねども、おものゝ濱の手業とて、男雛の料理拵へに、しどけ形ふり飯焚女雛、時に叶うた扇蝶、こしやく娘に角髮の若衆姿も追扇、互に思ひ扇同士、うれしい中の新世帶。

お七　モシ吉三さん、わたしの心の念が屆いて、此のやうに女夫になると云ふ事も、又有る事で御座んすかいなあ。

吉三　さいなう、これといふも、結ぶの神樣、祖師三寶のお蔭と思へば、このやうな悅しい事は御座らぬわいなう。

お七　そんなら、お前も悅しいかえ。

吉三　これが悅しうなうてかいなう。

お七　それでも今迄いろ〳〵云うたけれど、ついに夫婦の盃しても下さんせぬぞえ。

吉三　ハテソリヤ知れた事、人目を忍ぶ二人が仲ぢやなかつたかいの。

お七　そんなら、かうして世間も廣う、晴れて女夫に成るからは。

吉三　盃せいで何とせう。

七お　うれしう御座んす。幸ひ今日は彌生の節句。

吉三　雲井のよその女夫の盃。

お七　さいつ。

吉三　さゝれつ。

兩人　たのしまうかいなう。

ト此の時、揚幕の内にて。

白酒　白酒や〳〵。

ト出の合方になり、白酒賣、袖無羽織柿の前垂てつかふ股引、山川と書きし澁團扇を持ち、白酒の荷を擔ぎ出で來り、花道へ止る。

〽山川と風のかけたる一聲は、流れわたりの出商ひ、雛の節句と賣子まで、豊島やだけに如才なう、團扇をちよつとかざし草、富士の白雪、朝日でとける、解けたがどうしたえ、娘島田は口說の中で、サア寝てとける、ヤレよい〳〵よい評判で賣かける、得意方こそありがたき。

ト此の文句にて本舞臺へ來る。

白酒や〳〵。

吉三　ほんに好い所へ白酒やどの、コレ〳〵チト頼みたい事があるわいなう。

白酒　ソリヤモウ、白酒さへ買うて下さりますれば、何なりと頼まれませうが、さうして、そのお頼みわえ。

吉三　サアその頼みはな。

お七　コレからで御座んす。今こゝで女夫の盃事するのぢやけれど、仲人さんがないによつて。

白酒　オツト合點承知之介。から見たところが、女雛男雛の差向ひ、仲人になりませう。

吉三　そんなら、頼みを聞き分けて。

白酒　サア仲人と待女郎、ひつくるめて白酒や。先づ夫婦喧嘩から覺えにやあ、世帯が持たれませぬぞえ。

お七　アノ女夫のいさかひするのかえ。

白酒　まづ盃事よりは、その夫婦喧嘩と云ふものは、ちよつとしたところが、宿六の歸りが遲いと、下歯が無暗に燒餅だ。一日二日もぶん流し、歸るが最期亂騷ぎ。

〽なんだナ、お前、今時分おほかた、何處ぞのふんばりに、惚く馴染の女なら、よしてもおくれ小夜嵐。

こんな事を云ふと、そこで男があつくなり。

〽コレてえげえに、亭主を安くしろ、その口をよう覺えてと、手當りに、連木摺鉢皿鉢、雛の調度の投打に、向うのかみさん隣のおはゞ、澤瀉形の大家さん、雪駄かたしに下駄かたし、これは御内儀どうでんす、まづ御亭主もだまつたり、三助足許の茶碗のかけであいたしこ。

白酒　ハア、、、此のあんばいで、やつて見るが好う御座んす。サアこれからは、睦じう雛樣ごとの女夫合。

お七　嬉しい事のありたけを。

吉三　サア〱こゝで、やりなさい〱。

〽葉山しげ山しげり合ふ、彌生のこゝに雛遊び、飾りし品は何々ぞ。

〽數もあるかえ、犬張子、二つ枕の草紙にも、嫁入道具や二葉草、織殿やの孫三郎に、養老模樣を織らせた、寶づくしを織らせた、さつても見事に織らせた、あやゝ錦の花紅葉。

〽五人囃のはやし方、太鼓の撥に鉦いれて、一チおきや二おきや三おきやさくら、五葉の松にアレ見さい、鳶や烏がねぢやけた首で、ひとりうなづき咄をしやる、てうろに乘せて、てうろはかして、殿樣お馬、しやんとめさせて小室節。

〽竹にサア雀はナアエ、品よくとまるナアエ、止めて止まらぬナアエ色の道かよナアエ、ハイシイ道中行列、揃へて露拂ひ。

トこれより、白酒のてんびん棒の先へ花を附けて、鑓にするこゝろにてこれを持ち、三人花道へ行き、しやんと止る。

〽松はゆたかに、揮つてふり出す、花の雪、日傘でふり込め、ありやんりやりや、こりやんりやりや。

トこれにて、三人舞臺へ歸り、しやんと止る。

〽七草踏みやれ、お乘物。

トこれより、七草の拍子あつて　雛の乘物かつぐ。

〽拍子とり〱なまめけり。

白酒　イヨ〱どうも云へぬ〱。浮き立つ春の櫻月、ほんに櫻と云へば、サゾ夜櫻も。

吉三　コレ〱その夜櫻とは、いづれの名所。

白酒　いかさま、お寺で育つたお小姓ゆゑ、夜櫻は御存じないはず。

お七　さうして何處で御座んすえ。

白酒　何處といつたら、あつちの事さ。

〽吉原や、春の夕ぐれ來て見れば、入相の鐘に花ぞ咲きける、花を見捨て〻歸る雁、燕はいつも花の客、猪牙で急ぎの二てうだち三てうだち、おせおせ〱しつぽ〱はら〻つぽう、椎の木ぢや、半分ぢや、ういた浪とや花川戸、こ〻淺草の觀世音、三社權現、横になし。トよろしくあつて。

ハア、〻、飲まぬ酒に醉うたさうぢや。

吉三　イヤノウお七どの、いつたん言葉に從うて、女夫の固めはしたれども、よく〱思へば、この吉三、出家にならねばならぬ身の上、これ迄は是非もなし、破戒の罪のおそろしければ、無緣ぢやとあきらめて、コレ思ひ切つて下されいなう。

お七　そんなら、どうでも。

吉三　おいなう。

〽お七はちやつと耳に手を、聞えぬ心おし靜め、アレ又あんな酷い事、云つて泣かすがうれしいかエ、そもやわたしはか〻さんと、お歲暮詣りした時に可愛らしいと思ひ初め、その十一の書初に戀といふ字を書習ひ、十二の暮は友達の仲間はづれと浮名立ち、はや十三の正月は、始て月のさはりとなり、羞しい事い〻しの、寄邊なければよく〱と、焦れてなんと松竹梅、湯島にかけし筆の跡、筐に殘し死にもせめ、念が屆いてさし向ひ、火箸で灰へいとしいの、假名も叶ふの緣結、きつとやいのとたまさかに、忍ぶ人目も厭いなう、ほんの女夫になるやいな、またどうよくなとばかりにて、しやくり上げてぞ泣き居たる。

〽オヤ〱〱〱コリヤどうぢや、ちはり給ふかお口說か、こんな處が仲人役、紙雛さんぢやあるまいし、互にしつぽり抱き付いて、ソレ仲直りを白酒や、あま酒賣ではなけれども、三國一と手を打つて、祝ふ彌生のかぞ

へ歌。（トこれより、すり鉦入、手踊になる。）

へ鷄の音に、いさむ初日の曙や、屠蘇にほのめく櫻いろ、梅のきぬ〴〵香に匂ふ、浦やま〳〵の雪とけて、縁うれしき絲遊の、かはゆらしいぢやないかいな、色香くらぶる梅さくら。

へサアこれからは、お床入、常寧殿の箱のうち、様と雲井の夢さめて、思ひや後にいかならん。後の思ひやいかならむ。

トこの文句にて、お七吉三兩人を白酒賣取持の仕組、トど御簾家體の内へ押しやり思入、兩人は顏見合つて抱きつく。白酒賣は手拭にて顏を隱す。此の見得双方よろしく納る。チョンと木について、一面に黒幕を切つて落し、この道具を隱す。この木と一つに下手の太夫座を隱す。波の音にて。

此道具廻す

本舞臺向う黒幕、こゝに駕や二人、駕を舁ぎ上げてゐる見得、時の鐘にて道具留る。

トどろ〳〵にて、心といふ字を日覆より下げ、駕の内へ引いて取る。

〇　コレ棒組や、タシカお袋さまは、籠のなかで眠つて、恐い夢でも見さしつたさうだ。

△　成程がうぎに籠が搖れる、おろせ〳〵。

〇　それがいゝ、おろせ〳〵。

トお駕を下におろし。

△　もし〳〵お袋さま、どうなされました〳〵。

〇　魘されてゐなさるやうだ。モシどうなされました〳〵。

ト駕のたれを上げる。お七の母、内より珠數を持ちまろび出る

母　むすめいなう、コレお七、吉三さん、娘いなう。

トうろ〳〵尋ねる。思入。駕かき介抱して。

〇　コレお袋樣、お心をお附けなされませ。

△　夢におそはれさつしやれたか。

母　ムゝ、そんなら、今のは夢であつたか。

兩人　とつくりと目が覺めましたか。

母　忝う御座る。夢は五臟の病ひとやら、切めて最期に娘が顏、暇乞にと思うても、足腰も叶はゞこそ、辻駕に助けられ、こゝまで來たも夢うつゝ。（ト思入あつて。）お杉や〳〵。コレ駕の

△　衆、あれは何處へ行きました。

○　今向うへ、大勢の人が見えましたゆゑ、今日の科人ではないかと、見にゆかれました。

母　シタガ、モウ歸られませう。

△　イヤナニ駕の衆、戻りにも又頼まう程に、ちつとの間、何處ぞに休んでゐて下され。

○　ハイ／＼畏りました。

母　さやうなら、そこらで一杯やらかして參りませう。

△　コレ／＼お杉に會はしやつたら、早う來いと云つて下されや。

母　ハイ／＼さう申しませう。

　　頼みましたぞや。

ト駕やは駕をかたげて下手へ入る。

母　ほんにマア思ひがけない今の夢、アノ仰山な御殿で娘と吉三樣、雛樣事の睦しう女夫にしたその悦しさ。覺めればそれに引變へて、モウあそこに見えるが鈴ケ森。エヽ今の夢が百年も、何故覺めずに居てはくれぬ事、殘り多いわいなう／＼。いつ何處へ行きやつても顔見るを待ち兼ねてゐたけれど、今日は可愛や娘が顔、見たらこの世の別れぢやと思へば、いつそ死にたいわいなう、ほんに世間の喩への通り、盗みする子は憎からで、繩かける人が怨めしいわいなあ怨めしいわいなあ。コレマア杉は、何をしてゐる。杉イなう／＼。

ト呼ばりながら、しほ／＼として下手へ入る。矢張波の音、時の鐘になり、武兵衛尻からげにて旅狀箱を持ち走り出る。後より、十作、序幕の形にてこれを追駈け出て來り、武兵衛を止めて。

十作　雲を霞と鎌倉より、逸散走りの急ぎの狀、思ひがけなく横合から、引摑んでコリヤア何處へ。

武兵　仔細は云はずと、駒込の寺で見かけた青侍、何か樣子の有りさうな、狀箱ゆゑに、此の武兵衛が。

十作　盗人ならばそりやア目違ひ、命にかけて捲き上げても、金にはならねえ、その狀箱、いらざる事に骨折らずと、きり／＼身共へ返して行け。

武兵　金になつてもならねえでも、目にかゝつたら何處までも、この狀箱はこつちのものだ。

十作　さう云や、うぬを。（ト拔きかける。）

武兵　どつこい。

トこれより、誂への鳴物になり、此の狀箱をかせに、兩人世話立あり、トヾ花道へ追駈け入る。波の音になり、黒幕チョンと切つて落す。

鈴ヶ森の場　本舞臺向う眞中に髭題目の大石塔、此のあたりに振よき大樹の松、こゝに供養塔婆を立て、うしろ淺黄幕、左右竹矢來、嚴しく結ひ廻し、好き所に突棒刺股かざり附け、舞臺先一面に打寄の波板、すべて鈴ヶ森の體、波の音にて道具留る。

ト向うより、見物の仕出大勢、捨臺詞にてあちこち見廻して下手へ入る。此の仕出の後より、富の者傳吉好みの形にて出て來る。

傳吉　アノお袋やお杉が、暇乞に來たさうだが、雜踏で怪我でもせにやあよいが、何處に來てゐる事やら。

ト舞臺へ來て、あちこち見廻し、上の方へ入る。時の鐘を打ち上げ、時の太鼓になり、向うより、仁田四郎、軍藏、野袴ぶつさき羽織大小にて十手を持ち出て來り、黑股引黑羽織の侍四人附添ひ直に舞臺へ來る。

仁田　軍藏殿、今日はお役目御苦勞に存じまする。

軍藏　何の〳〵、しかしお七めが飛んだ事を仕出して、貴殿にも何かと御苦勞千萬。

仁田　役目なれば、是非ない事では御座れども、未だ年端も行かぬ娘、不便な事とは思し召さぬか。

軍藏　ナニ不便な事が御座らう。大それた科人なれば、若輩の者でも成敗致すは世上へ見せしめ。そウうせさうなもので御座る。

仁田　最早や、參るに程もあるまい。暫時の間。

軍藏　相待ちませうか。

ト兩人床几にかゝり控える。上手の太夫座の張物を打返す。これに、竹本連中居並び、上るりになる。

〽うき事の多かる故に、浮世ぞと、誰かは名づけそめぬらん、任せぬ戀の是非なくも、憐れなるかや、お七こそ。

ト上るりに成り、東の揚幕より、お七振袖扱帶の形にて、襟へ水晶の珠數をかけて、縛られしまゝ馬に乘せられ、仕出警護の役人大勢附き添ひ、中の間の歩みより花道へかゝり。

〽よしなき事を仕出して、身を捨札に罪咎も、朝の露と消えて行く、死出の旅路や町々の木戸は儚き一里塚、急がぬあの世近づけば、この世はあとになりふりも、島田つやなき束ね髮、襟にかけたる水晶の珠數の玉々、云ひ交はす未來の契り、長房と切めていまわの力草、南無妙法蓮華經々々々々々々々、二八の花も仇嵐、盛りもまたで散りて行く。

お七　ト此の文句にて、花道の眞中へ留る。

御見物の皆樣へ申上げまする。若いお娘御樣をお持ちなされましたなら、隨分早う御緣におつきなされませ。今かういふ身になつては、どうも爲やうは御座りませぬ。又お娘御樣方は、此のお七がよい見せしめ、親の許さぬいたづらやなぞ、必ず〱遊ばすな。果はかうした淺間しい、恥かしい名を流すのも心柄、不便な事ぢやと思し召し、只一遍の御回向願ひ上げまする。

へ賴む手さへも縛り繩、顏さし入るゝ懷を、洩れてながるゝ泪橋、引かるゝ綱のいつとなく、隙行く駒の鈴ケ森、最期の場にぞ着きにける。

ト このうち、かすめて波の音。

富藏　それ。お七めを引擦りおろせ。

皆々　ハツ。

ト お七を馬より引降し、眞中へ引据える。

仁田　コリヤ七、最前屋敷で申し渡せし通り、觸れ置きたる法度を犯し、櫓の太鼓を打し科、女童とて赦されぬ政道の表、何事も宿業と思ひ諦め、いさぎよう所刑をうけよ。言ひ殘したき儀もあらば心置かずと申し殘せよ。

お七　へ仁慈も厚き詞の末、お七はおもき顏をあげ。

年端もゆかぬ身をもつて、御法度を背きし故、皆樣へ御苦勞かけ、殺されますも心から、言ひ置く事はなけれども、せめて名殘にたつた一目。

へそれと云はねど、親よりも逢ひたい見たい戀しい顏、若しやとばかり、延び上り、延び上りても竹垣の、隙間がくれの人群に、目は泣き腫れて見えわかぬ。

ト 此の時、下の方より母走り出るを、傳吉、お杉止め乍ら出て來り。

母　コレお七ィなう。

お七　ヤかゝさん、よう來て下さんしたなあ。

ト 寄らうとする故、引き据える。

お杉　杉も來て居りまする。

母　一生の別れぢやもの、來いでよいものかいなう〱。」

傳吉　お七さん、傳吉だ〱。

ト 思はず三人お七が傍へ寄る。侍捧にて止める。

軍藏　ヤイ〳〵かしましい。ソレ三人共引擦り出せ。

皆々　ハア。

　ト侍皆々立ちかゝる。これを止めて。

仁田　アイヤ〳〵軍藏殿、お控へなされい。これが逆賊謀反と云うではなし、身寄りの者の暇乞、暫の中はわれ〳〵が料簡。

傳吉　ハイ〳〵仁田樣へお願ひ申します。迚もの事に親子の者へ、何卒末期の水盃、御免なされて下さりませうなら、ハイ〳〵有難う存じまする。

仁田　ナニはしかれ、願ひに任せ云ひつけてくれう。ソレ侍衆。

侍　ハツ。

　ト手桶に柄杓を添へて、眞中へ持つて來る。

仁田　心靜に、すゝめ遣はせ。

傳吉　エヽ有難う存じまする。

　トこれより、床の合方になり、傳吉水を汲んで、母の傍へ持つて行く。

　サアお袋さん、お前飲んでお七さんへ。

　ト思入。これにて心付いて。

母　そんなら、これが、忠常樣のお情で、親子一世の水盃。

　ト此の時、傳吉柄杓をお杉へ渡し、飲ませろと云へど、お杉腹が立たぬ故、傳吉介抱することあり、お杉漸く母に一口飲ませ、思入にて上の方へ持ち行き、お七俯向いてゐる故。

お杉　サアお七さん〳〵。

　トこれにて、お七顏を上げる。

お七　オヽ杉。

　ト兩人顏を見合せ、泪となつて泣き落す。

お杉　お七さんの心では、まだ誰やらと盃がしたからうと思へば、それが、それがおいとしいわいなあおいとしいわいなあ。

母　同じ事なら、此の水をほんの酒で盃事、お七が飲んで吉三さんへ差すやうな事ならば、さぞ嬉しからう。

〽かなしいうき目見る事か、可愛の者やとばかりにて、咽びなげくぞいぢらし。

傳吉　エ、コレ一寸なりと吉三さんに。

お七　ア、モウ云うて下さんすな、聞く程戀しい吉三さん、目先に着いて、未來でも。

〽迷ふは、あなたの事ばかり。

わたしが死んだその跡へ、若し御座んして淺間しい形を見てなら、さぞや愛想が盡きようかと、わたしやそれが悲しう御座んすわいなあ。

〽今死ぬる身の今迄も、おぼこ娘のあどなさを、聞く親始め諸見物、一度に降らす涙の雨、濱邊の水も增るらん。

軍藏　ヤアべん〳〵と時刻が移る、早くお七を成敗しろ。

仁田　いつまで云つても盡せぬ名殘。

皆々　きり〳〵覺悟。

三人　ハア、。(ト泣き落す。)

〽惜しや、若木を緋櫻と、浮名を末に殘しける。

ト侍皆々を突き退け、お七を引立てる。此の時、向うばた〳〵にて、侍十作麻上下股立にて、赦免状を竹の先へ挾み、これを持つて走り出て來り。

十作　まつた〳〵はやまるまい。鎌倉御所の嚴命にて、罪を犯せしお七ながら、戀故法度破りし科、死罪を赦し、島といふ心をもつて、湯島へ流罪、即ちこれに赦免状。

ト十作が持つたる状へ手をかける故、拂ひ退け、仁田へ渡す。仁田は披き見て。

軍藏　ナニ赦免とな。

仁田　まことにコリヤこれ赦免状、お七が命は助け遣はす。悦べ〳〵。

皆々　エ、有難い。

ト皆々思入。軍藏ウムトお七へ思入。仁田これを止めて見得。

仁十　めでたい〳〵。

傳吉　先づ今日はこれぎり。

目出度打出し

戀音便紋東白絲

こひのたより もんどしらいと

戀音便主水白糸

序幕　麹町貝坂殺しの場

役名　鈴木主水、下部市助、山田文吾、仲間有平、淸瀧の若徒佐五平、佐藤源左衛門、奴角助、白糸の母淸瀧等。

麹町貝坂殺しの場　本舞臺三間の間。一面の柵矢來、下手柳の立木、日覆より同じく釣枝、共に滿月を引出し、總て麹町貝坂の體よろしく飾りつけ、こゝに素見の仕出、靑山邊の遊人○□△×の四人、おもひ〳〵何れも淸流し、駒下駄、道樂者の拵にて立ち掛りゐる。禪の勤にて幕開く。

○　時にどうだ、いつも宿は賑やかぢやあねえか。

□　さうよ、その中にも、あの橋本屋は別に忙しいやうだな。

△　そりやあその筈よ、あそこの內には、吉原から住替に來た白糸といふ、評判の女郎があるか

らよ。

× 縦へ評判な女でも、人の女ぢやあ仕方がねえや、でゝふくでも俺に惚れてゐると思へば、可愛いゝからの。

○ 株で女の惚氣を云やあがら、俺だつて、浦賀にゐる時分は、隨分小色の一つ位はした事もあらあ。

□ 誰が何といつても、俺の女が一番達引があつたらう。この間も堀の内の歸りの客人が麥こがしを持つてゐたのを、そつと盜んで俺のところへ持つて來て、今夜は廻しがあつて忙しいから、明方まで來られないから、退屈だらうによつて、麥こがしを持つて來たから、これでも喰べて待つてゐておくれ、と置いて行つたから、思ふさま喰つたところが、口が腫れるやうにひりつくから、おかしな麥こがしだと袋を見たら、新宿の名物七色唐辛と書いてあつた。

三人 ハヽヽヽ。

△ コウ〱そんな惚氣ばかり云はずに、何だ、たれちんにおごればいゝ。

○ いつもの茶飯屋はまだ逢はねえな、今夜はどうしたのだらう。

□ オイ〱おごるなら、茶飯より、すいとんの方がいゝぜ。

○ ナニおごるものか、俺が喰ふのよ。

△ 三軒家へ行つたら、いつもの天麩羅があるだらう。

○ 天麩羅なら安心だ。

△ 何故〱。

○ 唐辛と間違える氣遣ひはねえからよ。

皆々 ハヽヽヽ、サア行かう。

ト皆々上手へ入る。あとしつとりした合方になり、清瀧屋敷母の拵、長合羽旅形、佐五平若黨にて附添ひ出て來り、花道に止る。

清瀧 ナント佐五平、噂に聞いたこの東都、繁華な事ではないかいなう。

佐五 左樣で御座ります。始て參りましては方角さへも分りませぬて。

清瀧 アヽ、なりゆきとは云ひ乍ら、あのお糸が不仕合、幼い時より人手に渡り、何國の浦にをる事やら生死の程も知れぬ故、案じ煩ふ此の年月。ふとした便りに迎ひの文、取りあへずそなたをたよりに、こゝまでは來りしが、新宿とやらはまだ餘程あらうかいなう。

佐五 後の茶屋で承はりましたれば、まだ一里の餘もあるとの事で御座ります。

清瀧　空合とても雨の模樣、少しも早う急ぎませう。

佐五　サアおこしなされませ。

ト雨八舞臺へ來り、清瀧思入あつて、癪の起りしこなし。

清瀧　アイタ、、、。

佐五　これはどうなされました。

清瀧　あいも變らず、いつもの持病が、胸先へ。アイタ、、、。

佐五　これは困つたものぢや、折悪しう、あたりに人家とてもなし、マアお氣を確りお持ちなされませ、ドレ擦つて上げませう。（トよろしく介抱する。）どうで御座りまする。少しは宜しう御座りまするか。

清瀧　ます／＼強うなるわいなう。

佐五　それは困つたもので御座りまする。どう致しませう。只今通りしなに、この二三町後に、あなた樣のお合藥が看板に見えました。一寸行て取つて參りませうか。しかし、このお苦しみを見捨てまして。

清瀧　イヤ／＼大事御座らぬ、きつう悪くならぬうち、大儀ながら、なるたけ早う行て、取つて來てたもいなう。

佐五　左樣なら參りませうが、アヽこゝも氣遣ひ。

清瀧　イヤ／＼手延びになつては、病ひの障。

佐五　とは云へ、これを見捨てゝは。

清瀧　少しも早う。

佐五　直に行つて參りませう。

ト心殘して、佐五平向うへ入る。

清瀧　ほんにマア普代の家來と云ひ乍ら、親切なあの佐五平。おさない時に別れしお糸、年月焦れて居たりしが、やう／＼在所も知れ、はる／＼と尋ね來て、今宵逢はれる嬉しやと、心緩みしそのせいなるか、一倍強い此の癪氣、胸先へさし込んで、アイタ、、、。

ト宜しく思入あつて、誂への鳴物になり、向うより佐藤源左衛門、後に曾平太、軍八の二人懸侍の拵、角助奴にて附添ひ出て來り、花道よき所に止る。

源左　何れも御覽なされい、大分空合が悪うなつて參つたやうぢや、急がうでは御座らぬか。

曾平　左樣で御座るて、イヤ角助、先刻そちへ先生が仰りつけ、萬々首尾はよからうな。

角助　下郎の角助、憚り乍ら抜かつた者では御座りませぬ。お旦那の御指圖にて、あの主水めに耻面かゝせる一つの手段、かの讀賣を相頼み、白糸口說となぞらへて、新文句を拵へ、主水めが近邊を唄ひ歩かせ、耻面かゝせ、女房に角を出させる豫ての魂膽。

會平　またわれ〴〵共兩人は、これから直に立ち戻り、大木戸口に頑張つて、主水の歸りを待合せ、喧嘩を仕掛け、その上で、あの主水めを仕舞うて取り、

軍八　先生の日頃の意恨を、晴させまする所存で御座る。

源左　イヤ頼しき御兩所の思召、首尾能くそれがなる時は、あの白糸は身共次第、拙者はこれより平河の社内の茶屋で待ち合はさん。必ず共におぬかり召さるな。

兩人　心得ました、左樣御座らば、源左衞門殿。

源左　御兩所。

兩人　後刻吉左右。

源佐　相待ち居るで御座らう。

ト捨臺詞にて、會平太、軍八の二人、角助附いて向うへ入る。源左衞門後見送り。

是れでよし〳〵、主水めが自滅の知らせを、いつもの茶屋で飲み待ちとしようか。

ト舞臺へ來て、清瀧の苦しみを見て。

確か女の聲だが、そこで唸つて居さつしやるは、どうか爲すつたかえ。

清瀧　アイタ、、、、。

源左　オヽ婆さんのやうだが、怪我でもしたのか、どうしたんだえ。

清瀧　何誰樣かは存じませぬが、好う問うて下さりました。アイタ、、、、。

源左　俺あ、また犬が寢てゐると思つた。ハヽア癪だな。

清瀧　ハイ遠方より、はる〴〵と參りました者で御座ります。知らぬ土地の夜道故、心が急きまする程、持病の癪がさし込みまして、一足も歩かれませぬ。

源左　しつかりしねえ、身共なども覺えがあるが、旅へ出て病ふ程、心細い者はねえものだ。ドレ擦つてやらう。（ト擦り乍ら、癪を押へて。）若けえ女と違つて、年寄ちやあ色氣がねえなあ。

ト懷の胴卷の金が手に觸る故、源左衞門思入あつて。

おつかあ、此の固いものは何だえ。

ト清瀧喫驚して。

清瀧　ハイそれは金。

源左　エ。

清瀧　イヤ觀音樣のお守で御座りまする。

源左　ハヽア觀音樣のお守か、有難さうな守だなあ。

清瀧　お蔭樣で、もう宜しう御座りまする。好いお方にお目に懸り、存じ掛けない御介抱に預りまして、やう／＼人ごゝちになりまして御座りまする。

源左　そいつあ好かつた。さうしてお前、何處の宿屋へ行くのだ。先が知れてゐるのかえ。

清瀧　ハイいつに參つた事は御座りませぬが、四谷新宿とか申す所まで參りまする。

源左　そいつあ餘程有るが、身共も今新宿から歸る者ぢや。

清瀧　さうして、こゝは何といふ所で御座りまする。

源左　こゝは麴町の貝坂といふ所だ。

清瀧　是より新宿まで、道程は何程で御座りまする。

源左　新宿は、上か下か知らねえが、小一里もあらうか。

清瀧　それはまあ餘程の道程、その新宿に橋本屋と申しまする、女郎屋が御座りまするか。

源左　ナニ橋本屋を尋ねるのか。その橋本屋といふのは、新宿一番の流行る店よ。さうして、その橋本屋は內證へでも用があるのか。

清瀧　イエ／＼そのうちに、吉原から住替とやらに參りました、白糸と申しまする女郎が御座りまするが、あなた御存じは御座りませぬか。

源左　知つてゐる段か、そりや身共がぞつこん、イヤ極く心安い女よ。さうして、お前は遠國から、はるばる尋ねて來たと云ふが、白糸の叔母か、おふくろか、お前は何だ。

清瀧　かやうに、御親切な御介抱を受けまする上は、何をお隱し申しませう。恥しい事ながら、私は白糸が實の母、幼い時に仔細有つて別れまして、それから行方が知れず、ふとした便りに、去年の暮やう／＼と在所も知れ、屆いた狀に、賴しい人に馴染んで、親の敵を、イヤサ堅い約束をした故に夫婦となれば、お前を呼び安樂に養ふ程に、尋ねて下つてくれよとの事、それ故、わざ／＼尋ねて參りましたので御座りまする。

ト始終を聞き源左衞門思入あつて。

源左　モシその賴しい人といふは、鈴木主水と云やあしねえか。

清瀧　どうしてそれを御存じで。

源左　サア知つたと云ふのは、オヽさうだ。何を隱さう、恥しながら、その白糸と二世までもと、約

束した鈴木主水とは、俺がことさ。

清瀧　ア、、そんなら、あなたが。

源左　オ、サ青山邊に、わづかな住居、鈴木主水といふは、身共がことさ。

清瀧　さうとは知らず、深い緣やら、こゝのところで、お目に懸つて御介抱。えゝ有難う御座りまする。

源左　常々から、あの白糸の話で、詳しく聞いて知つてゐるが、能くまあ尋ねて來てくれたなあ。

清瀧　白糸からの手紙にも、細々とあつた故、つぶさに知つたあなた樣の御親切、口惜しと思ふ仇まで尋ね出して、助太刀なし討つてやらうとの思召、幸ひ手懸りありし故、はる〴〵參りましたわいなあ。

ト これを聞き、源左衞門喫驚こなし。

源左　ナニその仇の手懸りとは。

清瀧　詳しい樣子は後での事、仇といふは國鎌倉と隔たる故、顏は知らねど同家中、正しく佐藤。

源左　源左衞門か。

清瀧　エ、どうしてそれを。

源左　その源左衞門は俺さまだ。

清瀧　エ、、、、。

ト 上手へ清瀧行くを引捉へ、下手へ蹴飛し、宜しく見得。

源左　もうかうなつた上からは、何もかも云つて聞かせる。引導代りに能く聞け。（ト合方になり。）忘れもしねえ三年後、大學樣に賴まれて、千葉の殿をば押籠めて、大學樣の御子息たる、力樣を世に立てんと、家中の武士も大半お味方、中に邪魔なは國家老、まつた主水が親父たる鈴木主膳の兩人を、罪に落して自滅させ、豫ての望みを叶へんと、うぬが夫をぶつ放し、寶の村正奪取つて、主膳を罪に落した故、あらまし整ふ我が大望。うぬに仇と見出されては、生けては置かれぬ、覺悟しろ。

清瀧　さてはおのれが源左衞門よな、云はうやうなき極重惡人、年は寄つても前司が妻、やはかおのれに。

ト 懷劍にて突きかくる。一寸立廻り、その手を押へ。

源左　エ、喫驚した、出し拔けに突きかけて、この死にさかり婆あめ。いけしやらくせえ刄物三昧、積る惡事も麴町、深い企みの有りとも知らず、娘を尋ねた貝坂で、めぐり逢ふたは運の月夜の

旅がらす、可哀さうだが脊中に腹、念佛ほざいてくたばつてしまやあがれ。

清瀧　さういふおのれを。

ト又振り解いて、突いて懸るを打落し、したゝかに切り下げる。

源左　どうだ手向ひしねえか。此の手を動かさねえか、ヤレかはいさうに、しかし金銀は浮世の寶だ。ドレ〳〵暫く預つてやるべい。（ト懐中より財布を取出す。）

清瀧　チエヽ口惜しやなあ。（ト合方になり。）去年の冬娘の方より便りの狀に、嬉しと思うてはる〴〵と尋ね來りし甲斐もなう、今一里か半里にて逢はるゝ嬉しやと、悅ぶ甲斐も貝坂は、誰にあはびの片思ひ、主水殿を力と賴み、敵を打たんと思ひしに、返つて此の身が返り討とは、エヽ口惜しい。佐五平は何してぞ、佐五平ヤアイ〳〵。

源左　モウ世迷言はそれ切か、ドレ引導を渡してやらう。

清瀧　アレエ〳〵。

ト金を懐中して刀を持ち立上る。清瀧よろぼひ乍ら又切つて懸る。突廻し、脇腹を貫き蹴返して上に跨り、止めをさす。ト月隱れる。此の時思はず財布を落す、足音する故一寸小隱れ。上手より主水着流し大小にて出て來り財布を拾ふ。下手より山田文吾野半纏旅形、後より仲間有平箱提灯を持ち出て、財布をカセに四人世話だんまり、よき程に下手より、下部市助赤合羽竹の子笠を被り、紺看板奴の形にて、澤庵と竹の皮包をさげて、この中へ入り宜しくあつて、トゞ財布は源左衞門の手に入る。花道よき所まで行く。市助清瀧の死骸に躓き恟驚して、花道の源右衞門を見て。

市助　人殺し。

源左　エヽイ。

ト飛礫を打つ、是を木の頭。

市助　ではないイ。

トふるへる思入。主水文吾有平花道を見込み、源左衞門向うへ走り入る。合方宜しく。

拍子幕

二幕目　百人町主水邸の場

役名　鈴木主水、息幸次郎、下部市助、侍會平太、同軍八、讀賣歌八、三味

鈴木主水

線彈來助、刀屋甚七、太皷待夢中、主水女房お安、娘初音等。

百人町主水邸の場　本舞臺三間の間常足、正面石摺の襖、佛壇、納戸口、上手一間の障子屋體、いつもの所へ門口、總て主水邸の體。こゝにお安女房の拵にて針仕事をしてゐる、下手に市助前垂の拵にて藁を打ち縄を作つてゐる、門口に家主、古着屋、米屋掛取にてわや／＼いうて居る、市助言譯してゐる。此の見得通り神樂にて幕明く。

市助　御尤もさまで御座ります／＼。

三人　どうでも今日は片を着けて貰ひませう／＼。

市助　御尤もで御座りますれど、奥樣もあれにお出なされますれば、どうぞお靜かになされて下さりませ。

家主　いや／＼縱へ誰が居ようが。

古着　貸した物を貰ひに來るに、何遠慮がいるものか。

米屋　さうとも／＼何でも今日は貰はねばなりませぬ／＼。

市助　左樣で御座りませうが、永うとは申しませぬ、明日の夕方近くには間違なく、御皆濟致します程に、それまでの所を何分共に。

家主　イヤなりませぬ、明日の事はさて措き、一時も待つ事はなりませぬぞ。

市助　お腹立は重々御無理とは存じませぬが、主人も留守の事に御座りますれば。

古米　イヤなりませぬ／＼。

家主　コレ／＼御兩人、マアお待ちなされませ。然しながら主水殿も留守の事なりや、今といふ譯にも行きますまい、殊に市助殿もお主を大事に思うて、あのやうに云はつしやる事だから、明日というても間もない事、マア待つてやつては下さらぬか。

古着　大屋さんが云はしやる事なれば、仕方がない。待つてやらずばなりますまい。ナウ米屋さん。

米屋　そんなら、明日は間違なう頼みますぞや。

市助　左樣なら、お待ちなされて下さりますか。

三人　おいなう。

市助　エヽ有難う御座りまする、明日は決して僞りは御座りませぬ。

米屋　そんなら必ず間違うて下さるなや。

市助　左樣なれば、お三人樣。

三人　サア參りませう。（ト皆々下手へ入る。）

お安　市助々々、何をしてゐやるぞいなう。

市助　奥樣、マアチトお休みなされませ。

お安　ほんにさうしませう。それはさうと今日で、二三日お歸りなされぬ旦那殿、外を内なる爲され方、まだしもそなたが親切にしてたもるゆゑ。

市助　あの奥樣の仰る事はいなう。下郎はどのやうになりましても、旦那樣が村正の刀を御詮議なされまする、御苦勞に比べますれば、何のこの位の事は。

お安　サアそなたが、さう親切に云うてたもる程、猶思はるゝ旦那殿、白糸とやらに浮身をやつし、紛失なした刀の事もうはの空。

市助　奥樣そりや何を仰りまする。旦那樣に限つて左樣な事は御座りませぬ。モウそのやうな事は仰りますな。

お安　それぢやと云うて。

市助　これはしたり又そのやうな事仰りまする、然し乍ら、お情の刀の日延も今明日。

お安　サアその刀が手に入らねば、親御樣には御切腹。

市助　ハテどうしたら。

兩人　よからうなあ。

ト兩人當惑の思入。向うより刀屋甚七袱紗包みの白鞘を持ち出で、直に本舞臺へ來り。

甚七　ハイ御免下さりませ。

市助　ハイ〳〵何誰で御座ります。こちらへお入りなされませ。

甚七　ヘイ刀屋の甚七めで御座りまする。

市助　ナニ甚七殿とな。これは〳〵甚七殿、ようお出なされました。マア〳〵こちらへお入りなされませ。

甚七　眞平御免下さりませ。（ト内へ入る。）

市助　申し奥樣、甚七殿が見えました。

お安　これは〳〵甚七殿、よくマア來て下さつた。マア一服喫んだが好いわいなう。

甚七　これは〳〵お構ひ下さりますな。

市助　時に甚七殿、何御用でお出なされました。

甚七　ヘイ外の事でも御座りませぬが、刀の村正一條で參りました。

市助　その村正が如何致しました。

甚七　別の儀でも御座りませぬが、村正の刀をこちらさまで、とうからお頼み故、心掛けてをりました内に、昨日私の手に入りました故、一寸お知らせ申しに参りました。

市助　何と仰ります、村正の刀がお手に入りましたとな、シテその刀は何處に御座りますな。

甚七　ヘイ即ちこれへ持參致しまして御座りまする。

市助　ドレ〳〵一寸お見せなされませ。

お安　ア、コレ〳〵市助、今聞いてゐれば、村正の刀が、そのお方の。

市助　左様に御座りまする。村正の刀が手に入りましたと、甚七殿が持つて見えられました。マア一寸御覧なされませ。

お安　それは何より、悦ばしう思ひますわいなう。

ト　お安に刀を渡す。お安見て。

ア、かういふ折に、旦那殿がお出なされたら、お目利をなされうが、何を云うてもお留守の事。

市助　左様で御座りまするわえ、下郎めもかういふ事なら、とつくり見て置けば宜しう御座りましたに、時に甚七殿、かうしては下されぬか、旦那様がお歸りなされずば、目利の程が分らぬ故、暫く此の刀を借りて置く事はなりませぬか。

甚七　そりやモウ外さまではなし、旦那様のお歸りまでとあれば、お預け申して參りませう。

市助　それは有難う御座ります。

お安　シテ此の刀の價は。

甚七　はい一文も引けませぬ所が、百兩で御座りまする。

お安　そりやあの大枚百兩。ム、。

市助　あの、これが百兩。ヘイ宜しう御座ります。旦那様のお歸り次第、下郎めが早速御返事致しませう。

甚七　左様なら確にお預け申しました。然し私はちと外さまへ寄道も御座りますれば、もうお暇いたしまする。

市助　もうお歸りで御座りまするか。

お安　マア緩としていたがよいわいなう。

甚七　有難う御座りまする、左様なれば、奥様、市助殿。

市助　ようお出なされました。

ト　甚七向うへ入る。

お安　コレ市助、今にも旦那殿がお歸りあつたら、さぞお悦びなされうわいなう。

市助　イヤモウこれと申すも、觀音樣の御利益と申すもの。奥樣。

お安　市助。

兩人　エヽ忝けない。

ト兩人悦ぶ。此の時向うより、娘初音、弟幸次郎出で來り。

初音　母樣只今歸りました。

市助　イヤこれは若樣孃樣もお歸りなされましたか。サア〳〵お入りなされませ。申し奥樣、孃樣がお歸りで御座りまする。

お安　オヽ二人共に、仲よう今迄遊んでゐやつたなう。

市助　イヤ申し奥樣、此のやうにお遊びなされたからは、何ぞ御褒美をお上げなされませ。

お安　ほんにそれ〳〵おとなしう遊んで來やつた、御褒美によいものをやりませう。

ト佛壇より菓子を取出し、兩人へ遣る。

兩人　有難う御座りまする。

初音　モシ母樣、父樣はまだお歸りは御座りませぬか。

お安　お父樣かや、お父樣はまだお歸りなされぬが、軈てお歸りなされるわいなう。二人共に穩順しうして待つたがよいぞや。

市助　左樣〳〵、追つけお歸りで御座りませう、晩うなりますれば、べいがお迎ひに參り、直にお連れ申しまするで御座りませう。

お安　これ見や、此の刀が眞實の村正ならば、少しも早うお國許へ差上げて、初音わが身にもこのやうな、窮苦しい形をさせては置かぬ、髮もしやんと結ひ直し、鈴木の家の總領娘と云はせませう。ナウ市助。

市助　さればで御座りまする。かの刀が眞實の品で御座いますれば、坊樣え、あなた樣もお遊びなされますにも、立派なお上下でも召しまして、お馬に乘つてモシはいひんどう〳〵と、此のべいがお供致してお遊ばせ申しませう。ナウ奥樣。

お安　ホヽヽ。

市助　ハヽヽ。

兩人　ハヽヽヽ。

市助　然しながら、あれが眞實の村正なれば、今というては何と、マア。

お安　主も家來も此のやうに、
市助　みすぼらしい形で、
お安　何を云うても大枚の、
市助　百兩はさて措いて、
お安　明日の煙も立ち兼ねる、
市助　これが鈴木の御家門か、
お安　市助、
市助　奥様、
お安　移れば變る、
兩人　世の中ぢやなあ。

ト兩人愁ひのこなし。向うより主水代出で來り、後より悪侍曾平太軍八附添ひ來り、花道よきところへ止り。

兩人　ヤイ〳〵待ちやあがれ。
軍八　ヤイ侍、先刻から呼んで居るのに、うぬが耳へは入らぬかえ。

曾平　啞者か聾者か知らねえが、眞人間なら物を云へ〳〵。
主水　是は〳〵、何事かと思へば、只今拙者をお呼びなされたとな。
軍八　さうよ。
主水　イヤ左様とも存ぜず、無禮の段は幾重にも御用捨に預りたい。
曾平　オ、さういふ事なら、料簡してやりもしようが、その代こなたにちつと頼みがある。
軍八　厭と云はうが、おうと云はうが、聞いて貰はにやァならねえのだ。
主水　是は又改つたそのお頼み、身に應じた事なら、なんなりと承はるで御座らう。
曾平　サア頼みと云ふは、外でもない。
軍八　こなたが通ふ橋本の、
曾平　あの白糸を、
兩人　貰ひてえ。
主人　こは何事と存ずれば、白糸の事で御座るか、そりやはや拙者が抱への女郎でなければ、橋本屋との御相談の上、どうなりとも御勝手次第。
軍八　イヤさうは拔けさせぬ、日頃床しい戀しいと、

曾平　互に起請を取交し、切つても切れぬ仲との事、

軍八　人の噂も嘘ぢやあるめえ、

曾平　なりや、どうあつても白糸を、

兩人　貰はにやならねえわ。

主水　ム、、、ハ、、、、是は又迷惑千萬、然し手前がやるまいと申したら、如何なされるな。

軍八　オ、厭だと吐しやあ、かうして貰ふわ。（ト胸倉を取る。）

主水　ハ、、左樣な事では上られませぬ。

ト一寸投げる。起き上つて。

軍八　アイタ、、こりやあ俺を投げやあがつた、モウ料簡がならぬわえ。

ト又掛らうとするを、曾平太止めて。

曾平　ハテマア待つたり／＼、今は惡い、それ惡いによつて、出直せ／＼。

軍八　イヤ料簡はならねえ／＼。

曾平　マア俺に任せて置けといつたら。

軍八　厭だ／＼。

曾平　さうでもあらうが、待つたり／＼。

ト捨臺詞にて、止め乍ら宜しく向うへ入る。主水あと見送り。

主水　ハ、、いづれの武士か知らねども、あれらに祿を與へ置く主人の顏が見らるゝわえ、ハ、、。ドリヤ參らうか。（ト本舞臺へ來て、思入あつて。）奥、市助、今戻つたわい。

ト市助見て。

市助　オ、是は／＼旦那樣、只今お歸りで御座りましたか。奥樣、旦那樣がお歸りで御座りまする。

ト主水上手へ住ふ。市助煙草盆など出す。お安見て。

お安　只今お歸りで御座りましたか。さうして一昨日から何へお越しなされましたえ。

主水　さればさ奥、市助も聞いてくりやれ。一昨日、淺草觀音へ參詣致して、罷り歸らんと存ぜしところ、そちも存じをる岸田要藏殿にお目に掛り、久しく面會致さぬ故、兎も角も屋敷へと無理無體に誘はれ、數の珍味で一獻催し、そのまゝ岸田に醉ひ伏して、夜明方より雨に成り、よんどころなく又催し、馳走になつてゐるうちに、例の長話、やう／＼只今に相成つたわい。

市助　左樣で御座りましたか、それは反つて御迷惑で御座りましたなあ。然し旦那樣、先刻お出入の刀屋甚七が參りまして、豫てお頼みの村正の刀が手に入りましたと、持參致しまして御座りま

する。

主水　ナニすりや村正が手に入りしとて、持參致したとな。

お安　私どもには分りませぬ故、甚七殿に譯いうて、あなたのお歸りまで、預り置きまして御座ります。

主水　何は兎もあれ、その刀、少しも早う。

市助　ヘイ〳〵只今お目にかけまする。それ奥樣。

ト お安以前の刀を出し、

お安　即ちこれで御座りまする。

ト見せる。主水改め見て、

主水　ハテ好く贋せたわえ。

兩人　如何で御座りまする。

主水　コリヤまつかな贋物ぢや。

市助　スリヤあの是が贋物とな。

主水　如何にも。

兩人　あの是が。ム丶。

初音　お父樣、ようお歸り、

初幸　なされましたな。

主水　オ丶、初音幸次郎も穏順しう、好う留守してゐやつたなう。

お安　モシ旦那殿、此の刀が贋物なれば、仕樣模樣も御座りませねど、紛失なしたる大事の村正、早う御國許へ差上げねば、鈴木の家名も失ふ道理。

主水　何さ〳〵、それなれば氣遣ひ致すな。今日知邊の方へ參り、問答を致したところが、ちと心當りもあれば、案じる事はないわさ。

お安　それぢやと申して、御詮議の日延も、もはや今日明日限り。

主水　ハテ拗う申すな、明日中に手に入れて、本地へ歸參致して見せる。

市助　スリヤ明日中に、お前樣が。

主水　いかにも。

兩人　ハテナア。

ト此の時、揚幕の内より、讀賣の歌八、來介。

兩人　これは新版新文句、上下揃つて文久六つのお手取ぢや。

ト兩人謡への拵にて、捨臺詞いひ乍ら、門口へ來て。

〽花のエヽ、花のお江戸のその町々に、さても名高き評判が御座る。ところ四谷の新宿邊に軒を並べて、女郎屋がござる。紺の暖簾に桔梗の紋は音に聞えし橋本屋とて、數多女郎衆がみな玉揃ひ、中に全盛白糸樣は、年は十九で當世姿、立てば芍藥、坐れば牡丹、われもわれもと名指して上る。別て、お客のあるその中に、ところ青山百人町に鈴木主水といふ侍は、女房持にて子供が二人、二人子供のあるその中で、今日も明日もと女郎買ばかり、見るに見兼ねて女房が意見。

ト此の内主水じゆつなき思入。お安市助氣の毒なるこなし。主水思入有つて。

主水　コリヤ〳〵市助、やかましいあの物貰ひ、手の內くれて早く歸せ〳〵。コレ奥、幸次郎が居眠つてゐる。奥へ連れていて寢さしてやりやれ。

ト又三味線を彈き、唄ひ出す。主水困るといふこなし。

歌八　是から、肝腎のところで御座ります。それ彈いたり〳〵。

來介　合點だ〳〵。（ト彈き出す。）

主水　エヽ情ない。

〽これさわが夫、好う聞かしやんせ。わしが悋氣でやくのぢやないが、二人子供は伊達には持たぬ、云へば直ぐさう腹立紛れ、またも出て行く女郎買姿。どうで終の六段目には、連れて逃げるか心中するか、二つ一つの思案と見ゆる、ヤンレエ。

市助　エヽやかましいわえ、そんな小唄聞きたうない、通れ〳〵。

ト兩人内の中へ通らうとする。市助止めて。

エヽ通れと云ふのは、内の中へ通れと云ふのではない。そつちへ通れといふ事だ。

歌八　大きにお世話だ、往來を通るに、お前の指圖は受けねえわ。

來介　構はねえから、もつとこゝで唄ひ始めようぢやあねえか。

歌八　それがいゝ〳〵。

市助　アヽこれ〳〵又唄はれて溜るものか。（ト懐から錢を出し。）サア是をやるから早く歸れ〳〵。